

柏原與兵衛花押

秋山忠兵衛花押○出府ノコト、寛政重修諸家譜、井伊家譜、所見ナシ、

〔慈性日記〕二 九月廿六日、

一井掃部殿昨日御歸城候、半介殿、内藏丞殿、文よて申入候、見舞の事ハ無用との事候、

廿八日、未明こ彦根へ罷越、掃部殿へ御祝義音信申候、

六月小 盡
戊午朔

一日、戊午、日食、

〔土御門泰重卿記〕二 六月一日、戊午、晴、日蝕、曇氣之故、盈虧不分明候、

〔孝亮宿禰日次記〕 六月小一日、戊午、晴、今日日蝕、寅卯十二分云々、

〔梵舜日記〕二十 六月小一日、戊午、陰、○中次日蝕、寅半刻、不見之也、

三日、庚申、待、

〔土御門泰重卿記〕二 六月三日、庚申、晴、飯後從禁中、庚申七人待之衆こ候

間、精進仕、可致伺公候由御觸、畏之由御返事、午時分朝參候、七人待之衆、正親三條、四辻、阿野、中院、中御門宰相、高倉、予等也、御鬮取、唐布一段拜領、皆布七色こ、名相ウハる也、

○庚申待ノ本年中ニカ、ルモノ、便宜左ニ合致ス、

〔土御門泰重卿記〕二 十二月四日、晴、○中從禁中召候故、俄朝參申候、○中略

明日庚申可致伺公候由、直こ仰也、

五日、庚申、雨天、今朝俄こ振舞之用意申付之、桂山、同弟子一人、小池十右衛門被來候、振舞相伴申候、頓而罷歸被申候、予行水、御ときこ朝參仕候、四辻、阿野

父子、高倉、富少路、廣橋辨、右衛門佐、飛鳥井中將雅胤朝臣、予等也、棋、將棋等之御遊山也、夜半過ニ御鬮取也、予綿三把拜領也、

〔附録〕

〔言緒卿記〕 十月五日、庚申、天晴、

一 庚申待ニ來臨之衆、老母、御茶々、妙清等也、

六日、辛酉、陰、雨、

一 庚申待之御供、寶輪院ヨリ來了、

十二月五日、庚申、雨、

一 庚申待ニ被來衆、老母、妙清、竹、イカハ、

〔時慶卿記〕

四十六

十月五日、天晴、夜雨、

一 庚申守、帥殿ノ勝來儀、被泊、清兵衛、同長野殿モ、

十二月五日、雨天、一 庚申也、一 姫君御方、少納言亭へ御成、勘ケ由局等庚申ニ參集、及ニ番雞、

〔梵舜日記〕

二十

四月二日、晴、申待也、次柳原淨喜來、茶碗二ツ持來也、

六月三日、晴、申待、喜庵來也、宵程恭興行、權少、右京助來、

諸家ノ庚申待

庚申待ノ御供

庚申守

申待

直茂病ム

耳ニ腫物ヲ生ズ

京都ヨリ醫師ヲ招ク

十月五日、晴、齋僧來、申待、於當院、淨宗、喜庵、權少來、將基已下、夜計遊也、入夜雨降、

十二月五日、曇、○中次申待執行、

肥前佐賀城主鍋島勝茂ノ父直茂卒ス、

〔本光國師日記〕

四十二

後三月廿日、鍋島信濃殿三月朔日之狀來、加賀殿煩

之儀申來、勝屋勘右衛門持參、則對面候也、

〔東武實錄〕

四

六月三日、鍋島加賀守直茂卒ス、八十一歳、

〔肥前鍋島家譜〕

始龍造寺

元和四年六月三日、直茂八十一歳、テ卒ス、

〔鍋島直茂譜考補〕

十

元和三年丁巳ノ夏ヨリ、公御耳ニ小キイホ出來、

朝夕御手ニ掛リ、御氣味惡キトテ、小刀ニテコサキナト被成候へ、不失、或人申上ルハ、蜘蛛ノキニテ卷候へハ、切レ落ル物ニテ候ト申上ル、公即御卷セ候へハ、一七日ノ内ニ落去リ、御悅不斜、然レトモ其後落跡ヨリ汗流レ出ル事不止、種々御療治被遊候へ、反力下向シ无御平愈、外科、本道療治ヲ盡ストイヘ、反力下向シ无驗、自京都慶祐法印迄被招呼候へ、其甲斐ナク、漸々ニ御耳ノタリ爛レ、大キニ御痛ミアル、

元和四年六月三日

三七二

此頃勝茂公江戸ヨリ鍋島生三(道長)へ被送御書ニ云、舊記、

一書申遣候、加州御耳之瘡過半平愈之由承、何か以目出度存知候若
少も相殘體こ候者、上方外科之上手衆一人差下、療治させ可申候、炎
天時分御再發こて、御平愈彌延引可申と、校量申候條、有體急度勝
屋采女所迄申越尤候、外科衆下し候共、深敷造作へ入間敷と存候間、
其意得可然候、委九郎兵衛可相達候、恐々謹言、

元和三年
卯月十八日

信濃守
勝茂御判

生三

猶以慶祐此中か差下可申と存候處、すぎと御快氣之由、其許か
到來有之由、勝屋采女らと申越候條、右之段先其方迄尋こ遣
候、少も相殘體こ候へ、炎天氣遣候條、有體早々采女迄可申越
事肝要こ候、以上、

公ヨリ江戸紀伊守殿(元茂)へノ御書ニ云、舊記、

幸便之條、一書令啓候、我等腫物、慶祐養生就被申、過半相調、今少こ成
候、此分こ候へ、頓而すぎと平愈可申と存候、今程機相も別而よく、

食あと一段進こ申候、何とるさも無き之候間、可心安候、仍小河四
郎兵衛用所候間、爰元へ十四五日逗留こきと差下可被申、必相待候、
將又其元作事少々取立候由承、先以可然存候、此方何も無き何事、本
丸、三ノ丸別而息災候、先日傳兵衛尉被差上候こ委申遣候間、定而や
うて其元參著申、萬可被申達候、猶期後音、不能多筆候、恐々謹言、

十月十二日

加賀守
直茂

元和三年
三平殿 御宿所

御逝去

一(元和)同四年、戊午、公去夏ヨリノ御耳痛、當春ニ懸ケ猶御快カラス、彌御痛ミ強
ク、汁流レ出ルま不止故、被掛御氣、厚キ紙ニテ張隠シ被置、乍然御機體ハ
少モ御衰ヘナク、同五月中旬、生益ヲ召セラレ、茄子ノシユンフ汁ヲ料理
可上ト被仰付、兼テ御禁物ニテ、第一茄子ハ不可然物ニテ如何ト申ス、公
大キニ御機嫌惡ク、無詮ま申ス物哉、數日御藥御用ヒ、禁好御撰ヒ候ヘ
トモ、終ニ無き其驗、御身ニハ毒モ藥モナシ、唯任仰候ヘト也、仍テ無き是非御
料理仕リ差上ル、入御意、澤山ニ被召上、御コナサレ被成タルト被仰、其後

元和四年六月三日

三七三

直茂死ヲ
決シテ食
ヲ斷ツ

勝茂夫人
徳川氏葛
餅ヲ進ム

生益ニ被仰聞ハ、瘡一圓御平愈ナシ、先ツ暫ク御食事被止、瘡シホムヘシ、
 其時節内外ノ藥ニテ、御養生可被成ト也、生益申上ルハ、御意ノ趣御同意
 ニ不奉存、御食事被召上候テサヘ不調、増テ御食事被止候儀、縦ヒ某奉畏
 候テモ、御上様直茂夫人石井氏陽泰院様ナリ、勝茂公御合點被遊間敷候ト申上ル、公其時生益カ
 耳ヲ御引寄、汝カ申處尤也、然レモ、乍不肖、於天下我名ヲ人知レリ、加賀守
 ハ身膚爛レ、養生不叶ト云レン事ヲ思フ故ニ、臨終ヲ急ク也、此下意ヲ以
 テ、子共女共ヘ可申聞ト、密ニ御口説被成候ヲ、生益承リ、涙ニ咽ヒ致退出
 右ノ趣御兩所様ヘ申上ル、依之何モ御笑止ニ被思召、色々御斷リ被仰上
 候ヘモ、曾テ無御承引、終ニ御食被斷候、同廿七日、御本丸御前様勝茂夫人徳川氏家康ノ養女御高源院様
 比御下ヨリ、葛餅ヲ差上ラレ、此間御不食被遊候、御上様勝茂公、其外御親
 類中被及赤面候、一口成モ被召上候ハ、御本望ノ御願ニ御座候旨、得其
 意宜ク申上候ヘト被仰遣候、生益承リ、稠ク被仰付置候ヘハ、逆モ相叶間
 敷候ヘトモ、先ツ御機嫌ヲ伺ヒ可申上ト御請仕リ、御重箱ヲ御前ヘ持出
 召置、何モ不申上罷立候ヘハ、生益夫ハ何カト御尋被成、其時右ノ謂具
 ニ申上、御念入、如此結構ニ御調進被遊候ヘモ、逆モ被召上間敷ト、唯掛御

直茂勝茂
ニ遺言ス
多布施御
屋敷

目タルニテ御座候ト申上、持入可申ト仕候時、公被仰シハ、信濃カ女トハ
 乍云、公方様ノ御姫也、忝キ御志可被召上ノ由被仰、何レモ悦ヒ御前ヘ上
 ル、大指程ノ葛餅三ツ御上リ被成、夫ニテ御氣力殊外御強ク、御物言等如
 平生、其後彌御斷食也、御食事被召上候ハ、中中御壽命ハ御長久タルヘ
 キ物ヲト、何レモ寄合、愁歎ニテ袖ヲ絞ル、右ノ葛餅ニテ御氣力付、可被仰
 置儀、今又被思召付候間、須古下總守可被罷出旨被仰候ニ付テ、下總即多
 布施御屋敷直茂ノ住居直茂ノ住居ヘ罷出、御家ノ仰置等、猶以委曲被仰聞、此旨何
 レモヘ可申達由御意也、兼テ下總ハ御親類中ノ内ニ、無御心置、爲御養生
 度々御耳ヲ御見セ被成候故、御耻不被成、其外ノ衆ニハ難爲見ト被仰、右
 ノ通り也、偕又林形、左衛門ハ御藥役ニテ、朝夕御藥ヲ上ル、同六月一日ノ
 朝被召生益、我等ニ毒ヲアタル者アリ、藥ニ毒ヲ入ルカト御覺ヘ被成
 候、致穿鑿切腹申付候ヘト、御腹立不大形、障子ヲ隔テ刑左承之、生益ニ申
 スハ、御様體御弱リ被成候ヲ、餘リ笑止ニ奉存、御藥ニ密ニ米ヲ入レ煎シ
 差上候、右仰出ヲ承リ、假初ニモ毒飼ト御申シ候ヘハ、暫時モ延引不仕、即
 切腹可仕ト、聲高ニ申候ヲ、物越ニ被聞召、重テ左様ノ儀不仕様ニト被仰

元和四年六月三日

三七六

候、○勝茂歸國ノ

公御耳病ニ付、今年、江戸紀伊守殿へノ御書二通ヲ舉ク、

秀忠直茂
ヲ慰問ス

今泉兵左衛門罷上候間、一書令啓達候、我等煩ニ付、被成下御内書候

御禮之儀、慥成使者ヲ以可申之由、去月十日之飛札、相届令披見候、

書○秀忠ノ内所見ナシ、此五日以前、鍋右馬允差上候間、不及申候、公方様依御誼、

いよゝゝ入念可致養生と存、此四五日ウキ薬與被申候、依之、それ候

處もゑり、いとみも相止、少々とし、いへ寄申候、今之分ハ、是迄

以可得驗體之様ニ候ても、再發申儀及度々候間、不いあく候へ共、先

以當分ハ右之様子ニ候、我等事ハ、極老之事ニ候間、成次第ト存候へ

共、公方様御誼誠難有奉存候、其上信州別而入念候、又ハ和泉其方夫

婦之外、歴々之子とも、いろゝゝ得快氣候様こと、たんそくノ所歎敷

存候間、何とモ今度ハ快氣申候様、入念養生可申候間、可心安候、

三月一日

加賀守
直茂

三平殿

御宿所

かき薬

勝茂直茂
ノ絶食ヲ
諫ム

元和四年六月三日

三七七

公御耳愈不申ニ付仰ラレケルハ、我等唯今迄、人ノ爲ニ好キ様ニト計

三平殿 御宿所

一書令啓達候、然者我等腫物之儀、兵左衛門罷下候刻、ウキ薬ヲ申候而、少々よささう成體ニ候間、いよゝゝゝよく候ハ、其様子可申遣と存、七太夫ハ此中相留候へ共、少後不得驗氣候、又こうし申候儀も無之、同篇之體ニ候、其外氣色食事ハとハ、一段と能候間、可心安候、定而無心元可被存候間、七大夫差立申候、於様子者、含口上候間、可相達候、信州爰元罷居、いろゝゝ入念申候間、養生之儀氣遣被申間敷候、其表いよゝゝ御靜謐、其方ふとリ別而息災罷居候由、何より以珍重候、此方も、本丸、三之丸、子とも、其外長門右近所之孫四郎母子、何もゝゝ無何事候、可心安候、其方事、上州、大炊殿御取成ヲ以、御目見被仕候而、仕合よく候由承、大慶不過之候、○元茂、秀忠ニ調シ、尋テ、歸國ス、彌御奉公可被入念候、信州今月末、來月始ニ可罷上候由申候間、萬期其節候、恐々謹言、○勝茂參勤ノ

三月十日

加賀守
直茂

ハクサレ死
ハ子孫ノ

直茂命ジ
テ書院ヲ
毀タシム

武功ノ家
臣ニ對ス
ル注意ス

元和四年六月三日

三七八

リ、何支モ致シケレモ、聞タル支ニ違ヒノ有テ、我シラス誤リタル事モ有ト見ヘテ、天道ヨリ耳ニ御尤メ有事ト存ス、クサレ死テハ子孫ノ耻ナル間、大破ニ不成内ニ死候ヘカシト被仰、其後ハ唯御病氣ト計被仰、深ク御カクシ被遊ケルカ、御絶食ニテ、御藥モ不被召上、勝茂公ヨリ、親ノ死場ニ藥ヲ吞セ申サヌ事、後日ノ批判モ面目無御座候間、御藥被召上被下様ニト、重疊御斷被仰上ニ付テ、サラハ信濃守カ爲ニ輕藥吞スル様ニト被仰付、此節石井生札ヲ被召出、今夜中ニ書院ヲ解キ退ケタシ、人足共物音セサル様ニ可成ヤ、其後跡ノ地ヲ引、白砂ヲマキ候ヤウ被成御意、安キ御、支ニテ御座アル由御請申上、一夜ニ解退ケ、少モ物音不仕、翌朝御覽被成、何トイタシヌレハ、物音不仕ヤト御尋被成、生札申上ハ、夫丸ニ柴ノ葉ヲクハセ申タルト申上、公被聞召、能仕タリ、其故其方ニハ申付タリト御申アルト、業隠

勝茂ヲ戒ム

先祖ノ仕
置ヲ變更
ズベカラ

勝茂直茂
ノ遺訓ニ
依リ鍋島
家ノ子孫
ニ譲ル

子孫ノ冥加ノ爲トテ、御鎧ノ下帶ヲ拜領スト、下村、職記

御病氣段々被差重ニ付テ、毎日勝茂公御機嫌爲御窺、多布施御屋敷へ御出被成、五月廿六日、御越被成ケレハ、今日ハ御機嫌モ御快ク、御病モ少シ御ヤワラキ被成間、御休所へ御通り被成様ニト御座アリテ、緩々御咄、御心持ニ成儀共多々御物語被成、其内ニ御國家御長久、御家御風儀替リ不申様ニ、兼テ御心遣可被成由御申被成、因茲、勝茂公被仰上ハ、家ノ古キト申スハ、何ヲ以テ古キト申候ヤ、御家ノ風俗替リ不申様ニハ、如何可被成ヤト、御尋被成ケレハ、サテモ能氣ノ付レタル間事ナリ、家ノ古キトハ、數代御相續爲被成ヲ申ニテ無之、御先祖ヨリノ御仕置ヲ、御子孫ニ御替不被成、御守リ續レナハ、御家ノ古キト可被思召、御子孫ニ至テ、新法ノ御仕置被成ヌレハ、新家ニ罷成物ノ由御申被成、勝茂公深々御感得被成、然レモ公御代ノ御仕置ハ、大概ニテ、隅々迄行渡リ不申、依之勝茂公、公ノ御仕置ヲ根本ニ被成、御孝行ノタメ、數十年御辛勞ニテ、御家ノ御掟密細ニ被遊立、御子孫へ御譲リ被成、是鳥ノ子御帳也、御側ヨリハ下村與兵衛ナト御手傳仕ルト、燒殘、反故

元和四年六月三日

三七九

元和四年六月三日

公御病重ラセラル節、宿老中會談有之、加州様今度御本復ナキニ於テハ、國家ノ儀我々了簡ニテ計リ難キコト可有之、御存在ノ内ニ、差立タル儀ヲ御尋可仕置由ニテ、書付ヲ以テ被申上、

三箇條

- 一 國家治メ様之事、
- 一 公儀勤メ様之事、
- 一 虎口方勝メ之事、

右ノ趣公被聞召、何レモノ心底感シ被思召、如是各心ヲ被寄コソ、乃國家相續ノ根元也トテ御答被遊、

一 國家治様之事也、家乃古法を守り、上下和合して、民百姓ニ至る迄、眞實ニ一味同心をる時ハ、國不亡、家長久与可被存候、末々必利口ある者出來、新儀を以法を破るるし、各油斷有るらば、

一 公儀勤様之更ハ、御條目之趣ニ無相違、其旨を守ルは相濟事也、其内將軍家御一代ノ風儀替る物也、大體其了簡を以、律儀ヨサヘ勤ぬまは、無迦物也、

一 虎口前勝メ之事ハ、信濃守ニ委細申聞置更ニ候、口決、

公アル時御家中へ對シ被仰聞ケルハ、我等相果シ後、有ヘキ事ニテハ無レモ、萬一國替所替ナト、有之節ハ、槍先ニテ可相渡、譜代ノ者計リ

ニテ候ヘハ、其期ニ臨ミ、命ヲ惜ムモノ一人有之マシクトハ存候ヘト

モ、彌以死後ノ儀、相頼ムノ由被仰置ト、御書

主水茂里、公ヨリ前ニ死去、病中ニ女人ヲ身邊ニ寄セスシテ臨終セリ、

公大ニ御感ナサレ、死様ヲ主水ニ取ラレタルト常々被仰ケリ、依之、御

病氣差重ラレテヨリハ、御側ニ女中御近付不被成ト、御書、鍋島

慶長十五年八月八日ノ條ニ見ユ、

公御存生ノ内、御家中下々マテ、一大事ノ分別ハ、公ノ御座所ニ向ヒ、鬮

ヲ取、其鬮次第ニ決定致シケリ、同上、

公御遺言ノ覺書

五月廿一日
一 翁介事、家之惣領候間、於向後、無別儀翁介ハ、親類家中可致奉公之旨、

(此書)
誓紙させ可申候、此段於本丸、信濃夫婦ニ具シ可申渡事、

同日
一 此寶藏させらるる物ニ候へ共、我等心持候間、翁介ハ遺候條、加へ相

元和四年六月三日

元和四年六月三日

三八二

孫直澄へ
ノ遺物
忠直ニ
略ナキ
元茂ニ
フベシ
傳様粗

渡可申事、

同日(直澄) 一千熊へ、書付置候遺物之外、何ぞ一色相副可遣事、

一翁介へ、至て三平事、向後麤抹(抹)之義無之様、爲其方よく可申聞事、

五月廿四日 一水町作右衛門此中別而奉行申候間、知行透所候する時、授無(無)之外可

申付事、

同日 一生齋、用專へ米拾石宛、當時可申付事、

一我等死去之後、三之丸何篇心持之事、

同日 一三ノ丸、本丸、女子共へ、何色よても、信濃母見あせ次第とらせ可申

事、

同日 一少此物も我等印判よてとらせ可申事、

同日 一前ノ用立候者之子孫之儀、我等死去之後、失念申間敷事、

同日 一先年豊州衆姉さうひ原へ陣取候付覺へとも候間、蓮池之儀兼而其

格護可入事、

同日 一河副津邊右同前之事、付、大田村へ伊勢仁王被官とも可召置事、

同日 一當家兩筋之儀、我等死去之後、よく心持可入事、

用ニ立チ
タルモノ
ノ子孫ヲ
重ズベシ
蓮池城

寺社造營
ハ先例ニ
從フベシ

臨終ノ有
様

同日 一寺社造營之時、可任先例之事、

一北山百姓共へ心持之事、

一宮内卿、少將への事、

一三平藏入、信濃藏入同前可申付事、

一此中申置候通、一ツ後相違申間敷事、

以上

元和四年六月朔日

勝茂公日夜御詰被成候へ、御前様御懐胎故、御用捨被成御對顔ナシ、同
月三日、公御氣色漸々無賴御見エ被成候故、爲御暇乞、御座ノ間ノ椽ニ御
出、御對面、遠キ末座ニ生三伺公、左ノ御脇ニ高岸慶阿彌、右ニ生益、御前ニ
八戸久兵衛、御後ニ御寄掛被成、御互ニ被仰出儀ナク、暫クアリテ、直茂公
御意ニ、近日少シ御氣色御輕ミ被成候、可御心安ト被仰、勝茂公御赤面被
成、無御答、勝茂公ノ御顔ヲツク、ト、良(良)小時被成御覽、互ニ御目ヲ御見
合セ、言語道斷ノ御様子、公被成御意ハ、少シ御甘ケ可被成ト被仰候故、御
側ヨリ先ツ御立被成、後方又御出被成候へト申上候へトモ、御立兼、唯御

元和四年六月三日

三八三

元和四年六月三日

三八四

赤面ニテ、疊ニ御顔ヲ被押當、御落涙、兎角ノ御答モナシ、公モ其御體ヲ被成御覽、御意惡ク御見エ被成候故、先々ト申上候ヘハ、無是非御立被成候、斯テシヒンヲ御乞被成ヲ、御側ノ者承リ違ヘ、水ト承リ、水ヲ上候ヘハ、御腹立被成、未水ノ時分ニテハ無シ、シヒント高ラガニ御申シ候ヘハ、御シヒンハ最早入ルマシキト打捨、置所不知、ヤウノ見出シ差上候時、生益モ久兵衛モ御除ケ被成、慶阿彌一人ニテ御用相澄、其後水ト被仰候故、差上候テ、水々ト申上候ヘハ、早其前ニ御臨終、御歳八十一也、元和四年戊午六月三日、

追腹十二人

- 〔花岳宗稠〕(朱香下同) 八戸 宗稠
- 〔宗覺正智〕 秀島源兵衛
- 〔機了道仙〕 江副兵部左衛門
- 〔正譽淨覺〕 末次 淨覺
- 〔壽清宗延〕 服部 宗延
- 〔西菴宗蓮〕 秀島吉右衛門

秀島源兵衛
制勝茂ノ兵
カ止ヲノ
カズシテ
殉死ス

齊藤佐渡
傍輩ノ一門
父ノ制

- 〔正安道見〕 大藪 木工
- 〔佐覺祐輔〕 齋藤 佐渡
- 〔白覺淨雲〕 齋藤用之助
- 〔溪嵐覺譽〕 一番ヶ瀬左近
- 〔利安隆貞〕 堤刑部左衛門
- 〔覺應道圓〕 堤 雅 樂

○殉死者ノ姓
下ニ掲グル
歴代鎮西志
ト異同アリ

秀島源兵衛御追腹仕儀、勝茂公被差留ケレハ、達テ御願申上、可留趣ニ無之ニ付テ、番人被相付置、御三ヶ日ノ夜番人上リケル所、即夜於私宅御追腹申上、依之牢人被仰付ケレハ、御百ヶ日目ニ被召出、嫡子二左衛門ハ月堂殿(爲直也)へ被相附、次男四郎右衛門へ元知行、元居屋敷、元組共ニ、親源兵衛ノ通ニ被仰付、其孫權右衛門代迄、不相替相續仕來リシ所、權右衛門牢人被仰付ニ付テ、其以後組ノ儀ハ別人へ被仰付、屋敷ノ儀ハ組ニ被相付置、源兵衛家來野中藤右衛門追腹スト、舊記、齋藤佐渡、同用之助父子共ニ、御供ト部(部)リタルヲ、一門傍輩中ヨリ、用之

元和四年六月三日

三八五

止ヲ聽カ
ズシテ殉

堤雅樂直
茂依リ止
出家シテ
周忌ノ時
死ス

直茂ノ法
名

元和四年六月三日

三八六

助追腹達テ留メ申シ、佐渡一人御供申上、用之助志ハ、專要ノ儀ナレト、是非御供ヲ存留リ、跡ニ殘リ、侍從様へ致御奉公、家連續シ、御用ニモ相立、忠孝可全由、何レモ留メ申ケル、其時用之助申ハ、公ノ御厚恩海山ナリ、責テ追腹仕リ、迷途ノ御供申上、道スカラノ御咄ヲモ申上ルヨリ外ナク、毛頭存殘ル儀無之、書置言置トテ少シモ無之由申切、父子一同ニ追腹スト、家藤

堤雅樂ハ、公逝去ノ御供ノ御約束仕ルニ付テ、御病中御前へ被召出、必存シ留リ可然、年寄物馴タル者無之間、不相替信州へ御奉公仕へク被仰下、夫ニ付テ、其節ハ、法體イタシ、翌年御一周忌ノ刻、勝茂公へ訴訟申上、被差免故、追腹スト、堤戰功記、○中略、勝茂、中野神右衛門、死ノ請ヲ一公御存生ノ内、宗智寺へ逆修ヲ被立、御法名日峰宗智大居士ト稱セラル、宗智寺ハ、此時公御隱居ノ御居館也、

日峰様采人石井氏、芳林様御法名ヲ金峰和尚へ被仰請、峰ノ字ヲ受テ日峰ト被號、掛絡ヲ被奉許節、爲御禮、又々御知行可被仰付由被仰出ケレト、用事無之由申上、辭退被仕ニ付テ、於然ハ、金峰一代ノ儀ハ、三ノ丸ヨリ

書院ノ舊
跡テ自ラ
建テ自ラ
銘文ヲ書
シ豐臣ノ
姓ヲ用フ

高傳寺不
鐵引導ス

宗智寺建
立ノ由來

鍋島生三
豫メ直茂
夫妻ノ位
牌ヲ作ル

金峰用事料被仰付ト、東光寺 差出

公仰ニ、御居館泉水ノ中島ノ石ヲ、書院ノ跡ニ逆修ニ立可申、自然石ニテ塔ヲ立ヌレハ、子孫カ無キモノト、姥カ、共申ス分不氣味ニ可存間、石ノ裏ヲ斧ニテ切形付ル様ニト被仰出、御銘書ハ暫ク御工夫被遊、鍋島加賀守豐臣朝臣直茂ト御書被成、御薨去前年御建置カル、葉隠、公ノ御引導ハ、高傳寺不鐵和尚被相勤、翌年宗智寺御建立ノ節、不鐵ヲ以開山トセララル、葉隠

慶長中、竹藤村普門院ニ於テ、法問御聽聞ノ爲、公御出アル時、多久長信入道天理、別莊巖松軒ニテ饗應セラル、天理、公ニ語リテ曰、某此別業ヲ轉シテ、永ク寂滅場トセント欲ス、公ノ曰、可也、吾モ亦多布施ノ居所ヲ以爾センノミ、是宗智寺ノ由テ起ル所也、水江 事略

鍋島生三入道、伊勢參宮致シ、罷下リテ、公御夫婦様へ土産進上仕由被申ニ付、御覽被遊ケレハ、剛意様 華溪様、御位牌也、總シテ高傳寺ノ御位牌、草想、草ナル間、内々其思召ノ所、右仕合セノ由、又生三位牌二ツ出シ申ス、夫ハト御申アレハ、是ハ御夫婦様御死去ノ節ノ用也トテ差上申

元和四年六月三日

三八七

元和四年六月三日

三八八

秀忠ヨリ
上使ヲ以
テ香奠ヲ
賜フ

ス、今ノ御位牌也ト、葉隠、
一公御逝去ノ時、從秀忠將軍、上使森伊豆守重政ヲ以テ、御香奠銀子御拜領、
公御逝去、秀忠公ノ高聽ニ達シ、森伊豆守重政御弔使トシテ、同七月、賻
物白金五千兩ヲ賜フ、一説、白金二千兩也、日記、

〔鍋嶋勝茂譜考補〕^四 直茂公御逝去、

一同四年戊午、公三十九歳、

今年六月三日、直茂公御逝去、爲上使森伊豆守重政、御香典銀子五千兩御
拜領、

追腹人數、其外直茂公ノ譜ニ委キ故略之、

此頃直茂公御耳ノ御出來物段々被差重ニ付テ、毎日公御機嫌御窺ト
シテ、多布施へ御越遊ハサル、五月廿六日ニ御越ナサレシニ、此日ハ御
機嫌モ御快ク、御痛モ少シ和キタル體ニヨリ、御寢所へ御通リナサレ
シニ、緩々ト御心持ニ罷ナルヘキ、夏モ多々御物語被遊シカ、其後又御
病氣差重リ、六月三日、遂ニ御卒去ナリ、^{燒殘}反故、
直茂公御逝去ニ付、六月廿九日、將軍秀忠公ヨリ公ニ賜ル御書ニ云、

黑田長政
秀忠ノ使
森重政ト
向ノ際其
乘船ヲ準
備ス

加賀守死去之儀不及是非候、心中之程察思召候、依之指遣使者候、委
曲相含口上候也、^{○御制法、依之以下ヲ因茲爲香}典銀子三百枚遣之候也、^{ニ作ル}

六月廿九日

御印^{○御制法、七月十}日御黑印ニ作ル、

鍋嶋信濃守とのへ

〔黑田御用記〕

^{○坤} 庄野半太夫所持之分

岡本七太夫差上キ候間申遣候、鍋嶋加賀守被果候付、從公方様、信濃守方へ
爲御使、森伊豆守肥前へ被遣候、舟之儀被申候間、自長左衛門、三右衛門書狀
遣候、右之昏面こまうせ候て舟可申付候、其外其もとにて可有馳走者也、

七月四日

長政御判

庄半太夫とのへ

佐賀方參候書付ニ、鍋嶋加賀守殿、元和四年六月三日御卒去と
御座候へハ、元和四年ハ、長政公江戸へ被成御座ト相見申候、

〔中野三代集〕

天 中野神右衛門清明、法名照眞院淨通一代御奉公之荒増

聞書

一六十四歳、元和四年六月、直茂様御病氣御本復無御座、御逝去被遊候、神右
衛門義御重恩之者、御座候條、御供可仕与存部、書付を以、勝茂様へ奉願

元和四年六月三日

三八九

中野甚右
衛門可死
請ノ許ヲ

元和四年六月三日

候扣

乍恐申上候、加州様御供、則可申上者も御座候得共、十ヶ年已前直茂様へ御口能を以、御幡本に被召出、自他之外聞御とらせ被成候段、加州様以前より度々之御芳恩之上、猶以深重に奉存候、併其後も爲何御奉公少篇をも不申上御事、御座候て、老足いとし候不と、數年迷惑に存上候、責而相あうらへ、御家之としこて、かゝと死をも可仕と奉存候へ共、をえや先も無之者、御座候條、御隙を可被下候、四十九日時分にて、も、百ヶ日前よても、不珍御事あうら、腹を境目之義に御座候之間、ひそらよを可仕候、不及申上御事、御座候へ共、右之趣致言上候へ而、相果申候時、日來之不肖彌以顯然仕候に付て申上候、御法度と奉存申上候て、とても被思召上間敷候、早々申上度奉存候へ共、別而御心遣半、態延引いとし候、此中御供申上候者共、多々御座候へ共、餘御伽に可罷成者も、然々無御座候間、我等致祇候へ、宗智様常々へ御満足よを可被思召上候、御他見必不被遊、乍緩怠御自筆にて、一くより頂戴申上度候、此旨宜預御披露候、恐々謹言、

四十九日
百ヶ日
死スル
ハ珍シカ
ラハ

度死ハ法

六月廿八日

勝屋勘右衛門尉殿

中野甚右衛門尉

右を御覽被遊、忤中野忠兵衛を以、神右衛門へ被下候勝茂様御自筆御書寫、

書中之趣委披見候、加州至其方、數年なうおん之所を存、供申度候や、如此分別相違可申儀、此中不存候、我等加州へ相とあれ候刻候間、相あうらへ、自然ノ時ハ一方用こも可相立と、人こも見及候様、仕候而こそ本意之儀そ、加州はよく被仰候へ、おいそら切候事いとつら事候、其上えそんこたいし候ても、無曲事候由被仰候時、於我等も不是非存候、あうと存留可然候、今度加州被仰候へ、御せひひつ時分候へ共、不慮ハ不相知事候間、自然之時、其方儀別而可召遣之由、被入御念被仰聞候處、我等申所無分別候へ、御ゆい言もいとつら罷成事候間、加州御存被成物候へ、少もうれしく被思召間敷候、如此留申候儀無分別候へ、理を相そむくよて候間、日本の神そふひんこへ存候へ共、其方子共くせ事、可申付候、加州悦こ不思召儀を仕、其方えそんも相

勝茂直書
ヲ授ケテ
之ヲ戒ム

直茂生前
常不歿死
說ク

直茂ノ遺
言ハカ
クベカラ

子孫死セ
申付ク事
ベニ

元和四年六月三日

三九一

元和四年六月三日

三九二

とやし候儀よく、後慮尤候、委忠兵へ可申候、

七月二日

信

中神右衛門

右之通御免不被遊候に付、追腹之儀存留候、其節御書之御請扣、

御自筆謹而致頂戴候、重疊御詫之趣、忠兵衛慥に申聞を、彌以過當至極に奉存候、何事之途にも、御下知次第と奉存、憚多御事に御座候へ共、申上る御事、御座候、氣亂はして申上候儀にて、少も無御座候、勿論あてを相違、言上申上たる義にて、も無御座候、たゞ、老足いとし候に付て、相伺申上る御事、御座候、于今、尙々身養生仕、似合之御用も、可罷立と心得申候、細碎忠兵衛可申上候條、不能詳候、恐々謹言、

七月四日

中野甚右衛門尉

勝屋勘右衛門尉殿

〔寛政重修諸家譜〕

八百二 鍋島

政家

直茂 初信安、信真、信昌、信生、彦法師丸、孫四郎、左衛門大夫、飛騨守、加賀守、從五位下、

世系

中野甚右衛門ノ請書

經歷

龍造寺隆信ニ仕フ

大友親貞ヲ破ル

龍造寺政家ノ後ヲ肥前國ヲ領ス

朝鮮ニ渡海ス

高房 藤八郎、駿河守、從五位下、 實ハ政家の四男、

勝茂 初清茂、伊平太、信濃守、從五位下、侍從、從四位下、 母ハ忠常の女、

忠茂 半助、和泉守、 鍋島伊豫守直賢の祖、母ハ上おれし、

直茂 實ハ鍋島駿河守清房の男、母ハ家純の女、天文七年、肥前國本庄、生

茲、龍造寺隆信、はるへ、豊後乃國主大友宗麟、をこし、大軍をたこし、肥前國佐嘉を侵すといへとを、直茂、せ向ひ、希せき戦む、勝利を得たり、又大友八郎親貞、大兵を率ゐて、豊後國より、肥前國小城郡に至り、今山、陣を、その時、直茂、二千餘騎を以て、大よ、おは、拔やぬ、親貞を討とる、そ、此外、九州所々にをいて、敵をうち、軍をや、城を落、事二十度に及ぶ、或ハみつ、あら、劔戟をとり、剛敵を破り、首級を得、事、か、そ、ふ、を、あら、天正十八年、政家、病より、致仕するよをよひて、其男高房、幼稚あるよ、直茂、の、家を相續し、肥前國の内よをいて、三十五万七千石餘を領し、佐嘉城よ住、ま、ある、終、とな、拔、鍋島と稱し、豊臣太閤よ、は、ある、ふ、文祿元年、朝鮮よ渡海し、咸鏡道吉州よ至、多、數度、比、合戦よ、その、を、め、く、らし、敵をや、ふる、事、多し、慶長二年、再、む、朝鮮よ、赴き、三年、太閤、他、界、此よ、し、を、聞て

元和四年六月三日

三九三

元和四年六月三日

三九四

歸朝す、乃ち井伊兵部少輔直政及む圓光寺長老元信をまつて、東照宮よ仕へ奉らん事、言上し、又御座を伏見城よりうつさ終んと、抜いさゝ奉る、おのよし聞しめし、御感あり、此時より及む、石田三成等謀を構へ、京師靜あらば、時より台徳院殿乃御臺所を伏見よりおとし、備そより、榊原式部大輔康政を御使として、直茂の宅に移し、參らるるし、よく守り奉らへきのよし仰下る、直茂御旨をうけ、老ぼる、今ほと在京此家人をくれを、卒爾よ似せりといへとも、台命を背くを、おらば、御臺所御座を移さ終んよをいて、は、まゝ守護し奉らへき旨言上せしかと、又御感を蒙る、然きやを京師事故ありしかと、誓乃事に及はせ、五年、關原此役より、直茂肥前國よりあり、亂平く此後、嫡子勝茂と共に筑後國より軍を出し、久留米城を請取、あるむら立花左近將監宗茂のあはれる柳川城をせめて、敵あぶ討とりしかと、十一月六日、そ此功感し思召のよし、御書を下る、其餘兩御所より御書を賜ふ事とせられ、十二年致仕し、元和四年六月三日、佐嘉よをいて卒、年八十一、日峯宗智高傳寺と號せ、本庄村乃高傳寺に葬る、おき直茂のかりあ開基せしむころ、室は石井兵部少輔忠

關原戰後
久留米城
ヲ請取リ
柳川城ヲ

高傳寺ニ
葬ル

常の女

〔鍋島直茂譜考補〕

一上 御出生

出生

一天文七年戊戌三月十三日御出生、御父鍋島駿河守藤原清房、御母龍造寺豊後守藤原家純息女也、於本庄館御誕生、御小字彦法師、公加冠ノ後、左衛門大夫、信安、信真、信昌、中比飛驒守信生、後加賀守直茂ニ改メラル、

公御出生十月二十八日五世御年アリ、講普聞集、公御名孫四郎、三郎兵衛、出羽守トモアリ、孫四郎ハ水江事略、又公多安順ヘノ御狀ニ見ユ、信真ノ御名乗諸記ニ見ヘス、

本庄館ハ、今ノ本庄郷千本松、御館跡堤氏由緒有テ代々番守ス、略中
千葉家 江 御養子

一同十年辛丑ノ春、公四歳ノ御時、小城郡主千葉介平胤連ノ養子トナラル、其謂ヲ尋ルニ、此頃高來ノ有馬越前守義貞入道仙岩武威ヲ振フテ、高來、彼杵、藤津三郡ヲ切從へ、既ニ肥前一國ヲ掌握セントス、折節神崎、城原少、貳屋形冬尙ト、小城ノ兩千葉屋形不和ニシテ、彼家人等小城、佐嘉、神崎ノ輩日夜互ニ鋒ヲ磋ク、有馬聞之大ニ悦ヒ、其弊ニ乗テ、大勢ヲ催フシ、小城

千葉胤連
ノ養子ト
ナル

元和四年六月三日

三九五

始メテ小内
城郡ノ内
八十ノ領
地ヲス

境ニ攻來リ、村里民屋ヲ放火シテ、佐嘉、神崎へ攻入ント相窺フ、于時少貳ノ長臣龍造寺三郎兵衛尉家門公御母方伯父ノ智慮深キ人ニテ、今度有馬ノ大軍攻來ル、指口ナレバ、先千葉介ヲ攻落シテ、小城郡ヲ手ニ入ナハ、其末少貳一家ノ武力ニテ、是ヲ防カン、中々難儀ナルヘシ、所詮千葉ト當家令和順、兩家ノ勢ヲ合セテ、有馬ヲ可退ト思案シ、千葉家ニ入テ談合シ、竟ニ兩家和與成ヌ、斯リシカハ、少貳殿ノ舍弟ヲ千葉喜胤ノ養子ト定メ、又己カ一族鍋島駿河守ノ次男彦法師冠者ヲ千葉胤連ノ養子ト成シヌ、果シテ家門智慮ノ如ク、有馬此輩ヲ傳へ聞、今度ノ軍勝利アルマシキト評議シテ、頼テ藤津ニ馬ヲ歸ス、是ヨリシテ、彦法師公、小城へ御越御住居也、其後胤連實子出生ニ依テ、其身ハ彦法師殿ヲ俱シテ、牛尾へ隱居シ、本家ヲ胤信實子ニ讓リ、彦法師殿へハ、隱居分美奈岐八拾町小城郡内、並ニ譜代ノ家人拾二人ヲ讓リ申サル、是公ノ御領知、御家人ノ始也、其人數、

鑰尼山ニ下作文 野邊田 金原 小出 仁戸田 堀江 平田 巨勢
瀨ニ下作文 井手 田中 濱野 陣内

鍋島家ニ
歸ル

彦法師公七八歳ノ時、一老翁人ヲ相スル者アリ、清房公ノ本庄ノ宅ニ來リ、公ヲ相シテ曰、貴ヒ哉、賢ヒ哉、人ノ主將、宰官トナルノ瑞相、顯然トシテ具レリ、予初メ此家ノ父母ヲ相スルニ、高フシテ不賤、抑斯兒アルヲ以テ爾ナリト云フテ、老人忽去テ見ヘス、五世御千葉大隅守胤連男子ナキニヨリ、公御養子ニ被成、千葉相傳ノ士野邊田善兵衛、金原孫兵衛、堀江清右衛門、井手源右衛門、陣内市左衛門、田中六右衛門、仁戸田藤次兵衛、鑰山孫右衛門、古瀨忠左衛門、小出進士衛門、平田治部右衛門、濱野源次兵衛、都合十二人ノ知行定米五百石被相副、公へ被遣ト、堀江子孫田口

御本家 江 御歸

一同二十年辛亥、彦法師公千葉家ヲ被辭、佐嘉へ御歸り也、於梅林菴御手習、御學問、此時御家人三四人被召使シ内、太田伊豫守梅林菴へ御供仕、御父駿河守殿御家督ノ義ハ、御兄豊前守信房相續勿論ナレハ、公ハ御無屬ニテ、太守隆信公ノ御身邊ニ御座ス、十四歳ノ御時也、

是年九月、神代勝利水ヶ江ニ來リ、隆信公ニ對謁ノ時、鍋島孫四郎御幼名

龍造寺周
家ノ夫人
龍造寺氏
鍋島清房
ニ再嫁ス

元和四年六月三日

三九八

側ニアリ、自茶ヲ持出テ進セラル、勝利謝シテ之ヲウクト、水江事略○中略

大方殿御再嫁

一弘治二年、丙辰、隆信公ノ御母公、後慶閣申ス、自ラ公ノ御父駿河守清房ノ館ニ
入來リ、清房ニ嫁セラル、此女姓ハ、龍造寺刑部大輔胤員ノ嫡女、六郎次郎
周家ノ後室、大方殿ト申シテ、頗ル賢女ニテマシマス、然ルニ今此儀ニ及
フ、何故ソト尋ルニ、大方殿ツラノ被思ケルハ、當時亂世ノ半ナレハ、
器量ノ仁ヲ得テ、隆信ノ股肱ト不爲ハ、中々當家大功ヲ立ル、左衛門大
シ、サレハ頃日一門他家ノ中ニ、其人ヲ鑑ルニ、鍋嶋清房ノ次男、左衛門大
夫ニ超タルハナシ、幸ヒ清房近年妻室ニ後レテ鰥也、所詮自ラ彼家ニ入
テ、清房ニ嫁シ、隆信ト左衛門大夫ヲ兄弟ノ縁ニナシテ、龍造寺ノ大功ヲ
立ヘシト思ハレケル故トソ聞ヘシ、

元來公ノ御實母、號花溪正ハ、隆信公ノ御父周家ノ御姉ニテ、隆信公ト
直茂公ハ御從弟也、公御若年ノ比ヨリ、專ラ人ヲ惠ミ、世ヲ救フノ御志
深クマシノケル故、諸人思ヒ付奉リ、御一族中モ兼テ褒賞セラレシ

ト也、

入嫁ノ月日不知、御年ハ四十八トアリ、御系或時清房公御登城アリ
ケルニ、大方殿小侍從ヲ以テ近ク召レ、仰出サレケルハ、御邊妻女ニ
後レ、悲歎ノ涙ホスカタナシト聞ク、我等御身ニ媒スヘシ、吉日ヲエ
ラミ給ヘト也、清房公、仰ノ趣ハ承得トイヘ共、敢テ存シヨラサル御
事ナリト申切テ退出セラル、其後吉日ニ、御母堂自ラ輿ニ召テ、清房
公ノ御館ニ入セラル、清房公案ノ外ナルヲナリケレハ、更ニ兎角ヲ
辨ヘラレス、忙然タル有様ナリ、シカレ共御容子強チイナミ難ク、御
夫婦トナラセラレケレハ、信昌信昌公ハ、隆信公ニ御兄弟ノ縁ヲ結ハル、
凡善惡ニ付テ、人口ハ一同ナラヌ物ナレハ、輕忽ナリシ御フルマヒ
哉ト、間ニハサミシ申者モ多カリケレ、隆信公御逝去ノ後、信生公
御家ヲ御相續アリ、加州太守直茂公ト申奉テ、國家ヲ保タセラレケ
ル時ニコソ、右御了簡タカハサリケリト、諸人皆往事ヲ感歎シケル、

肥陽
軍記

元和四年六月三日

三九九

夫人高木
ス氏ヲ離別

元和四年六月三日

四〇〇

公十八歳ノ御時也、

〔鍋島直茂譜考補〕 一 下

大友勢亂入

附、多布施三溝所々合戰並御和平

一 同十二年己巳ノ春、○中略、大友宗麟ノ侵略ヲ防戦スルコトニカ、ル、斯ル處ニ、四月十五日、肥後國城越前守親冬、兼テ當家ニ所縁アル者ニテ、雙方ヘ入り、和議ヲ相談シ、其事調リテ、此方ヨリノ人質ニハ、納富但馬守弟秀島河内守養子秀島四郎左衛門ヲ被差出、今度ハ先ツ國中無事ニ成リヌ、直茂公此時御内室ヲ離別セラル、是ハ今度ノ一亂ニ、御舅高木肥前守胤家大友ニ與シ、隆信公ヲ背キ申セシ故也、○中略

公三十二歳ノ御時也、○中略、本書、直茂ノ高木氏ヲ娶リシ年月ヲ記サズ、

石井忠常息女御再娶

一直茂公今年石井兵部少輔忠常ノ息女ヲ迎ヘラル、納富治部大輔信純ノ後室也、○中略

公三十三ノ歳ノ御時也、

〔鍋島系圖〕

直茂鍋島加賀守、從五位下、實鍋島駿河守藤原清房子、大宰少貳之家也

永祿十二年三月廿四

日、豐後國主大友宗麟、使其家老二、將數萬騎、侵肥前、到佐賀郡、直茂馳向

大友宗麟
ト戰フ

敵ヲ敗ク
城ヲ拔ク
度ト二十
龍造寺政
家ノ議ヲ
受ケテ其
家ヲ嗣ゲ

防戰、得勝利、元龜元年四月廿三日、宗麟起大軍、出張筑後國高良山、其先陣多進於肥前國神埼郡姉村、直茂擊破之、討捕數百人、同年、大友八郎率大兵發、自豐後到肥前小城郡、陣於今山、八月廿日、黎明、直茂將二千餘騎、攻大友陣、大破之、擊捕八郎、其餘於九州處々、或擊敵、破軍、拔城、殆及二十度、或手自執劒戟、陷堅陣、得首級者、不可勝記也、直茂亦被疵云云、天正十八年、龍造寺政家依病氣、讓家督於直茂、文祿年中、渡海入朝鮮、深進到咸鏡道吉州、合戰數度、運謀破敵者多矣、慶長三年、直茂聞秀吉病沒、歸自朝鮮、而後以井伊兵部少輔直政及圓光寺長老元信、申可奉仕家康公之旨、且告公府警衛不嚴、宜移御座居伏見城、復有諷諫之旨云云、公聞而有御感、同四年、家康公在伏見、佞臣之徒將不利於公、於是上方不靜、時秀忠公之君夫人居伏見、家康公使榊原式部大輔康政等、密告直茂曰、可使夫人移居直茂館、能調護之否、直茂復命曰、當時無武事之備、雖似卒爾、敢不背公命、被枉御座、則謹可奉守之、宜安貴慮、公感悅焉、既而上方無爲、故其事亦罷、

元和四年六月三日卒去、年八十一、法名日峰、

元和四年六月三日

四〇一

元和四年六月三日

四〇二

大村主膳
松浦隆信
ノ代理
シテ直茂
ノ葬儀
列セシト

勝茂大磯
ニ宿ル

〔リチャルド・コックス日記〕 (歐文材料第四號譯文)

一六一八年七月二十七日、和四年六月十六日ニシテ、元大村の主膳殿は、甜瓜
を贈り、又自ら予を訪問せられ、鄭重なる挨拶あり、その話によれば、肥前(肥前直茂)
王は死去し、彼は當地(松浦隆信)の王江○隆信コノ時の代理として派遣せられ、葬儀に
列せん事を命せられたり、彼は異教徒にして、遺骸を火葬せし地に、新に墓
を營みて、其中に塔を設け、カメ(カメ)として、又は聖徒として、神は甚だ高遠なる
ものと思惟せらるれば、寧ろ聖徒として、彼の記念の爲めに、聖儀及び禮拜
行はるべしと語れり、

十月二日、四年新曆八月十六日ニシテ、元大磯にて晝食せしが、時江○コック、コノ途
リ、ニア我が定宿には、肥前王宿泊せしかば、他の所にて晝食せり、○中肥前王
の出發後、予を舊旅亭に送れり、途ニ勝茂、コノ時、田府ノ

○豊臣秀吉、龍造寺高房、鍋島直茂、其子勝茂ニ封地ノ朱印ヲ與ヘ、尋デ、
直茂ヲシテ、龍造寺氏ニ代リテ、悉ク其封ヲ襲ガシムルコト、天正十八
年正月八日ノ條ニ、直茂、征明ノ部署ニ就クコト、文祿元年正月五日ノ

鍋島直茂畫像

侯爵 鍋島直茂氏所藏



原寸
横 〇・六九四

大村主膳
松浦隆信
代理直茂
ノテ直茂
ノテ直茂
列ノテ直茂
スレニ直茂

〔リチャルド・コックス日記〕（歐文材料第四號譯文）

一六一八年七月二十七日、和四年八月十六日新曆八月十六日、リチャルド・コックス日記リチャルド・コックス大村の主膳殿は、甜瓜（甜瓜）を贈り、又自ら予を訪問せられ、鄭重なる挨拶あり、その話によれば、肥前（肥前）の王は死去し、彼は當地（肥前）の王（肥前）の代理として派遣せられ、葬儀に列せん事を命せられたり、彼は異教徒にして、遺骸を大葬せし地に、新に墓を營みて、其中に塔を設け、カメとして、又は聖徒として、神は甚だ高遠なるものと思惟せらるれば、寧ろ聖徒として、彼の記念の爲めに、聖儀及び禮拜行はるべしと語れり、

大村主膳
松浦隆信
代理直茂
ノテ直茂
ノテ直茂
列ノテ直茂
スレニ直茂

○豊臣秀吉龍造寺高鼻鍋島直茂其子勝茂ニ封地ノ朱印ヲ與ヘ尋テ直茂ヲシテ龍造寺氏ニ代リテ悉ク其封ヲ襲ガシムルコト、天正十八年正月八日ノ條ニ直茂、征明ノ部署ニ就クコト、文祿元年正月五日ノ

鍋島直茂畫像

侯爵鍋島直茂氏所藏



原寸 縦一・一四三 横〇・六九四

條ニ、渡韓シテ諸所ニ轉戦スルコト、同三月十三日以下ノ各條ニ、歸朝スルコト、同三年正月是月ノ條ニ、秀吉ヨリ邸地ヲ伏見ニ賜ハルコト、同四年二月十四日ノ條ニ、再ビ渡韓スルコト、慶長二年正月是月ノ條ニ、歸朝シテ秀吉ニ謁スルコト、同四月六日ノ條ニ、更ニ渡韓シテ諸所ニ轉戦スルコト、同五月十一日以下ノ各條ニ、歸朝ノコト、同十一月是月ノ條ニ、封内農民ノ、代官、下代ヲ誣告セシヲ罪シ、千間堀ヲ開鑿セシメシコト、同八年十一月是月ノ條ニ、伏見ニ抵ルコト、同十年二月是月ノ條ニ、西洋渡航ノ朱印ヲ授ケラル、コト、同年四月二十六日及ビ同十二年二月七日ノ條ニ、佐賀城ヲ改築スルコト、同十三年是歲ノ條ニ、隱居スルコト、同十五年是歲ノ條ニ、兵ヲ大坂ニ出スコト、同十九年十一月十一日ノ條ニ、大坂ノ落城ヲ賀スルコト、元和元年六月二十五日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔花押彙纂〕

部ナ之

鍋島直茂

元和四年六月三日

元和四年六月三日

泰長院文書

○泰長院文書
天正七年己卯五月十二日附泰長院宛書狀

四〇四

有浦文書

○泰長院文書
卯月廿日附九夷宛書狀

吉川家文書

○有浦文書
五月五日附有浦大和守宛書狀

吉川家文書

○吉川家文書
二月廿七日附宇喜多秀家外十六名連署契狀

元和四年六月三日

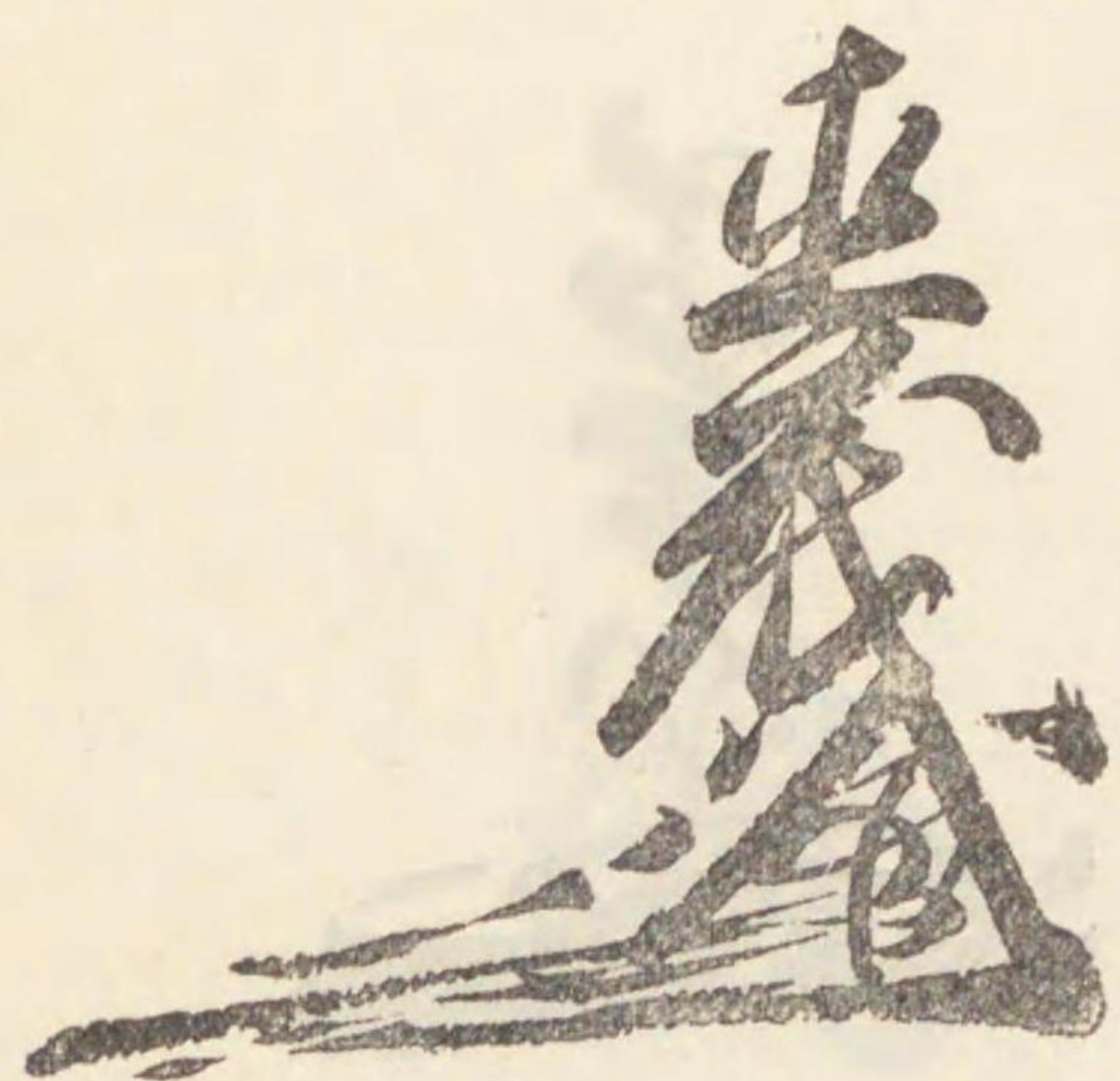
四〇五

元和四年六月三日

四〇六



○泰長院文書(前)
二月廿二日附九夷宛書狀



○三岳寺文書(上)
慶長六年十二月廿三日附圓光寺
閑室宛直茂勝茂連署書狀

元和四年六月三日

四〇七



○三岳寺文書(上)
慶長十五年十二月十三日附三岳寺閑
室宛直茂勝茂連署書狀



○三岳寺文書(上)
(慶長十七年)
三月十二日附圓光寺宛直茂勝茂連
署書狀

元和四年六月三日

源朝臣

○泰長院文書肥前
三月廿八日附泰長和尚宛
書狀

為申取付候事 修信

申付候事 吉徳

来子申候事 吉徳

申付候事 吉徳

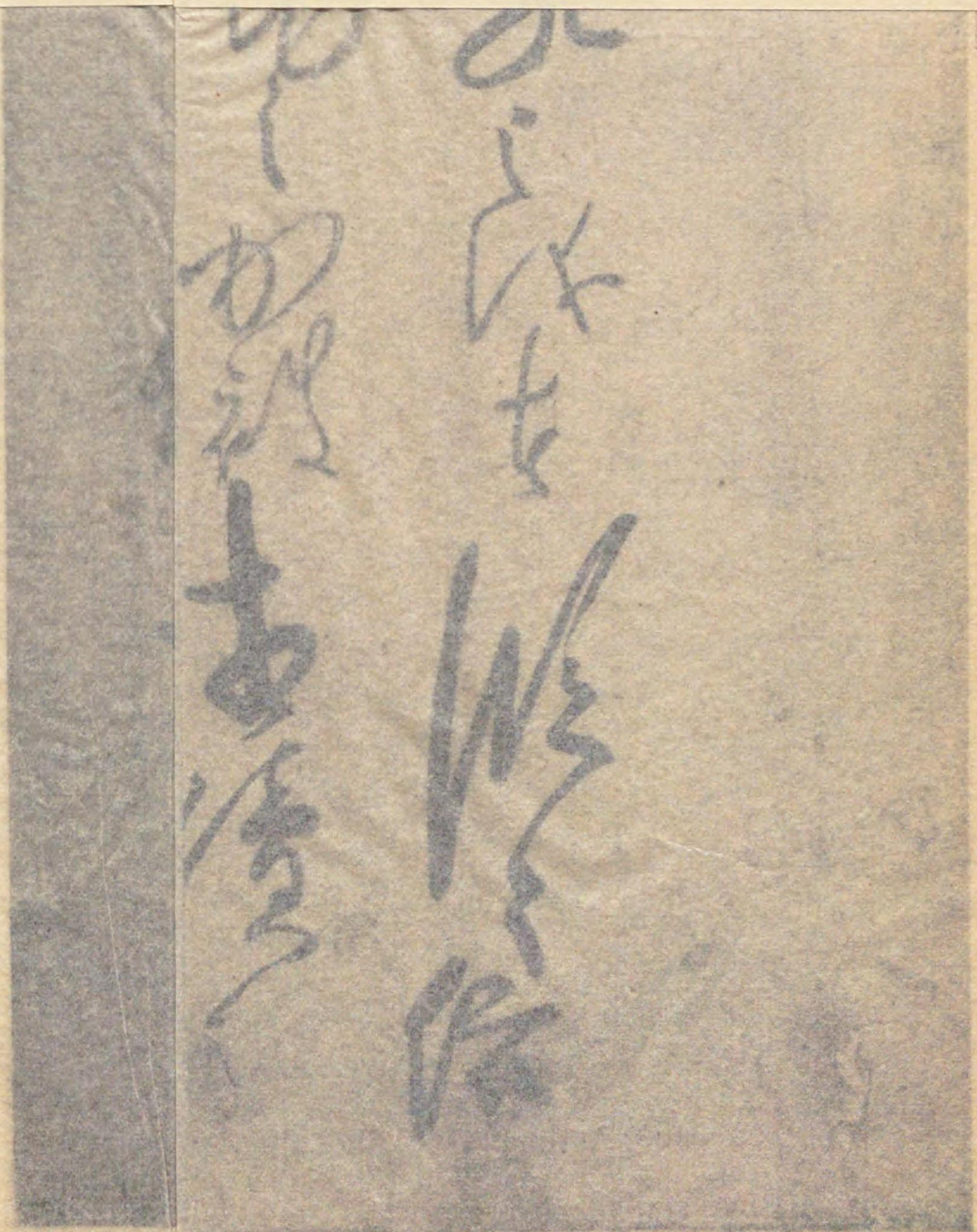
申付候事 吉徳

申付候事 吉徳

申付候事 吉徳

未申事

星



〔鍋島勝茂譜考補〕 四

百ヶ日作善
多布施ノ塔
大書院跡ノ植木
塔前ノ石燈籠

泰長院ニ歸依ス

直茂ノ軍法

一 宗智様百ヶ日作善之儀（鍋島忠茂、勝茂ノ弟）和泉所（和泉忠茂、勝茂ノ弟）申乞之由候ニ付而、下關（和泉忠茂、勝茂ノ弟）其段申遣候

和泉方（和泉忠茂、勝茂ノ弟）も其方へ書狀差越候、恆廣（和泉忠茂、勝茂ノ弟）相調候由、得其意候、

一 多布施之御塔廻之川岸兩面共ニ、石垣御結構（和泉忠茂、勝茂ノ弟）に有之由、満足ニ存候、

一 大書院跡ニ植木仕候由、是又尤ニ存候、

一 多布施御塔之前ニ、八介殿（村田安良、直茂ノ弟）石燈爐念（和泉忠茂、勝茂ノ弟）を入被立候哉、八介殿へ則御禮申

述候、（和泉忠茂、勝茂ノ弟）〇上下略、霜月十九日附、鍋島生三宛、鍋島勝茂書狀、

〔泰長院文書〕 〇二 肥前

當家之儀者、段々依貴院之加被、相續之末、子々孫々迄、大形之儀有之間敷者也、若疎略之儀共候ハ、此書付御見せ候而可被仰聞候、以上、

三月廿八日

鍋加守（直茂）（花押）

泰長和尚 侍者御中

〔葉隱聞書〕 二

一言（直茂）こて萬事（直茂）むら（直茂）と埒明所（直茂）御一流（直茂）よて候と、内田正右衛門咄被申候、既ニ御他界之時分、御家老衆御尋を被申上（直茂）よさへ、不被仰聞候と也、

元和四年六月三日

義理程感
深キモノ
ハナシ

元和四年六月二日

四一〇

〔葉隱聞書〕 三

一或時直茂公之仰、義理程感深き物ハなし、從弟杯之死
とる時、涙を流ぬ事も有こ、故ゆくりをなく、見も知をせぬ五十年百年も
以前之人之上を聞て、義理成事こハ落涙せるなりと被仰候由、

火箱

寒夜獄中
スニ粥ヲ施

一直茂公寒夜、御火燧を被成、陽泰院様ハ被成御意候ハ、扱々寒き事こ而
候、火燧居てさへ堪かとを候、下々ハ何として夜を明し可申哉、其内こ
別而難儀之者ハ、誰こて可有之哉と被仰候、陽泰院様も、誠こ火燧こ而も
寒さを防兼候、百姓共ハ火燧も持申間敷候と被仰候、乍去藁火成共あ
と、火箱あどこ而を、とまり可申候、別而凌兼申者ハ何こ而可有之
哉、色々御評判被遊候末こ而、直茂公被仰候ハ、一ツ之難儀、籠屋之者
共成べし、火之取扱不相成、壁をなく、著物も薄く、食物を有間敷候、扱々不
便之事哉と、御夫婦様ながら、繰返、被成御意候て、籠屋こ何人居申候
哉、則刻相改可申上旨被仰出候、筋之役人ハ申遣、夜中俄相改、書付差上、何
之子細候哉、役所扣居申候、右書付被成御覽、御臺所こて粥を被仰付、則
刻牢屋ハ被遣罪人共ハ被爲拜領候、涙を流し有がと、頂戴仕候由、
右者小少將之尼正譽、若年之時分、御前罷出候而、御直こ承り候趣、老後

生花ノ時
ノ態度

玉林寺金
峰直茂ノ
寄進ヲ卻

梅林庵ニ
テ習字ス

こ咄被申候を、常朝師承候由、扱又直茂公、陽泰院様ハ之御言、けりひ、そ
うせよ、かうせよと被仰候由也、

一太閤之御前こ而、大名衆生花を被成候、直茂公之御前こ、花入花具出申
候、終生花なと被成候儀無之、御不案内こ而、花具、諸手こ而一ツに御握
り、本を突揃ら、花入こそくと御立被差出候、太閤御覽候而、花ハ、まろく
候得共、立ふりは見事と被仰候由、

一玉林寺住持金峯和尚ハ、直茂公御祈禱之師也、金峯隱居嘉瀬こ居住有、直
茂公被仰候ハ、多年之厚恩難報事候、今嘉瀬之隱居所ハ、知行百石可附進
と被成御意候、金峯承り、其方數年之武篇ハ、我等珠數之ぬさを、と見切
いあさせ候事こて候を、早忘却候哉、今知行百石こ而可付離所存と見
たり、恩んを、まろしめさハ、一生懇意有筈也、夫こ而ハ向あぬなく候と、殊
外立腹こ而候、直茂公被聞召、さらハ知行ハ進申間敷候、御堪忍候得と被
仰候由、

一直茂公ハ、梅林庵こ而御手習被遊候、其時分、梅林庵近所之寶持院、御鬢御
衣、諸事之御給仕、心こ入被勤候、公御成長之後、寶持院ハ、何こ而も望候

元和四年六月二日

四一一

早曉ノ靜座

一家滅亡ノ時節到來セバ潔シク倒ルベシ

士民ノ信賴ヲ受ク

家中ノ上方ノ事ヲ知ラズ

落首ノ規ヲ見テ新浪人ノ抱ノ暇ヲ與フ

直茂燒物ノ手ヲ朝鮮ヨリ伴フ伊萬里燒有田燒ノ創始鹿子村天神ニ謝罪ス

元和四年六月三日

四二二

事、御叶可被遣由被仰遣候處、私何を望無之候、こんよやくを一生給申度候、御懇こ被仰下事候間、此望御叶被下候得と被申上候、夫々一生之内、二日こ一度ツ、御使こて、昆若^{（昆若）}を被遣候由、

一直茂公ハ金峯和尚見廻之節ハ、御咄久敷有之候、一宿之時ハ、御夫婦様之中こ臥被申候、或時、夜明く目を覺し見被申候得者、直茂公不被成御座、御前様計御休被成御座候、金峯驚起上、見被申候得者、公ハ次之間にて靜座被成御座候、以迄を夜明こて、長脇差御さし、靜座被遊候、金峯立腹こて、以の外縁あり被申候由、

一元茂公ハ直茂公御咄、上下こよらば、時節到來をきり、家う崩るゝもの也、其時崩をましきとそれハ、きたる崩しする也、時節到來と思そぞ、いさきよく崩さるう能也、其時ハ抱へ留る支も有と被仰候由、月堂様御咄を禪界院殿聞覺候由也、

一日峯様御存生之内ハ、在々端々之者共、^{（兼）}かり兼さる事有之時ハ、佐嘉之方を拜、鬮取候て、加州様御教被成候へと申候而相定候由、

一稻垣權左衛門御暇被下候事、

直茂公御代、御家中之者共、上方之事一向不存、公儀方勤候者、倉町九郎一人あられて無之候、國廻り上使之附廻りを九郎被仰付候處、上方衆ハ銀之輿^{（輿方下向シ）}をそめ申候間、早々被仰付候様こと注進仕候、又野うけこ而、上使をり辨當御振舞之時、毛氈を敷有之候を、何と仕さる致様うと、色々工夫いとし、毛氈を膝こうけ、野かけを給申候、みかき輿、毛氈あさへ不見知躰之人候得共、責而公儀方九郎あられて無之、別而御事欠候故、稻垣權左衛門与申浪人を二百石こ而被召抱候、其時分高傳寺御參詣之處、門前張紙、御譜代のものごよとらぬ知行をいさぎきり來て、二百石とると書付有り、御歸之上、譜代之衆こさへ無沙汰いふし、他方者こ知行くま候事、何を不合點之段尤至極、我等誤、痛入候、公儀方無調法こ而も、國家之害こて不成候与被仰、權左衛門ハ右之段被仰聞、御暇被下候由、

一有田皿山ハ、直茂公高麗國御歸朝之時、日本之寶こ可被成与候而、燒物上手頭六七人被召連候、金立山こ被召置、燒物仕候、其後伊万里之内藤ノ河内山ハ罷移、燒物仕候、夫々日本人見習、伊万里、有田方々ハ罷成之由、

一鹿子村龍昌寺之天神ハ、隆信公宰府御勸請被成候、安藝殿若輩之時分、天

元和四年六月三日

四二三

元和四年六月三日

四一四

家中ノ士
ナノ軟弱ト
憂フルヲ

神之森こ而、鳩を打被申候處、迦申候こ付而腹を立、今ノ鳩こ中り不申ハ、
天神之業こ而有べし、よくき天神ありとて、二ツ玉を込、寶殿を裏表こ射
ぬき被罷歸、直茂公ハ右之段被申上候、公被聞召、扱々無勿躰事を仕候と、
則御行水被成、御上下を召御參詣、只今疎早者（相下向シ）以之外之儀仕、御怒可被遊
与、近來迷惑千萬奉存候、彼者ハ兼而右之通之疎早者こ御座候、平こ御免
可被遊候、爲御斷某罷出候と、地こ御平伏、高吟こ御斷被仰上候由、
一直茂公ハ御用こ而、安藝殿三ノ丸ハ被罷出候處、御留主こ而候故、とある
へ御出被成候哉と被相尋候得共、相知不申候、翌日被罷出候得共、御座所
相知不申候、方々被相尋候處、隅矢藏被成御座候、則罷上、いヶ様之儀こ、そ
とこ御座候哉と被申上候得者、二三日此所ハ國之風俗を見候と被仰候、
夫ハ如何様之儀こ御座候哉と被相尋候得者、人通被見候て考ゆる事也、
歎ケ敷事ハ、寂早肥前之鑑先、弱き付とると思へる、也、其方々と心得
候て可罷在候、往來之人を見るこ、大か上ハ、端々打お流し、地を見
通る者計に成と、氣質がおとあしく成とる故也、いさむ所を歩まば、鑑
を突ぬ物也、律儀正直こ計お不へて、心々逼塞して居、男業成へうら

武士ハ油
斷スベカ
ラズ

横尾内藏
允ハ無雙
ノ鑑突

は、間こは空言をいひちらし、とりかゝりとる氣持、武士の役こ立也
と被仰候、是ハ安藝殿虛言候由、（中野氏 咄也）
一 日峯様御伽之人々ハ仰付けるハ、侍あらん者ハ、不斷心ゆる事をかき、
不慮之事ハ仕合せる也、油斷をせハ必落度有物也、又人之云とて、人
を悪クハ云ハぬ也、奉公之道ハ人（相下向シ）を進メ、物見遊山こ人ハ進メ
らととるよし、知らぬ事を人の語ルを、知とふりハ悪き哉、知と事を人
之尋し時、云ハぬハ悪しと御意之由也、
一 直茂公御前ハ多久與兵衛殿、諫早右近殿、武雄主馬殿、須古下總殿、堪忍候
御咄之節、美濃柿を被差出、何を賞翫有、與兵衛殿柿之實、菰と敷之間
こ潜こ押入置とるを、直茂公ちらと御覽候て、臺所こ大工ハ居ぬ、道
具を持罷出候へと被仰、其敷を迦と被仰、柿之實を捨、本之如く敷をこ
め候へと被成御意、其通仕候、いつとも迷惑無此上、與兵衛殿其後ハ一生
釣柿を不參候由、
一 横尾内藏允無雙之鑑突こ而、直茂公別而御懇こ被召仕候、月堂様ハ御咄
こ、内藏允ハ若さうりこて、虎口前之鑑を其方々とに見度事あり、誠

元和四年六月三日

四一五

内藏允直
茂ニ呈シ
タル追腹
返却ヲ求
ム

直茂船ヲ
好マズ

鬼ノ子取
ト云ヘル
遊戯

元和四年六月三日

四一六

こ見物事こ而有之と御褒美被遊程之者也内藏允も御懇忝存追腹之御約束誓詞を差上置申候然處百姓と公事を仕出し御披露有無理之公事こて内藏允負こ成より其時内藏允立腹いとし百姓こ被思召替者う追腹仕事不罷成候誓詞被差返候様こ申上候付而直茂公一方よき事一方はまろし武道はよき事と世上まらておしき事也と御意被成誓詞御返し被成候由

一直茂公兼而御船嫌こて船之匂磯邊之匂御胸まけろへ御食曾て不被召上候慶長年中御下國十月八日之朝順風こ而御出船之處八ッ時過より難風吹出夜こ入大浪打懸梶を打碎方所不相知船頭舸子其外船中之者不知前後其内舸子一人と藤嶋生益只二人相働候得共不及手餘り危ク候付而御屋形内こ生益參り持永助左衛門を漸呼越（越カ）兩人こて奉懷起屋形之上こ奉揚欄干こ取付を申万一誤有之節何成共御取付被遊可然と申上御後か助左衛門欄干共奉懷公御吐逆被成助左衛門も吐逆仕御顔御胸御懷に吐込言語同斷也生益戯に申上候ハ其御様體ハ童共之鬼之子取こ似申ると笑申船底之代梶を舸子と兩人こて取出漸く押こ抱

夜半こ及比風少あるみ御船少まはまる然處御供船二三艘御召船之脇を通月影こ公被成御覽もやい候へと被仰聲々呼懸候得共風波荒く耳こを不入哉行衛不知吹き行公大こ御立腹何うし乗るを慥見届より此船安穩せば切腹させべしと御怒被成候生益申上こて此風浪にく不任心義こ而奉見捨こ而ハ不可有と申上候暫有く又大風吹出代梶を打折り御船漂廻り候公梶を又打折するくと御尋之時何者とハ不知板を踏折ると申候公大こ御立腹我を多ぬらうそ奴成敗仕レと御怒被成候既よ御船沈へき様子也公生益を召最早不及力と見へより腰之物差させよと被仰生益申上候ハ如此成時誤有物こ候事極ル時節ハ御腰物可奉と申上ル公重而平こ差をよ脇差計成共差をよ乍不肖天下こ名我知まると加賀守ハ何國之浦こ而も死骸丸腰といまんと子孫之耻也平こ被仰候生益推量仕るこ不事極以前こ御自害可被成御氣質兼而よく奉存候故曾而不應御意船底こ入米俵を二表取出し細引こて結ひ合を梶穴ハ海底よ下ル依之御船静り御安堵被遊候然處舸子之者申ハ夜を明方よ成山見へ申はと申ス諸人悦び見候へど播州明石之前纒

元和四年六月三日

四一七

五六町澳之方也、風浪も諍り々々、橋舟に公を奉乗、御打物を持せ、鹽屋を借り暫く奉休、御衣（影）被召替、御一睡被遊候へ、御顔色直り、御行水被成、四ツ時分御膳上り、御機嫌克、生益（影）終夜之働故、安堵被遊（影）とて、御印籠を延齡丹御吞努被下候、其後御無事、御歸國也、右之始終、御前（影）勝茂様被聞召、從御前様御頭申、勝茂公（影）知行御加増被下候、御前（影）時之様子具（影）物語仕候へと、於御前御子様方不殘被成御座、被聞召上、御前様御聲を被揚御落涙、御合掌被成、生益を御拜被成候と、宮内卿、清左衛門姥（影）咄被申候、

姥ハ生益の女房也、宮内卿ハ木村主馬母也、

右咄を直茂公も被聞召候而御笑被成候、今ハ笑レ々れども、其節中々可笑心（影）あし、生益脇差をくま（影）あぢ、喉を可突と思ひけ（影）共、くま（影）不届（影）思ひしよ、今は大慶也、其節脇差を可取氣力ありしと被仰候、御歸國後、御召船を見捨、乘通り候者御沙汰無之、諸人奉感候と也、

生益ハ、孫清左衛門、右乘通候者之名を尋候へ、は、生益以外立服、御主人さへ、其後御意不被成事を、我等口方其方へ可申聞哉、奉公をも勤御者、其様成無遺慮之事を申物、其様成無遺慮之事を申候由、

與賀本社
大堂ノ三
常燈

一壁書二十
一箇條

一直茂様方與賀社、本庄社、大堂社、此三社ハ常燈被差上候、大堂ハ月堂様御産神（影）而候故、被差上候由、與賀ハ、直茂様三御丸（影）多布施御通被遊候砌、與賀御神前（影）而、社内（影）くらき（影）と申聲仕候ゆへ、神前へ人を被遣御見を被遊候へ（影）、人ハ居不申、殊之外（影）らく御座候と申上候、夫ハ常燈被差上候由、右三社共（影）、御隱居以後も、直茂様御自分（影）御と（影）不し被遊候故、今こそ小城より新銀上り申候、如右覺罷在候、（左仲）

〔鍋島直茂譜考補〕

十一 附録 御壁書 并 御物語

- 一 利發ハ分別の花、花さき實（影）あらさる類多し、
- 一 諸藝ハ獨達しか（影）とし、分別を不加時ハ、却て身の難とある事多分、
- 一 己下の心を能（影）さ（影）り、其旨を（影）もつて、上（影）至て校量候半者、迦有か（影）とく候、
- 一 憲法ハ下輩の批判、道理の外（影）理あり、
- 一 下輩の言葉ハ助て聞（影）、金ハ土の中（影）に（影）ある事分明、
- 一 子孫の祈禱ハ、先祖の祭也、
- 一 先祖の善惡ハ、子孫の請取手次第、
- 一 信心ハ心乃掃除、人の心を破（影）さる様ハ、祈禱ハ花（影）比（影）籬（影）、

- 一 身上乃届ハ、升橋上ル様ニ、
- 一 人間の一生ハ若キニ極ル、一座の人ハも何ウモシキ様ニ、
- 一 理非を糺セ者ハ人罰ヲおちス也、
- 一 大事の思案ハ軽くセベシ、
- 一 諸事人ヨリ先ニモスルベシ、
- 一 諸事堪忍之衷、
- 一 毎物書道セズ候事、
- 一 鬪占ハ運ニ付候間、差立用候ハ、大ニ可有迦、
- 一 萬事モスルヲ支十ニ七ツ惡シ、
- 一 軍ハ敵の案ニ不入様覺悟セベシ、透間を計る時モ勝利必定、
- 一 武篇ハ龜忽ぞ、不斷不可有、
- 一 上下ニ不依、一度身命を不捨者ニハ不恥候、
- 一 人モ下程骨折候事、能スルベシ、

以上廿一ヶ條

一 或時多布施マテ、薄色乃牡丹の花を御立、出仕之者共ハ、花之見事ナル謂

立花ニ託
フシテ武
道ヲ説ク

高傳寺不
徹直茂ヲ
評ス

を存したるウと、御尋被成候へ共、是非を申上とる者なし、然る處綾部右京、千布太郎左衛門、大隈玄番允御前ニ罷出候得者、被成御意候ハ、一兩日此花を御生被成出仕之者ハ、花の見事なる儀を存したる哉と被成御尋候へとも、とろく申上とる者なし、其方なとハ存しある哉と被仰候、右三人之者も、唯花ハ見事ニ御座候と計申上る、其時被成御意候ハ、偕ハ其方など、難落著と被及御覽候、もろくの結構なる物を見よ、或ハ金銀、或ハ苦勞造作等、皆心ニ此る物也、花モ左様成儀ニハ、五色の色計心ハ、色香計の道ヲモシバ、扱々奇麗成物也、花の見事成處ハ、多分是マテ有ベシ、立花ホトハ苦勞して立るものハ、拜見スルハ苦勞ハ思ヘズ、きれい成ことハあり也、夫ニ付おもヘハ、弓矢ホトモ、國郡の望計マテ、身體モラハ無理ニ欲ヌルハ、子孫ニ可殘と被仰候、此旨高傳寺の不徹和尚ニ、千布太郎左衛門咄候ヘハ、我々共何拾年苦勞申候へ共、ケ様成儀ハ不存候、直茂公ハ物者其儘之大悟之人ニ、御座候と御申候、其後半年のマテ、不徹和尚ニ御面談申候ヘハ、いつそや御物語被成候、加州様花を

元和四年六月三日

四二二

御詠被成候御心ニ付テ、自己心比得道申、一首よミ申候由被仰候其歌ニ、
取ヨとして何と志されハ何としてそひ縁ならに其身こひしや、是不
徹和尚の歌取置、

一或時鴨打如作、公被申上候ハ、むろしより横座乃鑑ハはくると申人も
有、まよはせぬと申人も何置、以つて可有御座哉と申、公被成御意候
ハ、諸人すきのこと取らてハ語らぬ物也、常の咄こも、そた之事取らて
ハ語らぬ物也、武道の事語らハ、多分武篇をきとるべし、武道よすたあら
はまよはふくし、無左共常ニ廣言をいそ、自然之時少成とも、其口合を
をし、然ハ横座乃鑑ハはくると有べしと被仰候、如作も當座出仕之衆
も御尤と申上る、

一武士ハめつらしらぬ事あれとも、武篇たしなむる者也、武篇の嗜ハ、
まつ相當ノの武具油斷取く所持し、左候て傍輩と以らふも心よく寄
合、親子兄弟乃ことく取るべし、ケ様よ多分ハ眞實なまハ、自然之時互
こ見捨せ、壹人ヲ貳人ニ成、貳人ヲ五人拾人ニ成物也、然ハ一虎口すべし、
又一身計をととる者ハ、人ヲ見捨るぬ物也、一身たぬは取置とも、

横座ノ鑑
ヲ付クル
可ト

武士ハ武
篇ヲ嗜ム
ベシ

物事手取
早ニスベ
シ

武道ニ師
ナシ

城ヨリハ
人ガ大切

人ヲ持ツ
ナリトハ情

犬のあゝあひの如し、ケ様之事專一とする物也、是ハ我等能覺へとるこ
と何置、多分侍をせつるとて、謠、亂舞、歌、連歌比様成こと計ハ貪著する事
難心得、武士のまぢ調り候てよりハ、尤侍之作法何よてもくるしあらは
候、あし取むべし、

一武士ハ每物かたシ、手取早とする物也、兼而身持可入事と被仰候、
一若者のまぢ嗜をき事何置、縦ハ軍陣よて、敵陣之事何色こても見窺取と
云付ルハ、まよはせ左様成事仕とる儀無之と云、惣而武道に師匠をし、二ツ
とりのめよも逢、數度難儀志とるガ武士道之功者と云、然ハ武道ハ師取
し、兼て心より取置よを利て也、今之ことたの返事努ぬもの取置と被仰
候、

一城などは入々入らぬ物也、能大將、能人持たるは、城郭のあふも入をし、惡
敷大將の人もよぬハ、城郭堅固無益也と被仰候、
一人を持事ハ情也、但情深くの取置候ても、大將心持惡考まハ無益也、大將ハ
無欲ハ慈悲深く、いあふも直よすべし、左様成人よハ人集る、己と何はま
置たる人數ハ、一騎當千とるべしと被仰候、

元和四年六月三日

四二三

立矢ヲ合
戰ハ十七
馬ハ十八
度

力量勝レ
飛走ニ長
ズ

慈悲深シ

約束ヲ重
ンズ

不斷ノ身
持ハ正直
ベシトス

元和四年六月三日

四二四

一公十八歳を以て五十餘歳まで、御弓箭おし立たる合戦十七度有、馬ハ十八度目也、右十七度之内、一度も負鎧ハ無之候、其外夜うち、道まちの小せり合へ、五日十日と無之事ハ無之候、其間ハ自身御討候敵大形二三百も可有之と御申候、御生付刀を以て御座候、放者おと數多く被成候へ共、刀に手抜の考あるもの無之と御申候、力も人より勝れ、御走り候とも人より速く、二間三間の堀なと輒く御飛候、ケ様ニ被成候へとも、御若年の頃を以て慈悲深く、乞食非人より至るまで御慈悲あり、我欲無之、上下によらば御取分おろく、御情深き人ニ御座候、夫ニ付、他國を以ても、飛彈殿仰あらは、堅約可申と有儀也、一度被仰合候儀、有無御引取支人にて御座候、ケ様は剛氣ニ御座候へ共、御身持不斷ハ以てあもををたらあも、爪根御みあま、御嗜不淺、御食物風情まで、兒おとのことくに御座候、忽而御身持我あめに何事も不被成、家のため、諸人のためとあり、朝夕被思召候間、家中之者思ひ付申事、中々言語道斷候、

一人の不斷の身持ハ、いゝ様ニ仕物ニ候哉と御尋申人あり、公被仰候ハ、いゝあも正直ニ道被道とする物あり、奉公といふは、主人のためを思ふこと也、今時の侍ハ、我身ありに奉公をする也、縦今日ハ雨中也、定而加賀殿さひしく可有之候間、御伽可申と存、出仕候へ、終日咄歸たる後の心無事あるべし、夢にもよれ夢見るるし、又加賀守被だぬし、何成共もらひ可申とおもひ罷出、あへりたる後の心案して見よ、むま支事にてハ、あもあも、ゆゑも犬おどよく見れ、見るべしと、御咄之衆被仰候、

一勝茂公の御代、與賀の庄ニ稻をあり盜とる者あり、百姓とも見とかめて奉行所へ上ル、則目附遣さし被相究候へハ、分明也、罪科はおこせたるへき、究り申候、併シ不依上下、御殺可被成者ハ、直茂公御聞可被成と兼而被仰ニ付而、多布施にて披露あり、公被成御意候ハ、稻よりたる輕重有べし、細く被聞召度由にて、横目之衆又々被遣被相究候後、盗人申候ハ、此三ヶ年老母相煩候て、某事何方へ奉公おとも不仕、混と相添看病仕罷在候へハ、手前困窮仕儀無殘處候、然處母申候ハ、早苗の米少し被下度之由申候へハ、不及是非、脇穗を以、少あり母よく見せ申候由申上る、此旨目附之者申上候へハ、公此盗人ハ子細可有と思召上らるる、誠ニ様子あり、母育るの意、見れ穂かり候儀、不便ニ被思召上候とて、八木拾俵被下、

密ニ稻ヲ
刈リタルヲ
者ノ孝心
ヲ愛シテ
其罪ヲ免
ス

と也、今時の侍ハ、我身ありに奉公をする也、縦今日ハ雨中也、定而加賀殿さひしく可有之候間、御伽可申と存、出仕候へ、終日咄歸たる後の心無事あるべし、夢にもよれ夢見るるし、又加賀守被だぬし、何成共もらひ可申とおもひ罷出、あへりたる後の心案して見よ、むま支事にてハ、あもあも、ゆゑも犬おどよく見れ、見るべしと、御咄之衆被仰候、

一勝茂公の御代、與賀の庄ニ稻をあり盜とる者あり、百姓とも見とかめて奉行所へ上ル、則目附遣さし被相究候へハ、分明也、罪科はおこせたるへき、究り申候、併シ不依上下、御殺可被成者ハ、直茂公御聞可被成と兼而被仰ニ付而、多布施にて披露あり、公被成御意候ハ、稻よりたる輕重有べし、細く被聞召度由にて、横目之衆又々被遣被相究候後、盗人申候ハ、此三ヶ年老母相煩候て、某事何方へ奉公おとも不仕、混と相添看病仕罷在候へハ、手前困窮仕儀無殘處候、然處母申候ハ、早苗の米少し被下度之由申候へハ、不及是非、脇穗を以、少あり母よく見せ申候由申上る、此旨目附之者申上候へハ、公此盗人ハ子細可有と思召上らるる、誠ニ様子あり、母育るの意、見れ穂かり候儀、不便ニ被思召上候とて、八木拾俵被下、

元和四年六月三日

四二五

下賤ノ者
クニ禮ヲ厚

人ヲ陰ニ
テ誹ルベ
カラズ

努メテ罪
ヲ出サズ

罪ハ輕ク
賞ハ重ク
スベシ

元和四年六月三日

四二六

以のよも能母の孝行を可仕候、猶不足於有之ハ、重て可被下之由にて、死罪の沙汰ありし、

一我人國司よなと成事ハ、自然の儀也、毛筋まで下賤の者よありとるこ
とありし、縦ハ我等多布施の往來ハも、加賀守ヲ通ると云て、上下共ニ禮を
する、扱々無勿體事の如、乗物を置おり、同様ニ禮を調度物なきとも、結句
輕薄成へしと思ひ、乗物の内にてかしらをかともむ、禮をそる也、愛宕、白
山、偽よあらは、惣して下乃者として、物之云能キまゝに過言あさせぬ物也、
能思案をして見よ、いろ様乃身比科(もろ)ハ見ゆる物也と被仰候、

一人此事を陰へても、堪しらぬ物也、能々嗜むへし、我事をあけよても人の
沙汰せハ、いろ、可有哉、不斷心よか、可嗜と被仰候、

一公御一代よ差立ぬ御法度なと背とる人多候、勝茂公よりも奉行所ハも、
其科可被仰付と御座候者數多御座候得共、何角と被仰直、被相助候、但御
家に違とる者、鍋島助右衛門、秀半右衛門なとハ、根ををり御殺被成候、
一家々の掟ハ、色々可有内よ、火のふりハ、そと者ハ切腹、切腹ハ、牢
人、牢人ハ只御ある候て可被召置候、可呵者ハ只やそらよ可被仰候、

可呵の被牢人、牢人さそべき者を切腹、切腹さけをそと者、磔よ
可掛者を火のふり、ケ様ニ仕候ハ、其過分比積る所、勝茂公身の上ある
べし、返そ、科ハかるく、少の忠を重く仕候ハ、家ハ連續あるをしと
被仰候、

一金銀米錢ハ、町人、百姓、非人ヲ持もの也、何としても土うもとぬ積也、尤軍
陣、國家之を宛の用意ハ、格別ありと被仰候、

一侍のあそひ事よハ、鷹狩、鹿狩とも成へし、鷹はあひ候へハ、國の境、難所
と見えよし、かく云とて、世上ニ差合様こそ無之、可被相嗜也、尤鷹すた、鹿
そきハ無益とるへし、

一人ハ上下によらば、不斷の身持覺悟肝要あり、不肖あるをのハ、人の異見
をそきハ、自然の時ハ能様こそすへしといひ、多分不斷の覺悟をとるを
と被仰候、

一商そ宛の者と深知音無益也、奉公も商よ可仕と、主人ヲ見付あらはあし
うるへし、殊ニ不及是非次第あり、奉公ハ身のよめと努々せぬ物也、主人
のよめとそる物也、道ヲ道よて有間、必報あるをし、後ゆひさ、さぬ事
と被仰候、

元和四年六月三日

四二七

金銀米錢
ハ町人百
姓非人ノ
ナリモノ
ナリ

平常ノ身
持ヲ慎ム
ベシ

商スキノ
者ト知音
ヲカ
ラズ

武功ヲ申
立テ賞
ヲ望ム者

家中ノ進
物ヲ受ケ

迷信ヲ排
ス

と被仰候、報をせとも子孫のせめと成るし、

一 或人度々手柄を仕とる者、知行なとあるく、不被下候間、或時直訴申上候へ、某度々御用は相立候へ共、御褒美なと不被下と申上候へ、尤之事也、曾て御失念おく候、但鍵へ男業、知行杯へふりさと被仰、不可恨之由よて、思召合らば候へ、此中汝う男にさと物之不しさに仕よりと見へり、其儀ををせ、此脇可被下と被仰候、

一 或者備前長船元重之長刀一段見事成を進上申、被成御覽、物之見事成物あり、定而高直成へし、早々上方に上せ、おし候て用所調候へ、御子様方其外御用も可有候へ共、苦しあらぬ様、當分手前之用所調候ら得とて、御うへし被成候、惣而家中之者の所持之物進上候ても、御受納不被成、増而御所望と有儀御一代無之候、

一 或者子五人持とるう、一人宛煩出死を、山伏、巫祝とよて祈候へは、そんなやう其者と白狀申候、死を度とに、右之靈鬼差出取殺、お死候て、其母公に申上候者、子供五人なら、其者の女房を取殺さ申候間、御沙汰被成可被下之旨申上ル、公被成御意候へ、睨其者の取殺とるは究り候へ、

財寶権力
ヨリモ身
持ガ大事

子孫ノ爲
メニ計ル
ベシ

神佛ヲ信
ズベシ

汝も彼ノ者う子供を取ころせへし、御免被成と被仰付候へ、おぼへ罷成間敷と申上候、汝う取殺事おらす、彼者う汝う子を取殺とるはうおとるへし、但被成御免候間、取殺せと被成御意、御歸し被成候、

一 世上之者之美を、諸の物の結構成物、又者當時人の威勢おとを見て、羨み、金薄たりも見事成へ、能人の身持覺悟也、風雨よもそこ糸を、朽せぬ物也、見てもく、見あるは、ケ様成を柳を、緑花の紅と云へし、此道知とる者へ心よくし、又知ました事にて、無之、肩衣付へあり嗜む、侘言なりと被仰候、

一 或時公木を御繼せ被成御覽候刻、有者參上申上候、其方へ木をばき候し哉と被仰候、此者御返事、最早年の末に罷成候間、左様成儀不仕候と申上、扱々汝へ沙汰之限者おや、汝う見るへまと思ひ候し哉、子共孫ともへおせぬ様、物毎我爲計よせぬ物様、末代他人の爲とする物を、他人とて無別條を、不及是非儀を申と、おとるに被仰候、

一 兼て信心をいとし、佛神を祈るへま事あり、おとへ前かと能吟味談合のとお、偕合戦よ及時、ようるをまとして、偕々何の弓鉄炮へ能所こうち掛、

人ヲ使フ
ノハ外様
掛ケヨ心

負軍ノ時
ハ辻切強
盗ヲ許ス
ベシ

肥後へ移
封ノ内意
ヲ拒ム

この昇^①能所ニ差出たりと云物也、此時ハ合戦大形心乃儘とるへし、又
 ありあるへまとしてハ、兼而之相圖^②相違し、倍々ありの弓鉄炮ハいな所、打
 掛とよ、あり誰り下知そ、然んと云物也、此時ハ多分仕損する物也、此
 様成事、功者おらてハ、おらぬ物也、唯一方にありし、心外之儀有との也、然ハ
 天道事、こても可有りと被仰候、風雨おとも、このむ時、も有、又いやなと思
 時、あり、勝負を度々身に覺へとる、功者おらてハ、おらぬ物也、心之外之
 時、功者も手おらも入物也、能々分別するしと被仰候、由、元茂御咄被成候、
 一人、役仕フよ、外様之者を心お、近習之者ハ、不斷之事、多分近習の者
 ハ、あり心り付もの也、一命お、さる時節ハ、上下分る事、こて無之と被
 仰候、
 一、負軍いと、し候節ハ、侍共、辻切強盗など致させ、士卒の心を強盛、引立
 候て、重ての軍ハ、する物之由被仰候、
 一、肥後一揆後、淺野^③彈正殿被申候ハ、肥前を肥後、御替へ國ハ相増申候間、
 御望おら、御上、何様御取成可申由候、上意よてハ、無之、淺野殿自分の
 内意よて候儀と、公御答よハ、我等も望よハ、存候へ共、左様成儀候ハ、家

信ノ心ニ
叶フ様ニ
ト神佛ニ
祈ル

御伽ノ者
不寝番

加増スル
時ノ心得

治世ニ勇
士ヲ養フ
必要

中の者とも、皆々可罷失由御申候故、其沙汰無之候、
 一、公本庄ノ宮御社參の時、勝茂公御同道被成候、御禮拜相澄^④於神前公被仰
 候ハ、信濃守ハ明神ニ何事を祈候し哉と御尋被成候、勝茂公御答ニ、御兩
 親様御息災、武運長久、國家安全と祈念仕候由被仰候、公差て御肯被成さ
 る御様子ニ付て、公ハ何と御祈誠^⑤被成候哉と被仰上候へハ、我等も終
 了左様の事を佛神に祈願、としたる事お、若き時より、信の心、叶候
 様、御守り下さ、候へと祈候、則大明神の御照覽の由、
 一、公不斷の御伽老功之者仕候、御休被成候て、不寝番も、此者共、二三人
 充よて相勤候、障子一重、罷在、冬ハ火鉢に、あり、ちや、あそこ被下、あり
 とも、緩々とあり能様、被仰付、同士ノ古戦武功の物語おと致シ候を
 被聞召、御目醒申とる時ハ、色々の御物語被成候也、
 一、公、勝茂公被仰候ハ、家中之者取立候て召仕候、知行等加増せらせ候
 時、何百何拾石乃口を、みる候て、くさる物、銘々口を、えて度存、奉公
 を勵ム、よて候、可得其意、由、
 一、公御咄、猫程重寶おる物ハ、なし、家屋の鼠、防、何様成、くみよりも、

元和四年六月三日

四三二

能猫を求むるより、あらしと被仰候、是ハ猫を御多とへこ被遊万事こ心
被賦、能工夫を以と努と御教被成候、主水、茂里、其儀を御尋申上候へハ、乍
若輩能氣う付て尋参る、其心ハ、能武士を治世ハ飼置時ハ、戦國の重寶、敵
を防乃手きて、是よあらしと御教被成候、左候て御申被成候ハ、猫も鼠取
き時ハ無用之物也、勇士も治國ハ似合ぬ者取きとも、油斷なく、情を以と
重寶とせへきよし、御粉骨の御咄之旨、須古市兵衛より、有田勘解由へ教
らき候、

血氣放埒
ヲ戒ム

一血氣なる者の多々取違る、夏多し、勇氣の鼻にいとせハ能と此と思ひ、
恥を知らざる、夏多し、深く方法を以と、理味を辨へき事專一取置、多とへハ
鶴の龜なを養ひ、冬とく参る時、其意その夏つらなる参ら類成ものも、大
キ成としこてく夏へ、水こて洗ひ、大切こ養ふ、冬とつくは禮を取きな
り、畜類すら禮を知る、い夏んや人倫として、何そ其道を忘るゝや、守らさ
る夏悉法外也、縦ハ鶴かゝらひをあそ折、人見るや否を計り、不見と知さ
ハ、雌雄羽をむろ参、禮儀正くして夏を取、又獅子猛しといへ共、亂ハ淫せ
はして禮を守る、其狐を取時ハ、虎を取勢ひよて食せるよし、如此畜類す

醫術ヲ嗜
ムベシ

常ニ藥ヲ
懷中スベシ

能ク人ノ
心ヲ看ル
ベシ

言ハ先ニ
セズ事ハ
速ナルベ
シ

人ハ平生
ノ覺悟第
一

一諸人能嗜て知るへきハ醫術なり、或ハ主君病ある時、或ハ父煩ある時、其
心を知らば、看病成難し、何事も道知る夏肝要也、以と志ありとも、
こつは看病いと夏ハ、不忠不孝よもあるへし、就中戰場杯こてハ、不慮
之病こも、醫者有合ふ事かゝあるへし、又常ハ藥種嗜と懷中せへし、藥ハ
身の爲こ持よあらせ、皆人の爲也、道中取よても、不計食傷をうの病あ
るより、少の藥よて、其平愈せる夏、誠こ以てたのもした物なりと、常々深
堀茂琢へ御咄被成候由、
一人に心被置ました物よ置はうつ参也、又人よ心を置へきものに置らぬ
はうは参也、能人の心を見る事專一也、
一人を口よて云る事ハ少シ延引し、心よてすへき事ハ先達ハ本儀也、
一人ハ平生の覺悟第一也、縦少シの越度とりと云共、平生のぬえやうハ先
達也、縦よさいの身成共、平生乃存分人をり不めらるゝ人ハ、少々の事
を隠る物也、
一我子をか夏ゆる事、皆諸人うまひ物杯く夏せ、能著物なときせんとなす

元和四年六月三日

四三三

慈孫へノ

元和四年六月三日

四三四

木曾義仲
評義經ノ

分別ハ文
武ノ外

武篇ノ覺
悟
恐レテヨ
キ物
分別ナキ
武篇ノ輕
敵ヲベカ
ラズ

る也、夫ハふくむ成也、子ニ喰する物、取せる物を、年比の親類、家老、家中
ニ取らせ、不便を懸、頼むのよし申、心より忝かり、用も立へきと存候程、
控せり何ぞ里乃大切也、

一平家を木曾義仲うたいらる、都ニ在京、尤禁中より宣旨共被下、町人共も
て取し、餘りおまゝ、榮花ニ任候て、判官御兄弟討手に御登を、打取、平家を
も御志保め有、判官都ニ在京有て、又木曾義仲もをて取し、榮花にた
こり候間、梶原逆櫓乃遺根も有、讒言申、終ニ亡ひ候也、是も思召事取、御
成り上り候付而、鎌倉へも御つをり取、又ハ鎌倉を里檢者をも御乞、
夫ニ志よしをひをもを、折々のほくろい有て、在京有時ハ、思召儘の天
下被御志き有へ支也、是才覺の下手也、辨慶も、文武二道とは申を共、分別
ハ文武の外とるへきり、

一人の武篇の心持之事、一ニ心、二ニ人、三ニ武具、

一恐るるを物、主人、女、法度、身の出頭、分別取き人、天道、闇夜、

一分別取き武篇ハ入るゐらす、分別ノ諸をんよ

一敵被かるんする物ハ、我るるむる、

上中下ノ
分別

元ヲ忘ル
ベカラズ

人ハ祿ヲ
以テ使フ
人ヲ頼ム
ベカラズ

高傳寺再
興ノ地形
フニ意ヲ
用

此心勿論、武篇又ハ平生の心取、

一上中下の分別の人、上ハ、人の能キ所作ノ分別を見取て、我ウ分別取き
也、中ハ、人ハ異見をされて、我ウ分別取成ス、下ハ、人ハ志を云聞を
らしては笑取、

一上中下の人の分別、上ハ、能事を胸の内ハ腹ニ吞込て、致所ニ出也、中ハ、
能事胸迄來レとも下ニ落著を、縦落著ても、二度ヒ出る支なし、下ハ、能事
聞ても耳ニ不入、

一元を里小身の者ハ、元を忘ぬりよし、元大名として小身ニ成候者ハ、元を
里せよ、

一魚ハるるを以と、鷹ハ鳥を以取、人ハ祿を以はらふ也、

一いゝよ知音持候共不頼、只我身一心と心得へし、

一我氣ハ以らぬ事、我爲ニ成物也と被仰候、

一公高傳寺御再興、末々迄相續の御了簡ニ而、寺乃地形万代不易、且ハ火災
轉除の爲め、水字の形を御表シ、外を里内ニ水流入候様ニ御建立被成候
也、

元和四年六月三日

四三五

三徳ノ臣
ヲ持タズ
マラズ
治

非殉死ノ是

大將不斷
ノ覺悟

元和四年六月三日

四三六

一國主ハ、三徳之臣を不持ハ國不治、就中、傍頭之者、三徳兼備之者を常住側
ニ召仕、常ニ古實之咄を聞、日々ノ政務致セリ、治國第一之事候、然とも三
徳を兼スル士稀成事候間、一徳充有之者一人充三人、傍ニ召仕候ヘハ三
徳揃、其者共を不斷傍ニ置、古實聞、其上工夫を加ヘ候ヘハ、功積リ國治ル、
惣而士ハ寸隙もあらず暮セヘラシ、常住文武奉公ノ心懸、油斷有間敷
候、

一追腹ハ有ヘキもの、又有間敷事也、其主人の子孫無之時ハ、小川筑後守追
腹を可切ト申候こと、無餘儀存之由、

一若キもの、直リ候ハ、鷹同前ニ候歟、或一鳥屋ニ直リ、或ハ二鳥屋三鳥
屋ニ直リ、又ハ幾鳥屋ニても不直鷹有之、人之直リ候も如此之由、

一或時綾部右京ニ被仰候者、我等若年々度々弓箭被遊、于今被思召候ハ、扱
々危キ事、勝スルハ不思議、弓箭之道知者バウリ、て社ニめと被思召
候、天下取ト引請候てハ、志ラぬ事、二萬三萬之國取ラ、堪ヒなトハ、まけ
ぬ事、恥可有之ト被成御意候、とし、端的之御咄承候、分明成儀ハ、定而
勝茂公、元茂公ニハ可被仰置候、夫ニ付而、大將不斷之覺悟之體、御物語被

成候者、先大將スル者ハ、弓矢ニ志テ、弓矢すねハ人ニすく、上下分るゝら
シ、慈悲情第一心ニありけよ、知行くまじりと、情取クハ、役ニ立属シ、少ノ
事ハ山ニと有物也、大將ノすねスル事に家中もすく、物に油斷セヘラ
シ、不斷功者之者集メ、弓矢之道ニシラせて聞、國ノ境ノ難所ニ見分
與頭之吟味、鉄炮之究、又小者マテノ吟味、不斷心ニ志テ、何ノ山を立、あの
村、茂厚ク取リ、敵爰ニ來ラハ、何此山ハ、勢を以テ、不と込、何ノ村ハ
ハ、勢を以テ、程おくセヘシ、取ト、手遣を其時之、おとくニする物也、常ニ油
斷候て、至其時何之、のといふ、まじ、評議まち、也、可得其意候、武士
ハ、此様成事ニ、たつさハ、遊山見物、あとも、努ぬ物也、いつ、豊に、隙ハ
有、まじ、いとつらも、毛る也、併氣ノ、べ、ハ、謠亂舞ノ、類も有ヘシ、先太體
ハ、如此、そと被仰候、

一或者參候て申上ルハ、今程春日山玉林寺ノ梅、さか、ま、マテ可有御座ト申
上候ヘハ、其身様御推量も、此比、マテ可有御座ト被思召候、唯暇乞、こ明
日御登山可有とて、深堀茂宅、深江道化、取ト被召連、御登山被成、ま、ハ、し花
御見物、左候て若殿様、御咄可被成之由候也、客殿、御あり候ヘハ、長

元和四年六月三日

四三七

春日山ノ
梅見

元和四年六月三日

四三八

老出合被申、御菓子こみるん出候へ、御手かゝり、末を茂宅に被遣、則御歸城被成候、御供之衆、終日御遊山とるへきと上下共存候へ、案こ相違仕とる御花見と、興をさまし罷歸候、御臺所こも用意被申候へ共、無益こ罷成候、御歸候ても、花御褒美はうりふく候、儲春日よても、小僧衆寄合いな花見ぬりと沙汰申候へ、長老被申候者、我若輩の比、徧參こ駿河國に罷居候折、家康公清見寺の梅御遊覽、直茂公の花見も少もちうと及、花下よて酒宴ぬと、町人、出家ぬと、する物也と、于今名人の花見ぬと、のの様成物と、取沙汰被申候と也、

一福嶋左衛門太夫殿尾州清巢(本阿)に在城之刻、公を爲御使者、千布太郎左衛門被仰付候折、節、秀頼公御鷹師衆兩人、伊勢之國司を之使者、壹人御前よ被召出、左衛門太夫殿直々之相伴よて、御食被下候、御酒之上こて被申候へ、加賀守殿へ、手自大事の鑓を十七度御突候、由承候、以る體之事候哉と被尋候、太郎左衛門申上ルへ、天下御靜謐こ付而、左様之儀へ無御座候間、分明之儀心得不申由申候へ、尤也、乍然加賀殿鑓之時分能存とる者、于今我等家内こ有之由こて、七十歳計之禪門被召出、此者へ本來京之町人よ

て、其時分具足被持、肥前こ相越、數年加賀守殿合戰之事能存候由申候、儲彼使者へ爲存くと被申候、其時彼禪門申候へ、我等肥前こ罷越候時分へ、其方様こへ御若輩こ可有御座候間、某へ御存有間敷、但御名字へ何と申候哉と申、千布名字之由申候へ、儲へ千布因幡殿之一門とるへし、因幡殿へも色立以る様之具足數多遣候、扱又御家中衆誰々様へ御無事こ御座候哉と、一々點合申候、其時左衛門太夫殿、扱者此中汝り申も偽こて無之、近代天下こ弓取數多有之、凡景虎、氏康、氏真、信玄、信長、家康、太閤まで也、是皆朝夕弓矢功者之家ぬと、も、押立とる鑓へ、其家々に五度と有之へなし、信長へあり六七度も御突候、當天下杯こも、明智との鑓、家康との鑓、柴田合戰、是ぬらてへ、一命こりぬとる鑓へぬし、其外大勢を以おしくづしとる計也、然處一代こ十七度鑓を突ぬと、云事ぬ名譽成儀、上古末代も有間敷、各案しても見候へ、命う有物歟、まらぬ者へ鑓突へやせ、と思ふ、左様こて無之、我ら口聞へ、柴田合戰こ手を合とる計也、弓箭之道少もまらぬ、加賀殿こ御目こ掛候へ、不審成事多く御尋可申と、實こ無他事被申候、此由罷歸申上候へ、其禪門へいかよも能被成御存候、左衛門

元和四年六月三日

四三九

元和四年六月三日

太夫殿に居申候哉、そつゝあしれた事也と被仰候、

一 武士たるへき者兼て嗜へき儀あり、先祖名高キ家、又勇業を以當時名震ふ家あり、如此の子孫とるへき者ハ、老若に限り、常より人よも語り、又子孫門葉之者共をもいさむへき、是勇士の義理を不失之覺悟、又先祖へ之孝行也と被仰候、此御咄を前主水茂里若輩の頃より、折々御教被成候由、大木故兵部傳承、扱々御金言哉、當世も不合點ある侍ハ、先祖より名ある家も、人こむさと語せハ、家高殿とて笑ふよし心得、先祖を引下ケ、堪せハ我家の事よてハなし杯と、狂言らしく饗應せ、皆是愚蒙之至り也、其先祖之夏を折節こも咄置ハ、若不慮之行懸こ逢時も、兼而如此之咄を人こも語り置とるものなと、むしと身をうへりて耻へき夏、誠こ大切也、又常に先祖之事ともをあるし置、又ハ能覺て心よかくる時ハ、身の行儀も直ルへし、又公御咄ハ、高家と御立、或ハ勇家と御指被成候夏、至極面白キ儀と奉存候、高家とハ名ある家あるへし、勇家ハ、先祖姓不詳とも、當時より勇名を働とる家あるへし、扱々難有御名言哉と奉信感候由、常々弟全虎に被申聞候由、下輩之者勇道仕合有之立身せハ、其下輩よりし夏を隠さハ、

面目こ咄へきもの也、

一 公諸士定指こ用へき兩腰之夏、以ハ骨強よして、又平肉深く、物能く切て、能勝手に合を嗜へし、必も上代之鍛治、高直ある道具を好て指へうらハ、疵杯も指こ切よ不問、疵ハ苦しあるはし、以ハ身中比こして、火氣薄く成て、能人油を除ケ、鍛能を、下作と云とも用ゆへし、誘も其身よ、勝手に専一よ致スへし、少身成侍共之、高直なる器、釵を帶る時ハ、不慮よ未鍊の働きもあるへきあり、惣而侍と、一、双傷こ及節ハ、万貫之刀も惜うるまし、命にうゆる時なまは、高釵程心地よあるへし、故よ戰場杯へハ重代を指へし、治世こを理替るへきなり、其故ハ定釵を用ル事、口論喧嘩、盗人或ハ介錯ケ様之夏ハ、結句稀あるへき事也、若ハ不慮之行逢こて、或ハ猪鹿又ハ犬猫杯の走り來るの折、夫を留めるとあらハ、高直成刀こてハ、必打損せる事多あるへし、万一刃を惜こ不切もあらハ、一代の未鍊門葉迄の怪我あるへし、然者物能切こ、下直なるを指事可然也、尤誘よ品あるへし、勇々しく見へて、勝手に様こ嗜へしと被仰候、

一 軍と云物ハ、殊外大事成物也、其身様御若年ハ、日夜御工夫被成候よ、御若

元和四年六月三日

元和四年六月三日

キ折ハ、御血氣御盛マテ、無二ノ御勝利ノミ御心ニ被懸候ウ、御老年ノ于今得与御得道被遊候得者、以前之御戦ハ、扱モ危キ事ト被思召候、惣而軍法之至極ハ、始終之勝利肝要也、中程ハ負ても苦アラセ、往昔ノ卷書も、多分誤る事アリ、中ノ勝社目出度々也ト云ハ、至極ニ由ラセ、尤中ハ當然取ルハ、合點之仕様ニ依リ、理も替るヘキウ、佛道杯ハ現在可宜、又儒家之當然尤至極なるベシ、武篇之一段ハ始終之勝、目出度心法之覺悟ハ、尤中道を眼トモヘキ也、若敵對之者于今も御國杯へ押寄候とも、縦何百万騎ニても、御勝利御眼前ト被思召候、但人別ニテ、御指南ニてまいるトハ、何るましく候、只一ツノ御分別セハられ上、御得道取リ、縦又野原之戦ハ、都合ニても、御旗本計ニてか立ラセても、疑取キ御勝利被思召候、雖然姓を御替候ても、御叶不被成儀一ツ是アリ、古之軍將達、天下を望テ戦也、或ハ利運ノ將も、多く申傳候々也とも、取ルハ其將ノ手柄計ニテハ、何るまし、一端まハリ來ル計ニテ、尊氏卿十三代も名計之天下取リ、大閤秀吉公之天下計、是ハ其器量も有之ぞ人なれとも、末久敷治る仕置ハ、何るましと思ひしウ勿論也、御生付之御器量ト云ハ、大權現家康公

之御智仁慮、誠以不及事ハ、日本ハ扱置、唐も双ト何るまし、前代之名將達之器量を計リ合せるに、聊右ニ及人無之、御家末代迄御相續目出度ウるヘシ、是社誠之治世ト云ハ、彼是を思案するに、天下之望杯ト云事ハ、夢も見トラハ勿體ナシ、然レ假初も、口外無用之事也、此外之望ハ、分別ニテ加ヘ老ラハ安るヘシと思ふ也、誠ニ御粉骨之御咄之由、一物毎苦勞身を助る物也、兼々油斷有間敷事也ト被仰、左候テ御咄被成候ハ、人々皆我家職之勤様を不辨、其數寄好事ノミ精を入、或ハ又指當リ利欲之事を精を出シ、事多候、是悉後悔を招ク中立也、武藝取とも、我不得手之方ノミ先ニ、海かくヘシ、是ハ別而苦勞なる一段ナリ、成程苦勞もおもふ事を懇望セよ、戰場程一大事乃苦勞ハ取ルとも、兼而分々に苦勞を定め置時ハ、さして人の思ふことク、何らモ、武士ハ能目當之老トヘシ、何れモ、常ニ精を入ル、諸法トク、武士道之助ト成ク、後ニテ自由を知リ、人も師をいとモヘキ也、万端とも苦勞ニ由ル事取ラテハ、見る所何る物ニ何ラモ、曾テ自由ニ得方をこのむ事、以の外ト被仰候、又御咄ニ、諸士ハ常ニ養生を眼トモヘシ、是尤武業也、一篇の故、少ハ醫道

元和四年六月三日

元和四年六月三日

四四四

をも知り度支也、乍去醫術を面白しと思ふ所ら、又身の毒と成へし、尤無下こ人をも殺せへし、只武士道の養生ハ一筋こある物也、刀を嗜むハ君之用、武の用也、然者兼日むさとまゝる物を不喰、定食を能定め、本性を猥よもらさば、能くつろくへき處を知て身を休め、細々敷よ意をばらば、一大事を眼として氣を治め、萬事物を不悔、事ハ天然こまうせよ、如此こ自然之理を能極むへき所也、

一公御慰こ番帳を御覽被成、何某ハいくつこ可成、是ハ何某子なるへし、孫おるへしと被仰、御伽こ御覽被成候、鍋嶋六左衛門番之所御覽被成、被召出、其方ハ我死後、信濃こ異見申事可成哉と被成御意候こ付、御意こ候ハ、御意見可申上御請仕候こ付、能返答也、さらハ申聞へし、山内之者共勝利之家來なるを、其方遣置、歸服之分こ而、從ひ候者ともこ而候、信濃守獨杯、參候時分、山内之者こ酒を吞せ申候節、後々ハ勝手こ而吞せ可申と申者も有へし、其時其方心遣いとし、信濃ウ前こ而吞せ候様可仕候、惣而俸祿ハ勝軍之時こ用こ立候、負軍こ成候時者、一言之情を懸候者おらてハ用こ不立候と被成御意候、數年之後、勝茂様山内こ而雉狩被成、日暮こ

直茂鍋嶋
六左衛門
ヲ戒ム

負軍ニハ
情ヲ懸ケ
タル者ナ
ラデハ用
ニ立タズ

齋藤用之
助ヲ庇護
ス

御歸、御洗足被成候處こ、誰ウ罷出、當所之者ハ御酒拜領ハ、勝手こ而可仕候、御前こ而ハ恐候て、心能被下候儀不罷成候、緩々と勝手こ而吞せ可申と申上候へハ、其通可然と被仰候、六左衛門承之、御前へ罷出、御酒拜領之儀ハ、御前こ而被下候様こ申上候、其時樽こ殘居候水を御ウ、り被成、御上下被爲召、六左衛門を床脇こ御すへ、御平伏被成候而、只今某誤り申候、御免被遊候様こ被仰、六左衛門申候儀、日峯様之御意こ而有へし、扱々難有御事と被仰候由、山内之者ともへ、御父子様ハ折節こ、御上下御小袖杯被下候、少シ充裁され、守こ仕置候、其後辨財岳公事之時、山内之者共之子孫、ゑりこ少シ切レぬひ付居申候由、普周、深堀新左衛門へ咄被申候、一齋藤用之助、親ハ佐渡とて下賤之者、一年公御鷹野之砌、御目よ被付、被召出し者の子也、高麗以來數度覺ある者なまとも、小身よて極々貧ク、一夜の歳を越るき様あり、月迫こなり、女房なをたたるハ、晩の用意の食物も無之、如何すへきと申こ、用之助打聞、心安クおもへ、米拔やうて坪中ハ積るきそとて、大道こ出て見たるに、馬こ米拔付て數疋通る、用之助馬の鼻先よ立ふさうり、此米ハここよ運ふると問フ、是御本丸乃御臺所ハ納メ

元和四年六月三日

四四五

申すと答フ、用之助、此米悉ク我所へ持來ルへし、御本丸の納メても、我取米也、則庄屋は請取手形可遣と申ス、百姓共合點せし、馬をたゞいて通らむとするを、用之助見て、扱々よくひ奴共う、お、ケ様といふ、齋藤用之助と申もの也、持來らせ、一々切殺さむと、大脇差を抜て見せさせ、百姓とも驚き、左様候へ、お、おへ運ひ申へしと、數俵之米坪中運ひ置、主々へ逃歸りぬ、其節用之助、女房に向ひ、お、おを見よ、澤山の歳取お、緩々といとなむへしと申ス、此事無程致露顯、勝茂公被聞召、用之助狼藉前代未聞なま、宿老中の御詮議、切腹に相極、乍去彼者へ公御祕藏の者也、其上死罪之儀、時々御尋申上ル事ありとて、右之謂三之丸の御使を被遣被仰上り、公被聞召、御上様へ御向ひ被成、齋藤用之助へ、ケ様くの子細よて、生害に被申付由、本丸を申來ル、我等如此國家を治メし、悉皆彼者共う働故也、然るよ今飢及ひ、ケ様の事を仕出し、お、お、努力々彼者の科よあらは、偏に我等無沙汰故也と被仰、頻りよ御落涙有し、お、御上様も御尤の御事とて、御泪を流させ、本丸をりの御使其段承、殊外驚き、御返事を承よ不及、急キ罷歸り、右之次第申上し、お、勝茂公

被聞召、扱々左程に被思召ものを、切腹させ、お、不孝之至と被仰、則被相助之由、早速右之御使よて被仰上り、御夫婦様御太慶大形お、お、公御本丸の方へ御むらひ、信濃守家長久の心入目出度事也と被仰、御手被合、御拜を被成候也、又公、勝茂公に被仰候へ、頃日世間無事よ有之、鐵炮的など御覽候て可然候、其段物頭共にも被仰付之由御申候、依之勝茂公八王寺射場におゐて、鐵炮的御覽被成なるに、齋藤用之助前こ成り、鐵炮持出、空よ向打放シ候故、矢廻之者玉なしと問ふ、其時、用之助立なうら、い、お、お、玉は有へら、此用之助へ、終よ此歳まで土被射する事なし、乍去妙を生付よて、若くは、より敵の胸中を射る事へ不廻、其證人へ飛驒殿也と申、勝茂公以外の外に御立腹被成、御的や、其儘直に三之丸へ御出、公に被仰候へ、齋藤用之助義、ケ様、の法外を相働、某を蔑よいとし候、不届至極の者こ候間、一筋可申付之由被仰上、公被聞召、御立腹被成、用之助寄親富岡喜左衛門儀、扱々無調法者也、喜左衛門を一筋可被仰付由御申有ル、勝茂公會而寄親喜左衛門儀へ不申上候、用之助無作法を社御耳よ入レ候と被仰候、公の仰よ、い、お、お、左様よて無之、今度其方へ鐵炮的を見

元和四年六月三日

四五〇

ハ子タヲハナシ、火ニタキアテ候、其座頭後ニ檢校ニナリ候時、加賀致上
京候テ、座頭方ヘタツ子候ヘハ、檢校昔ノ燒火ノ事申出シ、其懇意別ニ報
スヘキヤウナシ、我等祕藏ノ名琵琶アリ、コレヲスコシケツリテ火ニタ
キ、其香ニアタレハ、疾病ヲノソキ、所願成就スト云傳タリ、此琵琶ヲウチ
クタクテ、火ニアテマイラスヘシト云々、加賀ソレハ一興ナル事ト、サマ
ノ辭退スレトモ、檢校許容セスシテ、終ニ琵琶ヲ燒火ニイタシ、加賀ヘ
馳走仕候由、其年ヨリ加賀威勢繁昌シテ、龍造寺ノ主トナリ候、

〔校合雜記〕

六三十一

鍋嶋加賀守肥前ノ江戸ヘ參勤之せり、大坂川口著岸

の日、曉天ハ快晴、纜をとき、順風ニ帆を掛、船中おとをり也、加賀守酒宴
を催し、伽之者其外近習の侍、何も長途の船行恙ウなく著岸の賀を唱ふ、
折ふし未申ノ頃、及ひ、供しとる船頭船人其名舟子共ニ下知し、捲
ろく帆を下させ、事さへうしき體也、加賀守も、西國海上之義を數度の
旅行ニ馴玉ふ故、斯の如くの快晴、一點の雲なく順風まづり成、何事を
おとさしくするぞと問玉ふ、船頭申々る也、おし付風替り、以之外の
候、はん間、御船ハ高砂高砂加賀郡ヘ入申候と御請いとす、加賀也、沙汰の限り也、

參勤ノ途
上播磨ノ
ニニテ颯
遣フ風

くるしうらぬぞ、其まゝ參まと言玉へハ、返答も及せず、いよゝ高砂
へ船をむきさする程、加笏立腹の如く、情のこまき奴を、再三の下知
をもとめ、不届かり、風ウハらずハ、おのれ切腹さすり、夫こても用ひぬら
と怒り玉ふ、時、船頭もちのとも臆せず、川口之義もささおき、經之嶋迄
も著申事叶ひらさし、風ウハらず候へハ、目出度御事也、そまかしハ切腹
仕べく候と申切、舟を下知し、艦を立、鯨舟なやを引つけ、汐のしく
候へハ、只今の内、高砂へおし入、まや喚き叫ん、漕ををる、十五六
丁もいそひ、漕をる處、幕座、向ふ風ニ暴風吹落し、れ、風雲俄に
湧起り、高浪おびとさしく動揺し、船をくわがへさんと船中轉動し、
危き事言語同斷の次第也、されとも汐はた向ひさる内、難なく、海程六七
里計りの所を、時計二寸計の内、高砂の灣道へおし入、さる故別條を
し、右の船頭十四歳ニ成る一子を召連るる、是、教をるハ、親の役義
を相勤べきと存し候へ、今日の義をよく、覺悟いとすべし、御意重
きと、忽ち惡風の落すべきを知ら、御船を其ま、馳候へ、第一殿
の御命も危く、大勢犬死をいとす、不忠至極也、御機嫌こそむき切腹仕

元和四年六月三日

四五一

るよ於て、我壹人の不幸よ、上の御難をすくひ、大勢の命を助る處也、此所をよく、覺悟仕（カ）せ、船頭の役義を勤る事なり、ときぞと教訓しなると也、加笏甚と悦喜、厚く褒稱し玉ふ、予一族加笏の家士、而、まの、は、是を聞たる事也、

都而役義を勤るを、皆此ころへなく、し、本意を失ふ事、古今珍らしからず、但し是非利害を覺し、恭敬遜謙、演説せば、さの主人の怒りをもおろほましき事也、多く主人の爲、おのれ功を立てる、先立時、背くと、よ、ろへ、

一右加賀守、在所におひ、夜殺生を嗜き玉ふ、城下を放（カ）たる山寺あり、其墳墓、寺の後、つ、き、山上ま、九折ある所也、此墳所へ猪、山犬、狼の類多く出るを聞、暗の夜、屢、殺生を行、猪、狼を銃炮よく打てな、く、さ、と、し、玉ふ、此山、普通、勝れ、大猪あり、深更、及、ひ、され、右之山へも出さるよしを聞玉ひ、今、宵、夜更、件の山に到り、人多、よ、足音（カ）を多く、猪も恐、出ましき程、供い、し、る、の、壹人も右之山へも供いとすべからずと、加賀守只壹人銃炮、二つ玉を込、ま、づ

夜殺生ヲ好ム

ろ、墓所の間を上り行玉ふ所、寺より二町餘も行過、腰をう、め、星の光り、向見玉ふ、牛の如く成猪と覺、山畑を堀返す體也、加笏得とりと折しき、胸の火をとり出され、火繩消へ、是非、立戻り、半町をり下り玉ふ處、大の男の徐、と俯仰し、墓の間を上り來り候様子也、加笏兼、山賊の、る、よし、聞、る、程、た、し、左様之者とおをひ、是もま、づ、隨ふんと沈、忍、ひ、より、程、近、く、也、る、時、に、銃炮を下、置、く、只、一、討、と、お、を、れ、何、の、ぞ、と、聲、を、懸、ら、る、時、に、件（カ）の男、私、よ、候、と、答、ふ、刀番、モ、夜、供、し、る、東、嶋、市、之、允、也、何、と、來、り、し、と、問、え、れ、れ、堅、く、御、供、仕、る、ま、し、の、仰、よ、候、へ、と、も、夜、中、の、や、う、の、場、へ、御、壹、人、の、御、働、き、勿、體、あ、き、義、と、奉、存、非、常、の、事、も、候、と、御、意、を、背、き、斯、の、如、く、御、を、と、ま、ひ、候、と、申、幸、と、悦、ひ、火、打、を、出、さ、せ、火、繩、を、付、ケ、市、之、允、右、之、所、止、り、ま、上、上、へ、上、ら、ま、候、い、ま、件、の、猪、之、居、と、り、し、を、近、と、寄、を、切、放、り、幸、ひ、胸、を、打、ぬ、き、り、其、せ、互、危、き、事、よ、有、る、故、渠、申、所、尤、お、も、ひ、其、後、夜、猪、の、殺、生、止、り、紀、伊、守、年、も、若、々、れ、ら、左、様、の、足、夫、の、勇、氣、成、事、す、べ、ら、ず、と、教、訓

元和四年六月三日

四五四

有々り、若き時よき、加笏形のとく、大名よ有まじき慰をもし玉ひなると語らまなるを、是も右之通り、予う一族、陪從して承はりしと茗話しなるを記す、

○直茂夫人ノコト、便宜左ニ合致ス、

〔葉隱聞書〕

三

一直茂公ノ御前妻ハ、高木肥前守娘ニ而候、高木之末、諫早

ノ三村惣左衛門之由也、御離別以後、筑後之鐘ヶ江甚兵衛嫁娶候也、高木

之正法寺ニ御收り候、主水殿日妙之御内方天林様ハ、右御前妻之御腹ニ

御出生也、日妙事ハ、陽泰院様之御甥ニて候、日妙之御袋ハ、石井安藝守殿

御戦死以後、深堀茂宅ニ嫁娶被仰付候由、殿助也、右衛門

〔鍋島系圖〕

直茂實隆信養弟孫四郎左衛門大夫飛騨守信生信安信昌信眞始彦法師丸

妻高木肥前守胤家女、後離別、

後妻石井兵部少輔忠常女、

一寛永六年己巳正月八日卒、

一法名陽泰院芳林妙春、

〔葉隱聞書〕

三

一陽泰院様ハ、御前夫納富治部太輔殿御討死以後、石井兵

直茂ノ前
夫人高木

直茂ノ後
夫人石井

部太輔殿飯盛之屋敷ニ被成御座候、或時、隆信公御出陣御供之衆、兵部太輔殿御方被立寄、辨當はらひ被申候、兵部太輔殿内衆ハ、鱒を焼キ進候様こと御申付候、内衆焼申候へ共、大勢にて中々間に合不申候、陽泰院様ハ、まんの陰ハ被成御覽候、つと御出、大かぬ之下之火をかき出し、鱒籠を打うはし、大團（鱒籠カ）ニ而あふき立、箕こかそり込、炭を簸出し、其儘被差出候、直茂公被成御覽、この様ハ、働たる女房を持度と被思召込、其後御通ひ被成候、或時、盗人と申候而追懸候故、堀を御飛被成候へハ、刀打懸候付、御足ノ裏ニ少疵付申候、此外多久夜懸之時分、薄手一ヶ所御負被成候由、

又一説に、天正四年二月、横澤城攻之時、被負御手候計り也と、

一陽泰院様、勝茂公ニ被仰候ハ、石井一門之者ニ、以後迄雜務役を被申付間敷候、此儀深く頼申候、此前ハ雜務役以多し候者ハ、多分盗をして死罪ニ逢候、手ニ觸候故はしく成て、盗をせると相見候、役を不仕候半者、不しき念を起らば、可致盗様無之候、我等身之切レ之者共にて候得者、不便にて斷申候と被仰候由、

元和四年六月三日

四五五

うはなり

勝茂父母
野山ヲ建
テ山ニシ
銘ヲ金ト
院崇傳ニ
託ス

元和四年六月三日

四五六

一直茂公最前之御前様、御離別以後、うはなり打こ折々御出候へ共、陽泰院様御取持御叮嚀候故、納得こ而御歸候事度々こ而候由、

〔附録〕

〔本光國師日記〕

一 四十

同日、從鍋島信濃殿、勝屋勘右衛門使こ來、爲二親、

高野山こ石塔立候銘之儀申來、則銘書遣ス、案在左、

孝子鍋嶋信濃守從四位拾遺藤原勝茂

元和四年戊午

高傳寺殿前賀州太守從五位日峯智公大居士 靈位

六月三日

寛永六年己巳八月修善日 立之、

孝子鍋嶋信濃守從四位拾遺藤原勝茂

寛永六年己巳

陽泰院殿芳林春公大禪定尼 靈位

正月八日

寛永六年己巳八月修善日 立之、

七日、甲子祇園會、

〔土御門泰重卿記〕

二

六月七日、甲子、晴、祇園會物忌、禁中三十、女院、國母二十調進申候、様子如恆例、

〔時慶卿記〕

四 十

六月七日、天晴、炎暑甚、一祇園會爲見物、脇坂中務ノ内儀四條ノ宿へ被呼テ、内儀、新中納言局終日ナリ、晚ニ被飯、

十四日、雨天、一後ニ聞、祇園會御見物ニ、曇花院殿へ女御殿被申入ト、

〔義演准后日記〕

二 十

六月七日、晴、祇園會、神事、鉢六本之内、菊末之鉢、二間計末

〔梵舜日記〕

一 十

六月七日、晴、祇園會、神事、鉢六本之内、菊末之鉢、二間計末折也、凶事之義与沙汰也、次子吉井久内所へ罷、瑛藏主、喜介、久次、喜庵、淨宗來也、終日振舞也、午刻ウントン也、及暮令歸院也、

也、終日振舞也、午刻ウントン也、及暮令歸院也、

甲子待、

〔土御門泰重卿記〕

二

六月七日、甲子、晴、御甲子待之衆、正親町三條、四辻、阿野、中院、中御門宰相、高倉、廣橋頭辨子、飛鳥井九人也、晝御鞠被遊候、

○甲子待ノ本年中ニカ、ルモノ、便宜左ニ合致ス、

元和四年六月七日

四五七

土御門泰重物忌ノ符ヲ獻ズ

脇坂安元夫人ノ見物

御生母近衛氏ノ御見物

神事、鉢折ル

蹴鞠ヲ催サル

〔土御門泰重卿記〕

二

正月三日、甲子、晴、禁中御甲子待無之由承及畢、

八月八日、甲子、雨天、從御所召候、甲子御とき也、

八日、御蟲拂アリ、又西園寺公益等ヲシテ、書籍ノ目錄ヲ作ラシメ給フ、

〔土御門泰重卿記〕

二

六月八日、乙丑、晴、爲御書籍校合召候衆、先奉行西園

寺中納^(合)、菊亭中納^(合)、中院宰^(合)、冷泉少將、五條、東坊城、西坊城、予、舟橋九人也、

手傳代衆ニハ、日野大納言、同宰相、西洞院父子、烏丸辨、飛鳥井、以上十五人也、

長櫃九ツ、御書籍之部類、又ハ類本事類相分、目錄匡合仕立候、今日半分仕候、

殘明日可仕候、

九日、丙子、晴、御書籍目錄及薄暮仕立候、中院、予召御學文所、目錄之様子申上

候、各退出也、入夜雨降也、御番予不罷歸候、

十一日、戊辰、晴、今日御虫拂、御書籍奉^(行)九人、日野父^(子)、廣橋父子、西洞院父子、阿野

父子、こか殿、久世、竹屋、飛鳥井、烏丸、正親町、堀川、樋口、唐橋、倉橋、極蔭、清藏人、正

親町三條、高倉、中御門刑部少、書籍、紫宸殿、櫃九ツ充滿、虎間御殿、大小箱三十

三充滿、相殘御本清涼殿也、是モ充滿也、奉行も其所之三人不^(レ)遣候、非

書籍ヲ分

類ス
目錄ヲ作

清涼殿紫
宸殿ニテ
書籍ヲ閱
シ給フ

藏人、藏人ニ陪膳仕間敷由御訴訟、藏人方之衆存分有之事候、私宅用意仕、御

所御振舞不食候と相見申候、大風終夜、破曉時分雨降、

十二日、己巳、大風雨、飯後朝參仕候、主上清涼殿、紫宸殿出御、一編^(合)書籍御覽以

後入御也、予、中院御前在之也、未刻許、奥御倉より長櫃五十八取出申候、重

物入候と相見、持^(レ)多申候、是ハ二階より下也、其下より長櫃十許、其外御道

具三十筥不^(レ)取出也、皆骨折候也、殊無人、内々衆まで也、外様衆こハ、予一人

まで也、御振舞二度也、

十三日、庚午、雨天、御書籍共令點檢、皆目錄合取置、御倉へ納也、其内類本多候

也、又不足本共取出、上へ上申候、夜四ツ時分退出申候、事外苦勞也、

十五日、壬申、雨天、先日之御長櫃、御倉へ上申候、主上出御アリテ、骨折之由、各

御言葉カ、リ申候、予、外様トイヘトモ、致祇候、

〔時慶卿記〕

四十

六月八日、天晴、一俄ニ禁中有御觸、御虫拂、雙紙ノ目錄

、中院、西園寺中、土御門中務、菊中等ナリ、其外助ノ衆、但五條、兩坊城等ナ

リ、終日御振舞在之、虎ノ間ニテ也、

九日、天晴、如昨日禁中參仕、又合目錄、

元和四年六月八日

四六〇

十一日、天晴、禁中御虫拂、各相詰、紫宸殿ノ奉行ニ又被相副衆、久我、西園中、倉橋、日宰相、藤谷中務、泰重、已上十人、一出御、予ヲ召テ、傳燈錄可上旨仰ナリ、群書ノ内、早速擇出テ備叡覽、

十二日、天陰、大風、東ナリ、細雨、禁中御虫拂、各參上候、
十三日、雨天、風不靜、夕ニ雨甚降、一虫拂無異儀相濟候、内々衆遅々故、南殿奉行衆相待候、及夜予ハ各ヨリ早退出可申由候條、其分ニ同候、各苦勞ノ義ナリ、

〔孝亮宿禰日次記〕

五

六月十一日、戊辰、晴、入夜風吹、忠利參、禁中御虫拂、

十二日、己巳、大風、雨降、忠利參、禁中御虫拂、

十三日、庚午、雨下、忠利參、禁中御虫拂、

〔附錄〕

〔時慶卿記〕

四十四

六月十三日、雨天、風不靜、夕ニ雨甚降、遊仙窟ト貞觀政

要ヲ申出、一長橋申入、勅許ナリ、

廿八日、天晴、涼風少アリ、陽明以使者御禮申入、一遊仙窟ノ料紙ノヲ申候間、經師へ被遣候、又筆者へ遣候、

西洞院時
慶禁中ヨ
リ遊仙窟
ト貞觀政
要トス
用ス

〔時慶卿記〕

四十五

七月四日、天晴、炎暑、一貞觀政要御卷物來、又五卷ヲ遣

候、

十八日、天晴、一榮宅來義、貞觀政要一冊出來持參候、又一冊遣候、

廿二日、朝曇而頓而晴、一榮宅來義候、貞觀政要一卷出來、

廿六日、天晴、一榮宅、昨日貞觀政要出來、十卷目ヲ持參候、今朝又三卷メ

ヲ一冊遣候、

廿九日、天晴、暑太、貞觀政要一冊出來、榮宅ヨリ到來、又一冊遣候、

八月五日、天晴、涼氣也、一昨今貞觀政要急ニ瀬田ノ備前へ申遣候、一兩

日中ニ可出來ト、

八日、雨天、曉ヨリ降、一備前ヨリ貞觀政要二卷、寫本トモニ受取候、

九月三日、天晴、一貞觀政要二冊ノ代備前へ遣、

十四日、天晴、一貞觀政要朱モ出來、平松ヨリ到來、

十九日、天陰、氣色計曇ノ過、一禁裏へ遊仙窟一冊、貞觀政要一冊返上、勾

當内侍へ文相添候、有勸報、

廿日、晴、天陰、日出、巳刻ニ晴、一禁裏御本遊仙窟、貞觀政要十冊返上候、長橋

元和四年六月八日

四六一

ノ文勘報也、

十一日辰戌秀忠、猿樂ヲ城中ニ張り、二條昭實、鷹司信房ヲ饗ス、

〔本光國師日記〕二十 一同六月十一日、御城御能、二條殿、鷹司殿御振舞、○崇傳時

江戸ニ

十六日酉癸、月食、

〔時慶卿記〕四十 六月十六日、天晴、一月蝕、丑寅ノ刻ト、

〔孝亮宿禰日次記〕五 六月十六日、癸酉、月蝕五分、子丑刻云々、忠利參内、掃

部寮召具之、

嘉定ノ儀例ノ如シ、

〔土御門泰重卿記〕二 六月十五日、壬申、雨天、御嘉定之御觸有之也、内々不

殘候、予、外様之故、御觸折番ニハ無之、但口上ニテ御觸也、祿物一升六合、予、倉

橋、和泉三人之取所カニ遣候、予別忝事也、

十六日、癸酉、晴、飯後ウウ持參仕候、味無附とんちう此酒持參申候、祇候之衆廣

橋大納言父子三人、正親町三條中納言、四辻宰相、中御門宰相、阿野父子、万里

少路大納言入道、高倉、予、綾小路、五辻左馬頭、極蔭、差次藏人、清藏人、勸修寺、以

主上出御

上十七人也、中院故障之由承及候、菊亭所勞也、甘露寺、舟橋、小川坊城、鷺尾、北
畠等不參也、常御所之次御縁持參、主上出御、御見廻也、下蔭より罷起、又御前
よて御酒御とをり在之也、相濟、國母様致祇候、御大酒被下候、朝從一條殿ウ
ウ被下候、

秀忠、書ヲ伊達政宗ニ贈リ、其五子宗綱ノ喪ヲ弔フ、

〔伊達家文書〕二

折封ウハ巻

宰相殿

宗綱攝津守逝去之由、不及是非候、心中之程察入候、謹言、

六月十六日

秀忠(花押)

仙臺

政宗宰相殿

〔寛政重修諸家譜〕七百六 伊達政宗陸奥 四年六月十六日、台徳院殿よ

り御書を下され、五男攝津宗綱ノ喪弔らへせあまふ、上略

〔譜牒餘録〕十七 松平陸奥守之七 高祖父輝宗曾祖父政宗祖父忠宗記録拔書

元和四年六月十六日

同年五月廿八日、伊達攝津相果候付、從台徳院様、政宗國元、以御飛脚、御書被成下候、廿二日到著、御飛脚、時服一重、銀子十枚遣之候、御飛脚之名相知不申候、右御書之寫、○下略、伊達家文書=同ジ

〔伊達山治家記録〕

二十 六月廿二日、己卯、公方ヨリ御飛脚ヲ以テ、去ル十

六日御書ヲ賜リ、攝津殿死去ノ御悼仰下サル、御飛脚ノ案内トシテ、嗣君ヨリ御走衆二人差添へ相下サル、公ヨリ御飛脚ニ銀子十枚、御帷、御單物二下シ賜フ、御書左ニ載ス、○中略、伊達家文書=同ジ 右御書、土井大炊助殿ヨリ書狀相副へ到來ス、

〔参考〕

〔茂庭文書〕

○陸前

尙々、其身機遣候て、薬をもかへときのよし申候へ、よぎあく候へとも、先々快庵薬可然候、うしく、又申候、こせうしやうろとへ、ろ、おのろとより文こし候へ共、中とよて候間、返事不申候、文のうち、身をよく見申候由可申候、以上、

政宗茂庭
元茂茂庭
綱元茂庭
網元茂庭
コトヲ注
意ス

宗綱病ム

宗綱歿ス
行年十六
松普寺ニ
葬ル

茂庭綱元
宗綱ヲ養
育ス
高橋三吉
殉死ス

攝津守機相と付而、昨日七日之書狀、今日八比平泉見物と參候而、此邊よて披見候、少腫氣さし候て、于今のき候へぬ由、依之琢庵薬のませ候へんよし、尤よて候、乍去はぬこのとつけ候へぬ薬よて候間、ちやくもさのと不存候て、いろうと存候、とととうざき候へす共、快庵薬先々可然候也、とくあんと談合候へ、おあし事よて候、恐々謹言、

五月八日

正宗(花押)

茂石見殿

〔伊達鑑〕

八 せんといまをひてせつあうむをつあひやう死の事

一元和四年戊午五月廿八日、たむむ一ふく乃志やてい、せつ津の守むをつか、ゆくせし十六さいよ病死、せうおんしよてそうむりあり、をひかゝまする人の身まのほをさへおしむ、はるのあらひをらし、いせんやこそきととせよもちを満て、五月雨のつゆと共みきたまふ、上中下のをたしと奉る事あらは、もにい見つあもとあつあり奉りてたし、申、三乃せぬのしやう主也、たうとし三吉と申をの、おいそらきり、二世の御を仕候、此とき、せんとい諸山の志ゆり、あしゆ、

元和四年六月十六日

四六五

元和四年六月十六日

四六六

ついでんの詩あり、不つきやうきんよ、六字をかしらよきへく歌有、其うち二しゆ書之、

哀世乃おほろきあらぬ身ひとりのちひきえかはりても
藤さらやまきる根さしはぬりきれはかへりきるもきるやさるるん
かくついでんしよ、御あとをりつ賀したまふ、略下

〔寛政重修諸家譜〕

七百六 伊達

政宗 陸奥守、○
四子略ス、

宗綱 卯松丸、
攝津、

母ハ長女よおれし、○田村清元和二年十二月二十四日、はしめて台徳院
殿よまみゑたてまつは、時ニ十四年五月二十八日死す、年十六、

〔伊達族譜〕

本宗 内族譜第一

第十七世
政宗公

宗綱

〔元和〕四年戊午五月二十八日、歿于仙台、年十六、法名華屋淨蓮、葬于松音寺、殉死者一人、

〔仙臺武鑑〕

十一 忠宗君敍爵、附、伊達攝津守宗綱卒去、

〔元和二年〕十月二日、忠宗君正五位下侍従ニ敍セラル、同三年十二月、池田三左衛門尉
輝政女婚ス、〔ト婚ス〕○中ニ、政宗君情ニ堪サセタマハス、其故ハ、君第五男攝津
守宗綱、元和四年五月、カリソメノヤウニ枕ニ臥シ、レイナラスヲハシマシ
ケルガ、同キ二十八日、行年十六歳、ツイニ黄泉ノタビニヲモムキ玉フ、政宗
君弄璋ノ寵幾年モ經ス、スキサリ玉フコトソナケキ、愁涙アサカラス、其芳
ヲアツカリシ近習、外様、ミナ側然トシテ哀泣ス、實ニ限リアル命、カキリナ
キハ哀哭ナリ、高橋三吉、其ワカレヲシタヒ、殉死之、台徳公奉書ヲタマヒ、弔
ヒ玉フ、其文ニ曰ク、○下略、伊達家
文書ニ同ジ、

〔伊達政宗記録事蹟考記〕

四十二

眞山記十

一五月廿八日、攝津守殿御逝去、十六歳、於松音寺御葬禮、公御追悼之御歌二
首、

いとけなき人ハ見えてぬ夢かよ現ハ残る老の身そうき
散とても御法をうく花の舟うらひていゝる汀あるらし

元和四年六月十六日

四六七

元和四年六月十六日

四六八

和韻

前攝州守宗綱公者、天姿美邁、而藤家華胄、出群之少年也、謝階蘭玉云乎哉、一朝示微疾、就床者居諸在于茲、醫之巫之、雖無虛日、遲術不有驗、則天乎命乎、爲之奈何也、丁今越五月廿八、冀奄爾易簀矣、元來視生死、如是晝夜、雖是非可驚、在此人驚亦有以哉、寔遠聞近見者、識與不識、靡弗嘆惜、况幕下諸士、飲氣吞考之也、嗚呼市堂之哀慕、莫甚此也、痛傷之餘、有追悼之倭歌二首、誦之則字々滴淚、句々含哀、離別之情、溢言外也、舉世被和焉、予亦撰歌末字爲玉韻、綴蕪辭二絕、以伸胸懷之方、云、
華表靈真琴和
傳聞倭歌幾百憂、耐慙攀韻賦深憂、群禽亦似惜斯別、夏木黃鸝先語憂、年向破瓜夢易驚、何圖今日聽斯行、炎天梅蓋再來相、綠髮紅顏染得成、

靈真ノ挽詩

一風軒ノ挽詩

攝州宗綱公、天生敏達壯兒也、維時臥病床、日積月積、施換骨方、以頤神術、雖治之、遂無其驗、俄然逝矣、王父憾慨異于尋常也、此故賦和歌二章、被追慕之、予亦老淚然、濕却破袈裟、慟哭云他也、猥裁拙詩、以助人天哀傷云、
覺路促裝離焰浮、愧吾保老暫遲留、少年并見薜顏脆、十倍猶加杞國憂、

寫出和歌離別情、臉邊楚雨未吹晴、一朝夢覺還鄉曲、只合終身稱老成、

一風軒

吾邦君有愛子、今茲元和四歲夏之仲、罹于微疾逝矣、國家諸士哭而慟、憂心如山之高、別淚似海之深、誰不敢惜厥別也、邦君哀情之餘、詠倭歌二首、追悼之、予亦攀其韻末、賦野詩二章、助厥哀云爾、伏乞靈鑑、
杲必合稱天下英、空鞭鞍馬則西征、惜乎告別早歸去、蓋代功名不得成、生前沒後一浮漚、雙袖龍鐘淚欲流、會者定離只如此、傾青州盡可忘憂、

月叟ノ挽詩

前住妙心現住瑞岩月叟、楚釋玄良書之

今茲元和四歲夏五念八、冀前攝州守宗綱公、世緣既盡、被逝于他方矣、視聽之者、無貴無賤、無不奉嘆惜者也、於越慈父哀慟之餘、詠大和詞二首、被追悼焉、舉衆和之、予亦不獲默止、謹依歌末憂成之兩字、製蜂腰體二章、目述卑懷云、
清岳埜衲宗拙和南

宗拙ノ挽詩

合詩滿山紅葉秋、羅籠不住出閣浮、蕭々從夜來雨、杜宇一聲暗結憂、

元和四年六月十六日

四六九

元和四年六月十六日

四七〇

十有六霜一夢榮，覺猶拋擲古今情。風流年少權花露，可惜秀而實不成。

謹奉依奧州大守公被追憶于孝子宗綱公倭歌之芳韵云、二首、名〇作者ノ
人間如夢又如瀉，十有六季日月流。昨夜催歸何處去，杜鵑聲裡幾生憂。
訃音落耳幾然情，離思茫茫心不平。可惜花顏易晞露，枕頭催淚夢難成。

猥綴卑詞二首，謹奉加華屋淨蓮大居士追悼之詩歌云、

宗策拜和

君子託花蓮露清，惜哉辭世有芳名。雨遮離袖數行淚，萬斛牢然集大成。
可惜少年雖拔尤，長殤齊壽思無由。羽蟲部裏憾離否，蟬不報秋先報憂。

宗綱公肖像贊

年少名高日本東，天生麗質絕比同。何圖今人畫工手，遺像儼然花白紅。
前攝州守宗綱公華屋淨蓮大居士，天才艷逸異常兒也。彌勒俱舍論等，所謂天衆膝上化童之比也。寔繼祖父之箕裘，而能武能文，必抽海內功賞，合稱天下英雄。僅十有六歲，泫然示色空，嗚呼命哉！於是高呼叟，寫居士妙相，見需

宗策ノ挽詩

肖像贊

茂庭綱元
高野山ニ
到リテ宗
綱ノ冥福
ヲ祈ル

茂庭延元
出家入道
ス

贊詞，卒製四七伽陀，以塞其責攻者也。

〔伊達世臣家譜〕

一八族之二

茂庭

上綱元

中綱元

九年三月，屬于華屋公子。

貞山公第五子，小字卯松丸。後稱攝津，諱宗綱。此時賜田五千石于栗原。奉仕公。郡三迫，元和四年五月廿八日卒，年十六。一云，年十八。法名華屋淨蓮。如故宅，賜小袖各一月，公于綱元。服日，公臨之。四年五月，華屋公子卒，綱元請到紀州高野山，修公子冥福。公以其年老，陟遠路，難許之。綱元強而請之，於是公親詠和歌二首，以送其行。綱元到高野山，造營學侶坊，名成就院。後寬永十年，請附成就院，後加經界之。六年五月，終公子大祥忌而後歸。略。下。餘田爲百二十石云。

〔伊達家一門書上〕 先祖之覺

延元中綱元ニ作ル

一元和四年，攝津守樣御遠行，則法體高雲ニ罷成。高野へ登山，三年相詰罷下。高雲ヲ改了庵ト，其分引續仙臺ニ被指置，御用事御相談ニ被召加候。略。中。延寶三年十二月廿五日

茂庭周防良利

遠藤文七郎殿

十七日，中京都所司代板倉勝重，煙草密賣者ヲ捕フ、

〔梵舜日記〕

二十

六月十七日，晴，略。

次タハコ賣者共，伊州ヨリ俄改，數十

元和四年六月十七日

四七一

元和四年六月十九日

人取搦雜色申付奉行也、

○幕府、煙草ノ賣買栽培ヲ禁止スルコト、慶長十四年七月是月、同十七年八月六日、元和元年六月廿八日、同二年十月是月ノ條ニ見ユ、

十九日、丙子二條昭實、鷹司信房、江戸ヲ發シテ、下野東照社ニ參詣シ、尋テ、京都ニ歸ル、

〔本光國師日記〕四十

一同十九日、二條殿、鷹司殿御上、○崇傳コノ時、江戸ニ在リ、

一同廿日、二條様日光へ御越候路次、御書來、蠟燭百挺來、則返書遣ス、直ニ駿府へ可被成還御由ニテ、山本隼人先へ上、駿府金地院ニ可被成御宿由

ニ付而、めい藏主方へ狀遣ス、竹田慶安、安藤帶刀殿へ狀遣ス、二條様へ之返書、藤泉州方我等へ之狀、爲御披見遣ス、右之狀共、山本隼人ニ渡ス、

一同日、鷹司殿、御書、道方來、御返事則使者ニ渡ス、

〔時慶卿記〕四十

七月十二日、天晴、一二條殿御歸京、先以使者珍重申入、又自モ院へ參上、申置候、鷹大閣へ同前、

〔孝亮宿禰日次記〕五

七月十二日、戊戌、晴、今晝二條殿并鷹司殿自江戸有御上洛、參御見舞、

昭實駿府
金地院ニ
宿ス

和子入内
延引ノ風

和子入内
沙汰ニ
就キ諸司
ノノ供奉
請願ス

〔義演准后日記〕二十

七月十三日、二條殿、鷹大閣各御上洛、○本書十三日ハ、傳聞ノ日ナラン、

十六日、出京、二條殿罷向、於江戸御仕合御物語、

二十一日、戊寅、京都所司代板倉勝重、傳奏廣橋兼勝ヲ訪ヒ、秀忠ノ女和子入内ノコトヲ議ス、

〔時慶卿記〕四十

六月廿一日、雨天、雷鳴、一板伊賀守ハ廣大へ出、女御入内ノ御用意ノ義トモ申談候ト、

○幕府、和子入内ノ爲メニ、女御御殿ヲ造營スルコト、九月是月ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔時慶卿記〕四十

九月九日、天晴、一女御入内事、來年無之由風説、初而聞候、

〔孝亮宿禰日次記〕五

十月二日、丁巳、自關東就女御入内御沙汰、諸司輩供奉之事願申、關白殿、傳奏等申之云々、

〔言緒卿記〕十一

十一月十日、乙未、天晴、

元和四年六月二十一日

山科言緒
和子ヨリ
禁中へ
上ノ御
東上ヲ
スヲ調
進装

元和四年六月二十二日

四七四

一 女御様禁中様へ御進物ノ御装束可調進之由、從廣橋大納言書狀、速水長門守持來、樽一ツ長門持來了、

十四日、己亥、陰、
一 江戸女御サマヨリ御進上ノ目錄、後藤源左衛門方へ遣、今日江戸へ遣由申來了、

廿三日、戊申、天晴、

一 從後藤源左衛門、自江戸女御様禁中へ御進物御物具方、夏冬之分、可致調進之由申來之、

廿六日、辛亥、

一 從江戸女御様禁中へ御進上ノ御物具方、冬夏織手三人、同精強、屋藤右衛門ニ申付了、十二月十五日ニ出來之約束也、

〔リチャルド・コックス日記〕 (歐文材料第五號譯文)

一六一八年十一月二十六日、四年新曆十二月十六日ニ當ル、中略 和本日我等は、内裏と結婚すべき皇帝の息女を迎へんため、江戸に向へる内裏の婦人に邂逅せり、○こっくすは、三河岡崎ニ在リ、

和子ヲ
ヘンガ
メニガ
メニガ
向ス
江ノ宮
スニ女
下爲迎

近藤百千
代秀忠
謁ス

二十二日、卯信濃高井郡、美濃安八郡等ノ邑主近藤政成卒ス、尋デ、幕府、其子百千代直重幼ナルヲ以テ、遺領一萬石ノ内信濃川中島五千石ヲ與ヘテ、寄合ニ列シ、五千石ヲ伯父下野眞岡邑主堀親良ニ加増シ、百千代ノ後見ト爲ス、

〔東武實錄〕 四 同二十二日、近藤信濃守正成近藤織部正重勝カ養子、實ス、三十一歳、○七男ト爲スハ誤ナラシ、ハ堀左衛門督秀政カ七男、卒

十二月十三日 是日、近藤織部重直、信濃守正公ニ謁ス、父正成カ領地一萬石ノ内、信州河中島五千石ヲ重直ニ賜リ、其餘ノ五千石ハ、堀美作守親良ニ賜ル、後ニ重直カ領地河中島五千石ヲ轉シテ、同州伊奈郡ノ内ヲ賜ル、領地員數元ノ如シ、

〔寛政重修諸家譜〕 八 百四 近藤

重勝 織部

政成 初高政、七郎太郎、信濃守、從五位下、

重直 百千代、織部、致仕號道休、母ニ柘植氏の女、

政成 實は堀左衛門督秀政ウ四男、母ニ某氏、天正十六年、越前國北庄小生也、重勝ウ養子也、なり、慶長五年三月、としめて東照宮小拜謁也、時に十三歳、

元和四年六月二十二日

四七五

元和四年六月二十二日

四七六

れより御小姓より列し、御膳番をばとむ、小山、關原等乃御陣に供奉を、八年二月、京師をい、從五位下、信濃守に敍任し、二十五日、將軍宣下御拜賀として御參内のとら扈從に、九年四月五日、父より舊領一万石をたまふ、十五年、松平越後忠俊より所領を沒收せらるゝ乃とら、政成より領知を信濃國高井、美濃國安八、山縣、石津、中島五郡の内よりけり、此ち大坂兩度此御陣に、永井右近大夫直勝より組に屬して從ひたてまつる、元和三年五月二十六日、領知乃御朱印を下され、四年六月二十二日卒を、年三十一、如然宗愚太清院と號し、湯島此海禪寺に葬る、此ちこの寺を淺草よりけり、室生駒讚岐守一正より女、まゝ柘植氏の女を娶り、

重直 元和四年十二月十三日、おしめて台徳院殿に拜謁を、時七歳十六日、重直幼稚あるより、父より遺領のうち、信濃國高井郡川中島より五、五千石をたまへり、寄合より列し、その餘五千石此地を、伯父堀美作守親良よりたまへり、重直成長より、この處で、親良後見あるへきむを仰出され、乃ち采地を同國伊那郡よりけり、略

〔寛永諸家系圖傳〕七十 近藤

重勝 四郎右衛門

正成 七郎太郎、のち信濃守と號せ、

重直 織部

正成

越前の北庄より生れ、實は堀秀政が七男なり、○本書正成は作り、又秀政ノ七男ト爲スハ誤ナラ、天正六年八月十一日、重勝やしあひて子とら、重勝越後の國よりきり、大坂の城西の丸におゐる、東照大権現に拜謁し、おてまつる時、重勝が先祖の事をとらせとほふ、重勝言上し、おてまつりけり、いとく、そは、尾州の住人九十郎といふもの、孫也、幼少此とらより孤とれり、お、しこ流浪せしむるゆへ、く、はし、事は、そんし、は、お、つら、は、ま、さ、を、て、仰よ、いとく、汝が祖父九十郎は、尾州愛智郡高圃たかのぼ此城を治り、忠節をいとす、治、お、ま、に、お、ま、當家譜代のものなり、汝子あらば、お、し、は、お、る、べきとの嚴命をかうぬる、これより、慶長五年此春、正成十三歳より、榊原式部太輔康政より奏者をもつ、大権現に謁し、お、ま、つり、今年小山ならひ、關原の陣より供奉に、幼年より大権現の御膳番をつとむ、慶長八年此春、正成十六歳より、從五位下より敍せられ、信濃守に任せ、同九年四月五

元和四年六月二十二日

四七七

元和四年六月二十八日

四七八

日、正成、大權現の命によりて、父重勝○下略舊邑一万石を領せ、○下略寛政重修諸家譜七百六堀親良美作四年十二月六日、美濃國山縣郡のうちをいて、五千石を加へ賜はり、○上

〔譜牒餘録〕五十四堀周防守 覺

堀左衛門督秀政二男祖父堀美作守親良

一元和四年戊午十二月十六日、被爲召、台徳院様上意こ而、美濃國伊自良、長間兩村こ而五千石御加増、拜領仕候、

〔飯田堀家譜〕信濃美作守親良、○中元和四年戊午、弟近藤信濃守政成卒ス、領地

一萬石ノ内、五千石ヲ幼子百千代ニ賜ヒ、親良勤勞アルヲ以テ、五千石ヲ増賜フ、美濃國伊自良、長間ノ地○下略

○政成家ヲ嗣グコト、慶長九年正月二十四日ノ條ニ、秀忠ヨリ、領知ノ朱印ヲ受クルコト、元和三年五月二十六日ノ條ニ見ユ、

二十八日、乙酉秀忠、淨土宗諸法度ヲ知恩院ニ下ス、

〔知恩院文書〕○山

淨土宗諸法度

○條文略ス、元年七月二十四日ノ條ニ收ムル知恩院文書ニ同ジ、

右三十五箇之條々、可被相守去元和元年七月日先判之旨者也、仍如件、

元和四年六月廿八日 (秀忠) (花押)

知恩院

○家康、淨土宗諸法度ヲ知恩院、増上寺等ニ下スコト、元年七月二十四日ノ條ニ、秀忠、淨土宗諸法度ヲ増上寺ニ下スコト、二年十一月是月ノ條ニ見ユ、

二十九日、丙戌諒闇ニ依リテ、大祓ヲ停ム、

〔土御門泰重卿記〕二六月廿九日、丙戌晴、(水無下向)皆月御祝義、○下略御祓

調進無之候由承及候、觸穢之故云々、上古ハ、御服之内、御輪、御祓有之様、日記見畢、不審之事也、

〔附録〕

〔土御門泰重卿記〕二六月十六日、癸酉、晴、今日東國へ皆月祓持小作人足

兩下申候、八足臺ニ輪ヲノスル也、輪ハワラニテマキ、少ツ、茅ヲ上ニマセ

ル也、又其上ヲ厚帟ニテハル也、其ヲ二ツニ折ハクル也、ソレヲ八足ノ臺ニ

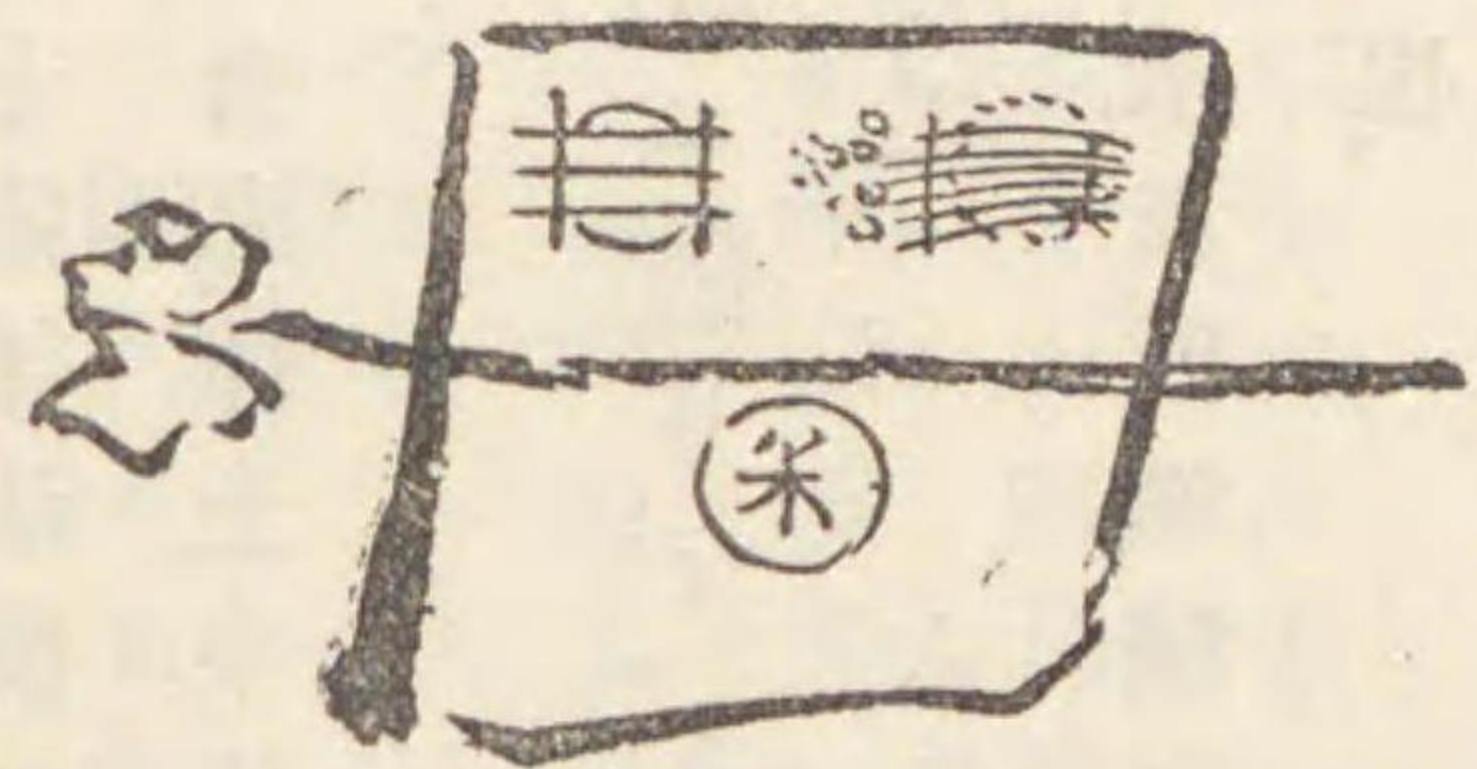
元和四年六月二十九日 四七九

祓輪ノ作
リ方

元和四年六月二十九日

四八〇

スユル也、甲ニハラ也、(箱カ)四方ニハ土器三ツスユル也、左繩フトクナヒテ、三筋二所ユイテ、三寸六分ニソロユル也、又ホソク一スチニテ、先キヲ輪ニシテ、是モ左繩七ツ、其内一ツ輪だけスキイタシ、七筋ヲ一ニユイテ、是二トコロユウ也、三ツ土器ニ、二色ト洗米ヲ入テ、四方スユル也、毎年之事也、



是カ四方ノ心也、コトクニスユル也、



七ツ合也、



三合スル也、此フトさナリ、

是月、島津家久、京都所司代板倉勝重ニ請ヒテ、醫師壽德庵玄由ヲ招キ、父惟新義弘ヲ診セシム、近衛信尋等、玄由ニ託シテ、書ヲ家久ニ贈リ、其疾ヲ問フ、

〔薩藩舊記増補〕

〇薩摩 家久公御譜中

惟新病不平快、因家久贈使書於京都

(代板カ)

所司板倉伊賀守勝重、乞官醫、則使壽德庵法印下于薩、時近衛信尋公賜六月

三日之華翰於家久矣、

〔薩藩舊記増補〕

〇薩摩 義弘公御譜中

元和四年六月廿一日、戊寅申時京都醫

師壽德庵下著于加治木也、是亦爲醫予之疾病也、

〔寛政重修諸家譜〕

百八

島津義弘判髮號

(元和四年)八月二十一日、玄由法印を下

されて、服藥せし知らる、略上

〔島津家覺書〕

向〇日

(元和)一同四年六月、惟新病氣略依而、醫師壽德庵玄由仰を

蒙りて罷來り候、

〔薩藩舊記増補〕

家久公御文庫三番箱中ニ在リ〇薩摩

返々、御心盡共被案入候、

壽德庵下向之事候間、一書申入候、抑兵庫頭不例未然之由、定而御心盡与察

玄由加治木ニ著ス

元和四年六月是月

四八一

元和四年六月是月

四八二

入候、兵庫頭（朱カキ）後、以愚札申入度候へ共、未申承、其上病中如何与無其儀候、可然様（朱カキ）頼入候、便宜急候故、書中不具候、猶追而可申入候、（近衛信榮）（花押）

元和四年六月三日

松平薩摩守とのへ

〔薩藩舊記増補〕

正文 家久公御譜中

猶々、兵庫様御煩、無御心元候、御吉左右所仰候、

壽徳庵下向之由候間、一書申入候、先日兵庫頭殿長々御煩之由承、御機遣奉察候、不及申義と御座候へ共、御養生之事專一と奉存候、近々と御座候者、細々御見廻可申入物をと、心中計よて候、頓而御快氣候様と奉悦候、猶期後音時候、恐惶謹言、

元和四年

六月四日

西洞少納言

時直判

松平薩摩様人々御中

〔薩藩舊記増補〕

家久公御譜中ニ在リ

猶々、爰許相應之御用等可被仰付候、次と鞠一顆、令進獻候、御慰と可被

飛鳥井雅
胤家久病
義弘ノ病
ヲ問フ

遊候、以上、

宗順被罷下候間、一書申入候、其以來者不能幸便、以書狀も不申候、内々可爲御上洛候處、兵庫頭入道殿依御違例、御在國之由、御尤と存候、不及申候へ共、御養性被成專一と奉存候、拙子も去閏三月下旬、江戸へ罷下、當月初比罷上候、（胤家）日傳奏、廣橋兼勝等出府、（胤家）閏三月二十五日、江戸こても、於西丸御鞠御座候キ、此比禁中も毎日御鞠被遊候、御噂ちとも被仰出候、猶御上洛之節、萬々可得賢意候、恐惶謹言、

元和四年

六月十三日

胤胤

松平薩摩守様人々御中

〔薩藩舊記増補〕

胤胤家久公御譜中

元和四年八月十六日、（胤胤）壬、壽徳庵歸京、

故進銀子百枚、及小性已下十三人、亦昇銀子也、

〔薩藩舊記増補〕

胤胤家久公御譜中

報謝之幣物及金銀等於壽徳、添護送使、八月十六日還洛、時投書翰所司勝重、（胤胤）通使壽徳歸、則勝重亦有回復矣、

〔薩藩舊記増補〕

家久公御譜中ニ在リ

元和四年六月是月

四八三

玄由歸洛
ス家久銀百
枚ヲ贈ル

元和四年六月是月

四八四

板倉勝重
家久ニ義
弘ノ輕快
ヲ賀ス
家久明春
出府セン
トス

去月十六日之御狀到着、拜見申候、惟新様御煩御驗氣之由、尤目出度存候、就其壽德庵爰元まで被入御念、被得御意、忝存候由申候、誠拙者式迄大慶存候、來春江戶へ可被成御下之由候間、其刻以面可申達候條、不能詳候、恐惶謹言、

板伊賀守

朱カキ
元和四年

九月十八日

判

松薩州様 御報

以上

本多正純
家久ニ義
弘ノ輕快
ヲ賀ス

尊札拜見、忝奉存候、仍惟新様御煩ニ付而、醫師之儀、板伊州迄被仰入候之處、則壽德庵其地被罷下、無御由斷御養生被成候故、此比被爲得御快氣候由、誠以目出度奉存候、御紙面之趣懇申上候、然而此表相替儀無御座候之間、御心安可被思召候、何も此地相應御用可被仰付候、不可奉存疎略候、委細伊勢兵部(直書)少事可被申上候條、不能一二候、恐惶謹言、

本多上野介

朱カキ
元和四年

十月十一日

正純判

松平薩摩守様 貴報

○秀忠、書ヲ義弘父子ニ贈リテ病ヲ問フコト、及ビ義弘父子、伊勢貞昌ヲ使トシテ之ヲ謝スルコト、閏三月二十五日ノ條ニ見ユ、

元和四年六月是月

四八五

是夏、幕府、陸奥盛岡城主南部利直ニ歸國ノ暇ヲ賜フ、

〔南部家記録〕

八 差取棹御鏡炮拜領之次第

供連ノ先
筒持筒ニ
猩々緋雨
革ヲ用フ
由來

○上略、利直、秀忠ニ黄鷹ヲ獻ジ、差取棹トイフ鐵（元和四年）、同年之夏、御暇被仰出、在所
炮ヲ賜ハルコトニカ、ル、正月七日ノ條ニ收ム、（寛政重修諸家譜）
ハ罷下候節、右由緒を以、先筒持筒共ニ、猩々緋雨革相用之、（寛政重修諸家譜）
所見

信濃小諸城主仙石忠政、江戸ニ參勤ス、

〔改撰仙石家譜〕

四 世譜 二 忠政 公譜

元和四年戊午夏、小諸城を發して江戸ニ參

秀忠使番
ヲ板橋ニ
遣シテ忠
政ノ著府
ヲ稿フ

觀之、發途、著府共ニ、著府の三板橋驛まで上使（御使番）を以て、時の物一種
を賜ハレ、後剋ゆる、登城を爲し旨上意あり、たゞちニ登營して、懇命の
忝きを拜謝之、（此後參府の度毎ニ如此し、○寛永諸家系圖傳、寛政重修諸家譜所見ナシ）

七月

大 丁亥 盡 朔

一日、左傳分類、詩經大全等ヲ、土御門泰重ニ賜フ、

〔土御門泰重卿記〕

二

七月一日、丁亥、晴、從禁中、御書籍左傳分類、（八册、詩經

大全、（二）、書集註、（四）、詩文集、（三）、不足本、（一）、拜領也、

三日、御日出度事例ノ如シ、

〔言緒卿記〕

七月三日、己丑、天晴、

一 禁中御日出、事ニ言總參了、

〔孝亮宿禰日次記〕

五

七月三日、己丑、晴、禁中御日出度事有、御盃忠利參仕、

〔土御門泰重卿記〕

二

七月三日、己丑、晴、禁中御日出度事也、

〔附錄〕

〔時慶卿記〕

五十四

七月二日、天晴、暑甚、一 内義ハ寶珠へ目出度、（一）被出

候、

六日、雨天、甚降テ晴、一目出度、（一）勘局ニ在候、朝先下人衆被聞候、一 於石

藥師日出度事、（一）寧也、

七日、七夕和歌御會、

元和四年七月一日 三日 七日

諸家ノ目
出度事

〔時慶卿記〕五十四 七月二日、天晴、甚暑、一公宴御兼題ヲ内々飛鳥井被語候、

四日、天晴、炎暑、一七夕御題御觸、加奉、

五日、天陰、朝ハ日拜、雨降、風立、一詠吟不出來、綴候、

六日、雨天、甚降テ晴、一七夕ニ詠歌、於尊前御園任受之、

〔言緒卿記〕七月五日、辛卯、天晴、

一七夕歌可致詠進之御觸アリ、

六日、壬辰、雨、

一詠進ノ書様、

星夕同詠、織女惜別和詩

内藏頭藤原言緒

わら経路をおもふ涙ハ雨ぞふりちちうへさかし天此まを波
あれハこの涙の露をさねとちて結ふよあまねきぬくの袖

○公家衆、新上東門院及ビ御生母近衛氏ノ御所ニ詣リテ、七夕ヲ賀ス
ルコト、便宜左ニ合致ス、

〔時慶卿記〕五十四 七月六日、雨天、甚降テ晴、一雨故、カチノ葉ヲ今日ヨリ

星手向
梶ノ葉ニ
歌ヲ書ス
七夕ノ禮

砂ノ物

取、貯置候、

七日、天晴、行水祓、靈符祭、并星ノ手向如例、梶ノ葉ニ、古今ノ三十七首書、其
外書共ヲ曝、一飯後、急先女御殿へ御禮ニ參上、万入殿、岩倉奎頭等、大弼伺
候也、御酒二時計也、其女院御所へ參、一盃給、時直同前、白川伺候也、今度上洛
ノ初而參會候、平松ハ直ニ陽明ヨリ政所殿等へ參上候、予ハ時直ト陽明へ
參、御盃給、又八條殿、政所殿盃給、其ヨリ予一人竹内へ參、八條殿御座候而、御
酒久謠、拍子等在候、予取持候、御兩所御機嫌候、花七瓶ニ立、其外砂ノ物等在
候、

〔土御門泰重卿記〕二 七月七日、癸巳、晴、國母様、近衛殿、同政所殿、一條殿、御

禮致伺公、皆御盃頂戴、沉醉罷歸候、

八日、御生母近衛氏、泉涌寺ニ參詣アラセラル、尋デ、アテノ宮等モ亦
參詣シ給フ、

〔時慶卿記〕五十四 七月八日、天晴、一女御殿、宮御達、泉涌寺御廟參候、万里

小路、岩倉奎等御供ト、

十一日、天晴、一泉涌寺御廟參、アテノ宮御方ヲ始、宮々達、御局衆也、輿副徳

深草蓮華
光院へ御
參詣

西洞院時
慶ノ參詣

西洞院時
直ノ參詣

元和四年七月十三日

四九〇

備後、又下人三人申付候、作右衛門申處宿へ出、遲參也、但^(マ)筈ニ合ト、勘局ハア
テノ宮被供候、泉涌寺ヨリ下向、局衆宮達ニ深草、^(マ)院へ御參候、

〔附録〕

〔時慶卿記〕

五十四

七月十日、天晴、泉涌寺へ御廟ニ詣、御燒香申、二十疋、蠟

燭五十持參候、於方丈小漬出、但飯後故、氣色ニテ有酒、御代々ノ御筆、又勸進
帳ヲ披見候、

十二日、天晴、一少納言ハ泉涌寺へ詣、後ニ竹内刑部少輔預使候、同心シ度
由候^(マ)、一昨詣候由返答候、

十三日、^(マ)出羽米澤城主上杉景勝、法令十一條ヲ家中ニ頒ツ、

〔上杉年譜〕

四十九 景勝二十九

七月十三日

條書ヲ出シ玉フ、諸士軍法大細共ニ

堅ク守リ、武備ノ吉凶前度申上ヘシ、凶事出來ノ後、他日誹謗ノ沙汰此アル
ニ於テハ、罪科ニ所セラルヘシ、諸事組中相談シ、得失ヲ考ヘ、事ノ宜キニ從
ヒ遵行スヘシ、銃炮ハ武備ノ第一ナレハ、^(箇カ)筒ノ大小ニ限ルヘカラス、其外兵
具等ニ至ルマテ丈夫ニ調ヘ、軍事ノ稽古油斷スヘカラス、銃炮玉藥、十文目
筒以上ハ百放、五文目筒ハ三百放貯ヘ所持スヘシ、鎗ハ二間柄ヲ用ヒ、長陣

軍法ヲ守
ルベシ

備方ノ吉
凶ハ豫メ

申上グベ
シ

雜説ヲ稱
ズ

組中ニ相
談スベシ

萬事兼日
申付クベ

自身急度
嗜ムベシ

短慮不和
等ノコト

ラアルベ
カ

ニモ、損壞ナキ様ニ心カケヘシ、武具ハ結構ニ綺靡ヲ致サス、風雨ニ遇フテ
モ、其損敗ナキヲ要トスヘシ、腰差打物ハ目ニ立様ニ用意スヘキヨシ嚴旨
アリ、其條書云、

條々

- 一 御軍法大細共、堅可相守之事、
- 一 御備方吉凶共存候通、其外上下之唱、前方可申上候、惡事出來以後誹謗
之沙汰、佞人罪科不輕之事、
- 一 萬事付而、雜説申出者於有之者、不移時刻致糺明、其法度可行之事、
- 一 捻而御家中之爲惡事、見除聞除致聞敷事、
- 一 自然用所之時者、組中相談、考得失、宜方付而可行之事、
- 一 萬事兼日堅申付、自然不屈之者有之者、前方可致言上、到御用之時、越度
出來候者、申分不可有之事、
- 一 自身急度相嗜、組中爲誠、無油斷所肝要也、無由存遺恨、佞人不可有之事、
- 一 或理不盡出短慮、組中成不和、或溫和過而、可理事不理而、凶事出來候而
者、可爲曲事之事、

元和四年七月十三日

四九一

鐵炮ヲ稽古スベシ

二間ノ鎗ヲ用意スベシハ實用ヲ重シズベシ

燈籠ノ注文

元和四年七月十五日

四九二

一 鉄炮者不限大小、筒其外諸道具丈夫拵置、於武前御用相達候様、不斷稽古嗜肝要之事、

附、玉藥、十文目以上者、一挺付百放充、五文目者、一挺付三百放充可所持事、

一 鎗二間之中身、柄共入念丈夫申付、長陣不損様可致用意之事、

一 馬上武具無結構、見所好様丈夫可拵候、無用之費致之、損一風雨、重而不立用様候事可相止候、腰差打物目立候様、可心懸事、

附、步行者笠、母衣、腰差等、輕薄無之、實目可相調之事、
右條々堅可相守之者也、

元和四年七月十三日○上杉編年
文書同ジ

十五日、辛丑孟蘭盆會、

〔時慶卿記〕四十四 六月十日、天晴、一玄琢（野間）へ盃臺、又禁中御燈籠ヲ詔、

〔時慶卿記〕四十五 七月一日、丁亥、天晴、暑甚、一道和へ燈籠ノ下地ノヲ申候、

二日、天晴、暑甚、一燈籠ノ用ニシ（シ）トニテ買得、

下燈籠
小燈籠

四日、天晴、炎暑、一御燈籠申付候、道和來、下燈籠二、ス（ユカ）物二、又小燈籠一、已上物數五出來、

九日、天陰、夜霧、又大雨、一徳長次來、燈籠ノ義對談候、

十日、天晴、一燈籠之事ヲ長清兵与平松作候、

十一日、天晴、一終日燈籠申付候、長清兵衛、平松等請合候、書籍重タル所也、晚ニ出來、下燈籠御長次へ申付而張候、

十三日、天晴、暑太、一燈籠如嘉例奉、本草一部有帙、又素問一部重タル所也、平松ハ金銀ノフンドウ三ツアリ、一アテ宮御方へ、燈籠ハ蝶舞等（ウ）菊三本、

長次來作也、一多門ニ與兵衛燈籠、キリ（コ）予モ一昨日遣候、

十四日、天晴、暑甚、一禁中へ時直、時興參上如例年、又持（ツ）セ等在之、

十五日、天晴、暑太、一善詰迎遣ノ來、御灯籠見物申候、

十六日、天晴、暑太、晚ハ曇、涼、一御燈籠返拜領、書擔子也、平松ハ雙六盤也、

〔土御門泰重卿記〕二 七月十三日、己亥、晴、昨日南禪寺返事、大御乳人へ申

入候、則予清涼殿御掃除ニ參候、御前へ召具、良西堂様子御尋、具ニ申上候、御燈籠進上申候、

元和四年七月十五日

四九三

清涼殿ヲ掃除ス

與兵衛燈籠切子燈籠

上燈籠ノ獻

洛外ノ萬
燈籠ナシ

燈籠見物

生靈祭

蓮飯

元和四年七月十五日

四九四

十五日、辛丑、晴、朝參申候、燈籠見物仕候、

十六日、壬子、朝晴天、午雨、洛外万燈籠無之、諸人不審也、

〔孝亮宿禰日次記〕五 七月十三日、己亥、禁裏御燈籠忠利獻之、

〔附錄〕

〔慈性日記〕二 七月十四日、晚ニ火ヲ見物ニ參候、又皆々同宿共遊興ニ出

度候由申候へ共、不用と申候、御酒のませ候、

十五日、火ヲ見物參候、内衆内までおとり候て遊候へと申付候、不しいひ、御

酒のませ候、

〔時慶卿記〕五十四 七月十四日、天晴、暑甚、一生靈祭如例、

〔鹿苑日録〕六十 七月十五日、日亞相賜蓮飯一包、酒一對、

京都所司代板倉勝重、花火ヲ獻ズ、

〔孝亮宿禰日次記〕五 七月十五日、辛丑、晴、板倉伊賀守花火進上云々、

廿一日、丁未、小雨、今宵禁中有花火、

〔土御門泰重卿記〕二 七月十五日、辛丑、晴、禁中ニハ花火有之由承及候、

廿一日、丁未、晴、晚爲花火見物朝參申候、

〔時慶卿記〕五十四 七月廿一日、朝雲、午天晴、暑太、一禁中ニハ花火多趣、板

伊賀守申付而懸御目ト、予ハ不出、南庭陣座候而也、

〔附錄〕

〔時慶卿記〕五十四 七月十六日、天晴、暑太、晚ハ曇、涼、一花火ヲ平松張行、

十七日、卯大和長谷寺宥義音女、寂ス、

〔豐山傳通記〕中本 第三世宥義和尚傳

經歷

和尚名宥義、字玄音、俗姓佐竹氏、水戸之産、年志學、早有絕塵之操、性好閑靜、不

妄結交、遊必擇方、且辭恃怙、求入釋門、親鍾愛過絶、屢怡面諫之、遂止社務寶鏡

院、剃染稟戒、受具之初、關左訪尋、預聽講筵、天正三乙亥春、跋涉根嶺、歸日秀、賴

玄等者宿、修習密乘、雪螢不怠、飽浴玄提、同丙戌春、十四年隨專譽僧正、登醍醐山、謁大

僧正堯雅、傳授祕藏、又於洛平等寺、隨性盛和尚、相承兩部大法及儀軌等奧祕、

天正十九年辛卯冬十月十一日、盛公有附法狀、其略云、宥義僧都、受生於佐竹種姓、得

度於寶鏡密室、早躋根嶺、又登南山、朝翫教相、夕拾事相、莫恒列講論席、決擇

超倫、立義自在、如似迦旃延之風、當世無比之器宇、後代希有之機發、吾高祖大

師附法機根、凡出三類、真宥義、宿植深厚、攝三根、具一身之士也、扣予陋室、志求

元和四年七月十七日

四九五

性盛ノ附
法狀

佐竹義重
ニ聘セラ
レテ常陸
寶鏡院ニ
住ス
長谷寺ノ
内訖
長谷寺ニ
住ス
家康ニ二
條城ニ二
謁ス
長谷寺ノ
法度

法、如渴飲、感其篤信、三寶院正嫡、憲深之一流、傾底密付、又師前遊法隆寺、聽俱舍唯識、學梵網戒本、通幽微、進止儀身、至專譽僧正主豐山、命師住喜多坊、慶長三戊戌春、佐竹常陸介義重、邀延師於水戶邑、董社務席、恢建法幢、接誘四來、關左學士、喁喁慕化、作遭佛想、寶鏡勃興、斯時為盛矣、義重仰崇倍前、增社領地、以賑僧厨、義重先義篤、寶鏡開基、大壇主、故累葉為外護矣、慶長十四己酉秋、性盛掩化、土州空鏡、潛住小池、偽云承師讓、西藏院丹州秀盛、一時之英髦也、衆多慕之、惡鏡潛偽、秀算、元壽等士、離衆退散、遂有兩黨、各訴於駿府、廼徵鏡對論、真偽鏡辭窮理屈、杜口不酬、既負恥而退于勢州山田庄、神君降令曰、法主應選戒臈、稱首、天縱宏才、勿用黨為、于時師住水戶寶鏡院、衆胥議推舉之、乃蒙命、跋豐山、董主席、是同十五夏六月也、冬闡講場、徒衆塵集、心服如艸靡風矣、辛亥春、師欲東行而奉謝之、神君三月六日上洛、乃命（常陸）本光國師、諭師俾候幕下、師即至京、謁見于二條城、待遇優渥、侍坐移漏、時有命、問長谷興起之來由、及菅靈影現與喜山之事迹、且其紀年日曆、師應對如流、辭辯懸河、殆等諳誦載籍、繇神君解頤喜感、近臣列侯、嗟歎強記矣、慶長十七壬子秋、有命赴駿城、十月四日、拜賜封戶及一派軌矩之殊印、實當時殊恩、後裔美榮也、同月廿七日、師與智積院祐宜胥議、

月輪院ニ
退隱ス

諸徒學業、歷年二十、當帶能化印章、主寺院等數條、格定制、布示諸國、蓋是非道德高揚萬世、聲光震耀八隅之一舉歟、元和乙卯秋、師復詣駿府、廼命啓論筵於城中、其對論、一時義龍秀算、元壽、俊賀、祐長等、問難數番、師通釋無礙、悉盡幽顯、神君傾耳深嘆、恩賜備臻、師囑近臣曰、齡餘從心、倦接稠衆、早欲休隱、願乞鱗選次補、退還長谷、秀算乃蒙鈞命、進院主豐山之職位、至丙辰春、師讓主席、隱于月輪院、雖至流金之暑、折膠之寒、足不跨閫者三稔、而定慧雙修、專歛放心、身心安靜、掩然而化、時是元和四戊午七月十七日也、壽七十有三、

○宥義、長谷寺北坊ノコトニ就キ、空鏡ヲ幕府ニ訴フルコト、慶長十五年、年末雜載、訴訟ノ條ニ、金地院崇傳、宥義ヲ本多正純ニ紹介スルコト、同十七年五月十三日、幕府、小池坊ニ寺領ヲ寄附スル條ニ、家康、長谷寺ノ法度ヲ定ムルコト、同年十月四日ノ條ニ見ユ、

十九日、中務少輔土御門泰重ヲシテ、御講書ニ侍セシメ給フ、

〔土御門泰重卿記〕ニ

七月十九日、乙巳、晴、御番、午、倉橋朝參也、予宿參候、御前召候、學文被成候、はんとの仰也、予御とき可仕候、由仰候、畏之、由御請申上候、

御研學ノ
勸慮

元和四年七月二十四日

四九八

二十日、雨、午晴、予朝參、御衣御風之め御取置也、予(通村)中院御前ニ召候、錦繡段御習被成候、夜更退出申候、

二十四日、庚戌新上東門院、陽光院三十三回聖忌ノ御法會ヲ修セラル、

〔時慶卿記〕五十四 七月廿一日、朝雲、午天晴、暑太、一女院御所へ御見舞也、

廿四日、御法事御用意御取紛也、雖然食在之、花平ノ御用意候、予モ助候、

廿三日、雨天、女院御所見舞申候、對屋導師青蓮院殿、凡僧山門衆也、廿人也、

早懺法也、齋非時、切々御振舞在候、一中御(龍也)ヲ初而各被召也、著座ハ襲計也、

花山、轉法輪、廣中已上、奉行ハ廣辨兼賢朝臣也、

廿四日、天晴、未明ニ出仕、直垂也、平松ハ早參、束帶也、女院御所ニテ、陽光

院御三十三年忌ノ御弔也、庭儀ノ曼茶羅供也、樂人廿人、旗已下歷々ノ義也、

十代弟子等在之、日出已前ニ初、九時分ニ了、其各退出、中御門、予ハ相殘、奧ニ

御酒アリ、五辻、中院等モ被召ト、二條殿、近衛殿、鷹司太閣、八條殿、伏見殿、

條殿、其外、照門、竹門、三宮、御方、曇花院、御方、御師弟子、光照院殿等、又宮之御方

奧間ニ御座候、其席末ニ陪有披露、五辻發聲、白川、中御門大、予等在之、謠ハ無

之、後陽成院御一周忌ノ中ハ無之ト、仍此義計也、但此披講人唱歌等ノ

不可然義也、但廣大先日唱歌ヲ被申故、今日如此ト、導師御布施、唐織被物一重、華山大、又一重ハ三轉法輪大納言、次僧正、一重ハ廣中、其次又華山被引、正學院僧正、次惠心院僧正也、其外ハ雲客引也、凡僧廿人也、名家ノ衆、雲客皆引也、其外ノ衆モ勿論也、道場ノ中、南北四間、東西ハ五間也、一衆會所、巽ノ角ニ構也、是ヨリ執綱、執蓋也、執綱ハ堀川康阿野少將、執蓋ハ極藤、一末ハ以下闕ク、

廿五日、天晴曇、一女院御所へ珍重申入、使者帥殿迄申云々、

〔土御門泰重卿記〕二 七月八日、甲午、晴、從廣橋頭辨觸折紙到來候、予加奉

畢、書様とめ申候、來廿四日、於女院御所、陽光院三十三回忌被行之條、散花役

可有參勤者也、月日、兼賢、花山大、轉法輪大、廣橋中、別也、烏丸辨、竹屋、正親町權

少、平松、西坊城、樋口、予、山科、姉小路、五辻左馬頭、

廿三日、己酉、中女院御所へ倉橋被參候、御法事懺法也、陽光院御弔也、雨天

也、

廿四日、庚戌、晴、一番追出時、分女院被參、導師青蓮院、日出、院參、予、遂長、光賢、光

長、公景、奉仲、季俊、時興、散花役也、定熙卿、總光卿、公廣卿、著座也、康胤朝臣、公福

元和四年七月二十四日

四九九

元和四年七月二十四日

五〇〇

極薦執綱、執蓋役也、天氣、法事終焉、目出度候、

〔孝亮宿禰日次記〕

五 七月五日、辛卯、雨風、入夜猶烈、來廿四日、於女院、有曼

茶羅供、奉行頭右大辨兼賢朝臣、導師青蓮院門跡也云々、

六日、壬辰、雨降、

來廿四日、於女院、奉爲陽光院卅三回聖忌、可被行曼茶羅供、執蓋役可令參
仕、宿紙拂底之間、重而以一通可申候也、

七月五日

兼賢

極薦殿

廿四日、庚戌、晴、於女院、奉爲陽光院卅三回、被行曼茶羅供、導師青蓮院門跡、執
綱堀川中將、阿野少將、執蓋藏人小槻忠利、

〔弘誓院孝記〕

一 七月廿四日、庚戌、晴、奉爲陽光院卅三回聖忌、於女院、被行曼

茶羅供、奉行頭右大辨兼賢朝臣、導師青蓮院門主、○官公事抄同ジ

〔華頂要略〕

門十四傳二十五 圓智院二品法親王、諱尊純、六月七日、從女院

以御文、來月廿四日、曼供導師事被仰出、同廿一日、大佛師左京江御忌佛申付、
七月二日、女院御所道場內見行向、今日懸屋立柱也 同月四日、御下行銀子壹貫八百

青蓮院尊
純女院御
所道場

宿紙拂底

ヲ見分セ
ラル御下
行銀鞍馬
寺力者

目被渡之、自奉行廣橋頭辨被定之、同月十七日、山門回章遣之、同日、鞍馬力者
申付、申子細、同月十九日、鞍馬力者之事、故障申之間、以書翰申遣所司代許、即
有請文、

從青門樣御書拜見仕候、鞍馬地下中江御用被仰付候處、難澁申之旨、被仰
下候、奉得其意、則折紙進遣候間、定而可罷上候條、其節急度可申付候、此等
之趣、宜預御披露候、恐々謹言、

七月十九日

板倉伊賀守

勝重判

鳥小路治部卿殿

□月□日、從所司代鞍馬地下中江下知文、

急度申遣候、先年鞍馬門前田地御改之時分、青蓮院殿寺務被成候由、相國
樣江申上候ニ付、寺務御使被成、人足之儀者如先規可仕旨、堅被仰付候處、
今度於女院御所御法事御座候故、似合之御用被仰付候處、難澁申由承候、
今日早々罷上理可申候、於油斷者、曲事可申付候、以上、

十月十九日

板伊賀印

元和四年七月二十四日

五〇一

元和四年七月二十四日

鞍馬地下中

尙々、鞍馬寺僧衆も、先年之様子者可被存候處、一段不審候、急罷上理可申候、以上、

爲善按、此消息可爲七月十九日歟、女院御所御法事者七月廿三日也、雖月不相應、記于茲、凡傳寫之誤歟、

同月廿三日、參女院院新上東門、陽光院三十三回御忌、御逮夜早懺法勤導師、同廿四日、御正當庭儀合行曼供、執行爲導師、讚衆廿口、同廿五日、給一重、帷子二重、葩二十枚、折三合、諸白三荷等、從女院賜之、御使中川、奉行廣橋頭辨兼賢朝臣、

布施

(朱頭書)曼供御布施、

正覺院 銀一枚、酒一荷、葩十枚、

惠心院 同一枚、杉原十帖、葩十枚、

淨教房 同一枚、葩十、

極樂坊 銀廿匁、葩十、

福泉房 同斷、

長壽院 密嚴院 松禪院 日光院 法輪房 寶園院 圓常院

惠光坊 普賢院 西樂院 寶泉房 光聚房 吉祥院 皆同斷、

十弟子之内、自山七人分、鳥目一貫四百文、

行事大藏卿、銀三枚、

〔附録〕

〔時慶卿記〕

四十四

六月十五日、天陰、雨ハ止、竹田御門跡ニ、陽光院御三十

三回忌ノ御追善施、餓鬼アリ、兼日ノ召ニテ參勤候、常ノ施我鬼ニ替、太長イ

ナリ、錫杖、又懺法等モ交、粥、齋、大酒ナリ、山門衆、常教坊、惠心院、密嚴院、極樂

院等、又大原殿、以上十二人、導師門主(入道良親親王)ナリ、願文殊勝ノ義也、

十六日、天晴、竹門へ昨御禮以使者申入、

十七日、天晴、照門御使來、廿日、陽光院三十三回忌御法事可聽聞旨被仰下

候、則御請申入、又晚ニ參上候、諸白二折、香齋ヲ獻、三宮御方へモ香齋ヲ上、御

酒給、

廿日、暑甚、一照門ニ、陽光院御追善三十三回御弔有論議、十四人、證義

一人、其外ナリ、人天有少善否題歟、兼約申入參候、但其以前ヨリ鞍馬へ立願

ノ義御理申置候、聽衆、八條殿、門、照門弟子、三宮御方、廣大、正親三、雅樂頭、

元和四年七月二十四日

五〇三

照高院入
道興意親
王法會ヲ
修セラフ

曼殊院入
良親鬼
王施餓鬼
ヲ修セラ

元和四年七月二十四日

五〇四

久世、岩倉木工、中川等、不二庵、柔長老、昌琢等ナリ、其外紹由、慶純等ノ衆、其次ニ候、一論問答ノ問久シテ、三人計ニテ午刻ニ成候、粥齋アリ、朝ヨリ御酒繁シ、予ハ午刻ニ立候、
廿一日、雨天、雷鳴、一八條殿御使、廿四日可參旨、御請申入、一照門へ御禮、又八條殿へ以使者申入、
廿四日、天晴、一八條殿ニ陽光院御三十三回ノ御弔御八講アリ、山門衆也、人數ハ、

題者 惠心院

一座

講師 惠光房

問者 正觀院

問題 天女所散花、答可直界内外ニ

二座

講師 西樂院

問者 法輪坊

三座

講師 圓滿坊

問者 吉祥院

四座

講師 榮住院

問者 蓮藏坊

五座

講師 密嚴院

問者 福泉房

問題 法身說法、私ニ記、法身ニモ説法有子否ニ義也、有落居也、

六座

講師 松禪院

問者 正明房

七座

講師 玉藏房

問者 花藏院

八座

講師 日光院

問者 正光院

問題 家光三身、(家カ下向シ)ルカ無歟ト云也、在

著ニ候、

此外五座ハ引論義計ナリ、

一聽衆、簾中ニハ御所三宮御方、照門、竹門、廣大、万入、正親三、中、予、阿野、五辻等、殿上人ハ簾縁ナリ、時直、阿野少將、雅樂頭、中川、久世等也、東福藤長老、柔長老、玄琢法眼、昌琢法橋、其外地下ノ衆、新在家衆等、又宗問、紹由、慶純、了俱等ナリ、講了テハヤシ五六番、又能アリ遊屋二番アリ、(遊行御、八島カ)其後各謠、亂酒ニ成候、朝ハ御粥、又齋肴被下、種々ノ義ナリ、各取持候衆多候、薄暮ニ退出候、

〔智仁親王御記〕

一 六月廿四日、陽光院三十三年法事、惠心院講師論義アリ、

〔代々先皇法語集〕

陽光院卅三回忌 曼茶羅供、元和四年七月廿日、

開眼

重被開眼、供養給金剛胎藏兩部、万茶羅諸尊聖衆、大日如來、三摩耶形、并被造

元和四年七月二十四日

五〇五

立供養虛空藏菩薩尊像一軀、尊像青蓮慈悲御眼、各令爲奉令五眼具足、佛眼眞言、一丁、爲四種法身、四種曼荼羅等、恒沙万德、成就圓滿、大日眞言、一丁、

表白

表白

敬白、眞言教主大日如來、金剛界會、殊能滿所願、虛空藏尊一百餘部、金剛乘教物密嚴國上、不可說々々々、三寶境界驚而言、方今當陽光院贈大上天皇卅三回之御忌、奉進出苦證樂、轉凡入聖位、召入數口律侶、莊嚴无相法席、修大曼荼羅之祕法御坐事、其旨趣如何、夫分段有漏之境、誰可遂一別之再會、反易无常國、何不沉戀慕之愁乎、松樹千歲梢終不期万年之綠、槿花一日榮、何可得夕日之陰、非情草木皆示無常理、假合人倫爭免有爲悲、爰陽光院贈大上天皇者、受難受人尊生、得難得儲君、現在福報既備貴種、未來果位豈得卑民、雖然壽齡不滿、其恨是深、早世難留、此歎豈輕乎、嗚呼光陰不繫、卅三回之御忌早來、德音无聞、一千餘日過、爰信心大御施主、修密宗甚深之曼供、祈尊儀御得脫、若余者大上天皇尊儀者、煩惱雲忽晴、實相覺月明、罪障霜速消、無上惠日朗、御願歸本、故大檀越、壽域長遠、分保龜鶴千歲之遐齡、階下繁昌、分繼子孫万代之榮貴、觀夫岸頂老松風靜、嚴會場寶蓋、山谷雲霧遠拂、顯眞如覺月、景色既自然、大施主

所願无疑、乃至法界平等利益、敬白、

次願文、今度之次揚經題、抑摺寫御經、先可奉拜首趣、先取新寫經、不解持左手構、南无大樂、金

剛不空眞實三昧耶經、僧衆同開經、揚經題名、南无々々々、

次發願、經右手持之、香呂金一丁、謹而發願、至心發願、摺寫妙典、開題供養、所生功德、天衆地類、倍增法樂、過去尊儀、頓證菩提、護持檀主、悉地圓滿、

及以法界、平等利益、

次五大願、衆生无邊畢、

過者尊儀成等正覺、一切諷誦、ト云テ經ヲ四五行可讀之、此時諸衆開經、微音一枚許讀之、次

止經、丁、金一次讀諷誦文、次發願、次四弘、次佛名、次教化、三下ノ全クナラシテ、

兩部ノ諸尊ヲハ驚シ奉リケル、一心ノ懇念ニ答テノ尊儀ハ、六情ノチリヲ

吹拂ヒ玉フヘキトコソ思ハンヘルケリ、

回向大菩提、一丁、次說法、

上來以所修善根、先資尊儀御菩提、若然者、發魂、茶藥肴饈者、以三輪清淨之

手、捧法喜禪悅食者、受一味平等之心、乃至不情積善於自界、令施餘慶於他方

者也、敬白、

元和四年七月二十六日

五〇八

次神分、抑三寂修行所、追福作善、爲法味、食受功德、證明冥衆定來、臨影向覽、然則欲色無色諸大天王、散地定地所有天衆、日本朝主天照大神、殊八幡三所、御部類眷屬、乃至自界他方權實二類、併爲法樂莊嚴、威光倍增、一切神分、大、次五悔、

同諷誦

敬白請諷誦事、

三寶衆僧御布施

右陽光院殿贈大上天皇正雖當來月、今第卅三回之御諱、以修善、急爲精進波羅密、故預就此藍、屈請十方僧侶、修理趣之祕法、夫聞遙拜兩部曼荼、滅俱胝劫之罪障、纔臨輪壇、領無數億之法財、若余尊儀、凡字不生之月、普照長夜之昏衢、文字清淨之水、速洗煩惱之垢染、仍諷誦所修如件、

元和四年六月廿四日

施主敬白

二十六日、壬子蝦夷松前邑主松前公廣ノ老臣松前利廣、不軌ヲ圖ル、是日、逃亡ス、

〔松前家譜〕

乾松前系譜

慶廣 小字天才丸、又新三郎、後稱民部大輔

盛廣 又甚五郎、小字松房丸

利廣 異圖發覺、不知所終

由廣 異圖發覺、見殺、○由廣大坂ニ通ズルコト、慶長十九年十二月二十六日ノ條ニ見ユ、

公廣 小字竹松丸、又甚五郎、初諱茂廣、又武廣

〔松前家譜〕

乾松前家記一

七世公廣

七月、松前利廣、異謀發覺シ、海ヲ踰テ

亡ク、○寬政重修諸家譜所見ナシ、

〔松前家譜〕

坤松前家記附錄二

慶廣十一子

男利廣、初名ハ行廣、小字ハ龍丸、松前長門守ト稱ス、妾出ナリ、人トナリ豪邁ニシテ、武技ヲ善シ、傍ヲ書及ヒ醫術ヲ能ス、初メ南部信濃守利直ノ養子トナル、遂ニ協ハスシテ歸ル、乃チ藩政ヲ掌トル、元年四年七月廿六日、異謀發覺シ、海ヲ踰テ逃ル、終ル所ヲ知ラス、○松前家略家譜同ジ、

〔松前舊事記〕

○松前舊事記所載

同四年、○中

松前長門利廣、反逆令露顯、七月廿六

日、日本國へ逃渡る、

三十日、丙辰鷹司信房ノ第三子某、定覺三寶院義演ノ附弟トナル、是日、入寺

元和四年七月三十日

五〇九

〔義演准后日記〕二十

二月廿二日、予附弟之儀、板倉伊賀守仰遣了、

七月十六日、若公御入室之儀、得御意、則鷹大閣御成日取之儀、來晦日治定了、

御迎可進否申入處、本式里ヨリ被送由仰也、尤之由領掌申了、誠鹿園院殿御

同車ニテ法身院准后御入室也、依其先例、普光院殿御同車ニテ、義賢准后御

弟子政深僧正御入室也、今度公卿殿上人可爲御供奉由治定了、

十七日、早朝入寺、御入室來晦日治定了、此由門家候人中不殘仰聞了、

廿一日、二條殿ヨリ御書、御入室出入被仰下了、

廿二日、鷹司殿江以兩使侍從申入、御樽三荷、索麵五十把、一折、粽一折、五十牛

房一折、銀子拾枚、左府江、杉原十帖、段子一卷、御兒江、沈保多、一、硯箱、文孔雀、金

銀カナカヒ、ナシ地、短尺箱、ナシ地、文菊、金銀カナカヒ、三色進之、政所へ綿卅

把、御乳人へ銀子一枚、綿三把、御侍中へ二百疋、爲祝儀進之了、兩使ニ御引、銀

子一枚、杉原五束ツ、被下、人夫ニ二百疋被下了、

廿三日、雨、大道垣馬場拂除、門内如形出來了、一獻書立、昨日出來了、御膳ハ七

五三、金銀ノ用意也、公卿殿上人并院家、皆相伴用意也、

板倉勝重
供奉スベ
キ旨ヲ義
演ニ通ズ

廿七日、來晦日、御入室御供ニ可參由、伊州被申候、仍俄用意猶仰付畢、入室御
案内、以廣橋頭辨禁中申入畢、珍重被思召由、勅答、祝著々々、又鷹司左大臣殿
以愚札申入之、以御内證、可被申入由也、

大閣若公附弟之儀、俄申定、來晦日入室候、此由内々被經叡慮候者、可爲恐

悅候、尙以奉行可申上候、恐々謹言、

七月廿七日

義演

左大臣殿

廿八日、大雨、伊賀守可來由、本望趣、以愚札仰遣了、方々樽進上、別紙ニ在之、

廿九日、屬晴、及晚降雨、明日一獻、從昨日悉用意、初獻、ホウ二獻、サウ三獻、ウ四獻、

五獻、六獻、七獻、御膳七五三、湯ツケ、土器以下以薄タミ畢、銚子、提裏口、

御供侍三百膳用意之、膳棚方々ニ構之、雜人ノ膳不知數、奉行人以下載張文、

今日銘々仰付畢、

進上樽之事、盃臺等、出世坊官悉進上之、隨心院ヨリ嶋臺物、金銀作物、結花、御

樽濟々、勸修寺門跡ヨリ盃、嶋臺、金銀載四方、金、玄、繪、理性院進上凡同、成身院

進大臺物、金銀、寢殿北廣縁構假棚置之、數多種々進上、別紙在之、

元和四年七月三十日

五一一

奉行人ヲ
定ム

覺定入寺

行粧

元和四年七月三十日

五二二

晦日、若公御入寺辰刻、先最前所司代板倉伊賀守來、先對面、齋相伴、次既渡御
 由注進、伊賀守早々御迎ニ罷出、松橋僧正、理性院法眼、報恩院法眼、出世坊官、
 侍以下、悉御迎ニ出畢、御成行粧事、先雜色廿人歟前行、次□□次御輿、細代、
 次布衣、次侍烏帽子、百餘人、次退紅笠袋、次公卿兩人供奉、廣橋中納言、總光板輿、雜
 色前行、侍以下笠袋持等、次清閑寺宰相共房、行粧如中納言、次殿上人、藤谷少將、乘
 輿、行烈次第凡如公卿歟、慥不知、次所司代伊賀守長五人爲警固御供、數十人
 騎馬、京都見物猥雜云々、當郷々民等成郡了、寢殿立砂ノ通ノ間、江寄御輿、于
 時藤谷少將褰御簾、先予出逢、常御座所へ成畢、暫御休息、御膳先進之、公卿殿
 上人、先於書院供御、良家衆相伴、漸綺已、若公御出、公卿殿上、并松橋僧正、理性
 院法眼、金剛王院藤丸以下著座、板倉伊賀守殿上人ノ次ニ著、次盃、陪膳報恩
 院法眼、鈍色裳、袈裟、手長侍從、上座、經信、宰相、寺主、先御禮、廣橋中納言ヨリ、予
 ニ二荷三種、曆々、若公、江杉原十帖、扇進上、次清閑寺、若公予へ進上同、次藤谷
 兩所へ進上同、次伊賀守、予三荷三種、曆々、若公へ馬太刀進上、次松橋僧正、若
 公へ十帖一本進上、次理性院、報恩院、金剛王院、良家輩不殘、次出世成身院、密
 嚴院、西往院、岳西院、阿彌陀院、金蓮院、光臺院等不殘、十帖一本進上、衆徒ニハ、

三寶院ニ著ス

晴ノ御膳

寶幢院ヲ始テ、山上山下一人不殘、十帖一本進上、先坊官大藏卿法印、宰相法
 眼、侍從、上座、兵部卿、寺主、大貳、侍ニハ對馬、三河、和泉、男黨ニハ、北村主水、飯田
 左近始テ不殘、十帖一本、其間漸及半刻歟、尤嚴重ノ體也、珍重々々、綺已、晴ノ
 御膳ヲ進ス、若公、予前倍膳、陪下同シ報恩院法眼、手長侍從、兵部卿、公卿倍膳、坊官大貳、
 侍和泉、次殿上人、良家倍膳、男黨、次盃、先若公進之、其盃予賜之、予盃若公進之、
 若公盃中納言賜之、清閑寺已下召出、次第賜之了、次新盃、若公進之、板倉伊賀
 守被下之了、湯進之、陪膳力御膳撤ス、次菓子進之、爰伊賀守退出歸京畢、公卿以下暫
 休息、次一獻進之、初獻ホウサウ、七獻如常了、公卿退出、頻抑留進供御、被傾數
 盃、及晚歸京、

風流見物

八月朔日、屬晴、早朝松橋、理性院并出世坊官不殘出仕、於寢殿、若公御對面、陪膳
 網緣、悉御盃拜受、及數人、嚴重、珍重々々、從御里御所、或杉原廿帖、綾二端、或十
 帖、綾一端、良家ヲ始テ、山上山下學侶并出世坊官、侍ニ至テ、不殘拜領、男黨ノ
 侍、承仕、力者ニ至テ、或單物、帷子一重、或帷子一重、悉被下之、今日大略賦之、次
 及黃昏、良家并出世ヨリ風流、若公御見物、御機嫌也、
 二日、山上山下學侶并中方不殘、饗膳賜之、數盃及音曲、折嶋臺以下、

元和四年七月三十日

五二三

入堂始
日=依リ
延引ス

元和四年七月三十日

五一四

三日、山下寺家役人并良家内衆披露ニ至テ、悉振舞、亂酒、音曲、今日兒御所御入堂始、但依黒日俄延引、
四日、西笠取家、次勸修寺村長共、當郷番匠、悉召テ膳被下之、沈醉及狂言了、東寺年預、惣寺ヨリ三荷三種、曆々進上、先若公御對面、次嵯峨法輪寺、兒御所江沈香一包、予ニ三教指歸一部進上、御對面已後、東寺年預以下書院ニ出テ、供御賜之、

入堂始

御入堂始、御半尻、前張御著用、被乘手輿、拜殿高座疊ヲ取テ敷之、先例也、松橋僧正へ指南入魂了、扈從理性院(總務)小僧都、同先例也、至長尾宮、被用手輿、金剛王院兒御供也、良家出世坊官不殘共奉了、於兩社御神樂、御膳下行、金堂誦經如常、

〔孝亮宿禰日次記〕

五 七月卅日、丙辰、雨降、鷹司大閤御所息三寶院門主御

弟子、今日御入室也、廣橋中納言、清閑寺宰相、共房、藤谷少將等供奉云々、

〔華頂要略〕

三四 百四十 諸門跡傳一 覺定大僧正 元和四年七月三十日入室、

○覺定、義演ト共ニ參内ノコト、便宜左ニ合致ス、

義演覺定
鷹司信房
ヲ訪フ

〔義演准后日記〕

二十 八月九日、來十二日御參内、御樽、荷物等卅餘荷上了、

十一日、辰刻兒御所同道出京、先著宿坊、板輿ノ體堅固、内々ノ體也、鷹司大閤江爲禮罷向、杉原廿帖、銀子五枚、樽三荷三種、政所へ杉原廿帖、銀一枚、御乳人(脱カ)青銅二百疋、御内衆へ青銅五百疋、綿十把、左府へ三荷三種、杉原卅帖、女三樣

二條昭實
ヲ訪フ

九條忠榮
ヲ訪フ

參内

へ三荷三種、杉原廿帖、綾一卷進之、於大閤一獻并非時御振舞丁寧也、出世坊官侍ニ至テ、悉御禮、十帖一本各進之、同御振舞召出、御盃賜之、次二條殿亭へ兒同道罷向、太刀一腰、馬代三百疋、御方御所へ卅帖、杉原、綾一卷、三荷三種進之、一獻在之、已後御振舞種々、及深更、次九條殿亭へ罷向、十帖一本、樽三荷三種、同御内儀へ樽三荷三種進之、一獻在之、

十二日、雨、辰刻屬晴、參内、兒網代輿、力者十四人前行、山上不動坊官前駟四人、大藏卿法印經運、紹宰相法眼長運、侍從、上座、經信、大貳、寺主、次御輿、次後御侍二人、對馬法眼、三河、上座、次烏帽子上下著侍五十人、退紅笠袋持、次四五間隔テ、

予四方輿、力者八人、前駟坊官二人、退紅笠袋侍廿餘人、次金剛王院兒共奉、板輿上下侍十餘人、白丁笠袋持一人、次理性院小僧都、次報恩院小僧都爲扈從、共奉力者、前行白丁、笠袋持以下如常、塗輿也、行粧如形、内裏西御門ノ前雨垂

元和四年七月三十日

五一五

出御

覺定新上
東門院ニ
伺候ス
御生母近
衛氏ニ伺
候ス

覺定ノ入
寺ニ先チ
其座所ヲ
造作ス

ヨリ、二三間置テ立輿、于時扈從理性院兒御簾褰之、予御簾ハ報恩院褰之、各共奉、清涼殿南階ヲ降テ、廣橋中納言、中御門大納言、白川其外堂上數人出向、不著鬼間、直經殿上、儀丁所ノ次間ニ著、無程出御、廣橋中納言申次、先兒御禮被申、御太刀一腰、折紙、大高檀紙ニ書之、馬代千疋、長橋へ納之、次予御禮、大高檀紙一束、大段子一卷進上、退出、各降庭上被送了、予直ニ歸宿坊、兒御所ニハ女院、江御出、御樽三荷三種、杉原五十帖進之、御對面、御盃在之云々、御懇志過分々々、次女御へ御出、進物同前、依爲御不例、無御對面、兒直ニ里御所へ御歸、共奉人裝束納長櫃、予歸寺、無爲無事、珍々重々、廣橋大納言、同中納言、清閑寺三木藤谷、何モ太刀一腰、馬代銀子一枚宛送之了、但兒御所ヨリ被遣候也、予ハ最前樽三荷三種遣之了、中御門大納言、白川、杉原十帖、扇一本遣之了、

〔附錄〕

〔義演准后日記〕二十 四月廿四日、鷹司若公御座所書院ノ北、今日作事仰付畢、御入室内々支度也、二條殿下、鷹司大閣、近日御同道、江戸御下向也、依之先延引、御上洛已後早々可申沙汰内意耳、昭實、信房、江戸ノ條ニ見ユ、五月二十一日、五月三日、書院作事、

勸修寺門
跡寬海覺
定ヲ訪フ

大乘院門
跡信尊覺
定ヲ訪フ

隨心院門
跡增孝覺
定ヲ訪フ

板倉勝重
ヲ訪フ

六月九日、書院小壁塗始之、

十二日、大風吹、雨不降、書院張付始、

廿三日、書院白土付始之、

八月五日、飯田衆御樽進上、御對面、盃被下之、勸門跡渡御、兒御所へ御單物、一、御帷子、二、被參、不寄存知御懇情也、於書院御膳進之、醍醐村男、次不殘振舞、及大酒畢、

六日、大乘院渡御、兒御所御舍兒也、三荷三種、杉原卅帖、予ニ賜之、杉原十帖、段子一卷、兒御所へ銘々曆々御音信也、先一獻進之、次御膳、次索麵、次風呂燒、今日者抑留可申心中ノ處ニ、風呂ヨリ直ニ被謀テ御歸、驚入畢、

七日、大乘院返禮トシテ、杉原卅帖、錦一卷、兒御所綿十把、予御内衆因幡へ帷子一重遣之、

隨門渡御、團扇兒へ御音信、風流在之、

十三日、所司代伊賀守在伏見云々、

十四日、早朝出京、板倉伊賀守、江兒同道、太刀一腰、馬代千疋、兒杉原五十帖、段子一卷、予遣之、鷹司大閣ニモ御成、同道申了、一獻種々也、内衆御入室ノ時、

御供衆へ、金子八郎兵衛へ太刀、銀子二枚、板倉八郎左衛門、川那部八右衛門、福長重大夫、多賀重介、太刀、銀子一枚宛遣之、荒木三四郎百疋、傳衛門五十疋遣之、神泉（新）蘭坊主杉原廿帖、綾一端、百疋、翌日遣之、

今日在京、二條殿へ罷向了、大閣、兒御所同御召請、種々御振舞、及深更了、十五日、未明歸寺了、

勸修寺門
跡寬海覺
定ヲ招ク

廿五日、從勸門御使、明後廿七日可有御召請、兒同道可申由也、畏入由返答、廿七日、勸門罷向、兒御所昨日ヨリ御不例、漸御出、暫時頓而御歸、予ハ跡ニ殘

ツテ終日遊山、亂舞在之、松橋僧正、理性院并出世坊官、凡不殘被召、御懇情至難述耳、

快癒ス

廿八日、雨、兒御所御不例同篇也、

廿九日、終夜大雨降、可出洪水歟、兒御所御驗、珍重々々、

九月朔日、理趣三昧勤行如恆、兒御所齋相伴、祝著、

四日、時雨、從仁和寺御室御使、御樽一荷、折賜之、兒御所御對面、

成身院ヲ
訪フ

十八日、晴、兒御所始而成身院江御成申了、良家并出世坊官悉御供也、銀子一枚、杉原十帖、樽五荷三種遣之、御前相伴、松橋僧正、金剛王院兒、理性院、報恩院

宰相坊ヲ
訪フ

也、數獻及音曲、千秋万歳、珍々重々、

廿日、陰、宰相坊へ兒御所初御成申入之、魚可進上用意也、仍良家并出世不及御供、只世間者計御供也、銀一枚、杉原十帖、樽五荷、肴三種遣之、御膳以下丁寧云々、珍重々々、傾數盃、御供輩沈醉了、

廿一日、晴、大師御精進供如常、理趣三昧勤行如常、

兒御所心經始奉授之、昨日魚御受用如何、仍御行水、令洗浴給、

廿五日、晴、理性院來、廿九日兒御所御成可申入由案内、珍重之由返答了、

廿九日、陰、御陵詣如例、予參詣、山下學侶皆參、役者同參了、錫杖、理趣三昧如常、

御陵詣

昔ハ例時モアリ、定堂宇在之歟、

理性院ヲ
訪フ

午刻兒御所、予、理性院江御成被申、樽五荷三種、杉原卅帖、銀遣之、松橋僧正、金剛王院兒藤丸院主水本相伴、御膳丁寧也、土器薄ニテタミ了、一獻、搆數獻、折并盃臺已下結構也、及亂舞、京都ヨリ上手共罷下了、

十月十日、光臺院祇候、來廿一日御成申入度由申、則領掌畢、

十六日、雨、屬晴、兒御所初而御成、予同、松橋坊去年已來作事、今度俄廊假建立云々、樽五荷、肴三種、并杉原貳十帖（幣）、銀一枚、送遣之、左道々々、午刻御成、先一獻、

光臺院ヲ
訪フ

梶井門跡
入道最胤
親王ヲ訪

始メテ上
ル醜ニ登

金蓮院ヲ
訪フ

次御膳三ノ膳、土器金銀タム也、理性院、報恩院、兩小僧都、松橋僧正、金剛王院、
兒藤丸、御前祇候、相伴及數獻、剩音曲、黄昏歸坊、珍重々々、
十八日、晚雨、兒御所御出京、ル、○下略、禁中猿樂ノコトニカ、
ル、本月二十二日ノ條ニ收ム、
廿一日、出京、二條殿へ參、○中及黄昏、梶井門跡へ兒同道罷向畢、種々御懇情、
深更歸宿坊了、女御様へ御樽代三百疋進之了、
廿四日、晴、二條殿へ罷向、梶井宮、大閤相伴了、歸寺、
廿八日、於鷹司齋御振舞、殿下光儀、終日閑談、御逗留、
廿九日、早朝歸寺、佛事如恒、
十一月二日、兒御所御歸寺、

八日、護摩結願如常了、登山、兒御所初而同道、入堂引導了、光臺院御成申入、先
一獻了、次御膳、丁寧也、松橋僧正、金剛王院兒、理性院僧都、報恩院僧都相伴、獻
之了、暫休息後、予發句、氷ヲヤ音シツカナル谷ノ水、脇、僧正、第三、堯政法印、五
十韻、訖、燒火、種々馳走、及深更、仍一宿翌朝、齋、良家輩相伴、又一獻了、下山、樽五
荷三種、杉原廿帖、銀子遣之、左道々々、
十五日、金蓮院兒御所初而御成申入、仍樽、如光臺院目錄也、相伴衆同前、但仙

西往院ヲ
訪フ

密嚴院ヲ
訪フ

菩提寺ヲ
訪フ

法橋坊ヲ
訪フ

殿上人御前祇候、相伴、則發句、上人申、鐘ノ聲、僞ル雪ノ夕哉、脇、予、遠山松ノ風
サユル庭、第三、松僧正、捲上ルスタレニ月ノ影落テ、三吟、出世坊官披官至悉
御共也、一人不洩、光臺院へモ同前也、
廿一日、兒御所、予西往院へ御成申入了、良家輩御供不殘、終日丁寧、珍重々々、
樽、如金蓮院、演慶アサリ、灌頂護摩開白、於阿彌陀院壇建之、
廿六日、薄雪、密嚴院へ御成申入畢、樽、如例遣之、良家相伴如常、出世以下悉祇
候、

十二月七日、菩提寺、江始而兒御所、予御申、良家輩悉相伴、出世坊官、侍以下不
殘御供也、從是樽、銀以下、出世へ如遣也、
十二日、井内侍從法橋坊へ、御兒御所御成申入了、金剛王院兒御供也、魚類進
上、仍出世輩相除之、世間者計御供也、樽、銀以下如常、

是月、秀忠ノ世子竹千代、光家藤堂高虎ノ第二臨ミ、風流躍ヲ觀ル、

〔寛政重修諸家譜〕

九百 藤堂高虎 和泉守 ○上 (元和)四年、○中略、秀忠、高虎ノ邸

ノ條ニ收ム、七月、大猷院殿にも渡御ありて、風流乃躍を御覽にそふ、此
ち兩御所居邸に成せたまふよとまへり、○下

〔伊勢 藤堂家譜〕二 藤堂氏事蹟一 高次 (元和四年) 七月、大納言家光亦臨焉、並賜時服、銀錠、

〔高山公實錄〕三 四十 同七月、大猷公來臨し給ふ、公及世子ふ時衣、白銀を賜ふ、

御系譜、同年七月、大猷院様、高虎宅へ被爲成、風流之躍上覽有之候、於御前、高虎、高次御時服、白銀拜領仕候、宗國史同

幕府、伯耆黑坂城主關一政ノ家中内訌ノコトニ依リテ、封邑ヲ褫ヒ、其子氏盛ニ近江蒲生郡ノ地五千石ヲ賜ヒテ、寄合ニ列ス、

〔寛政重修諸家譜〕五 百 關

世系

盛信 中務大輔、安藝守、號萬鏡齋、今の呈譜はしめ盛信後宗一につくる。

某四郎

一政 四郎、右兵衛、長門守、從五位下、

盛吉 初政盛、勝藏、主馬首、

某早世、

某千勝、早世、

氏盛 兵助、安藝守、兵部少輔、從五位下、致仕、號自閑、

經歴
蒲生氏郷
= 屬ス

豊臣秀吉
= 仕フ

關原ノ役
徳川家康
= 通ズ

一政 母は定秀の女、某年、伊勢國龜山に生る、のち蒲生飛驒守氏郷に屬し、其後陸奥國白川に城に住せ、天正十九年、豊臣太閤陸奥國追討に從ひ、九戸比城を以て戦功あり、乃ち東照宮平泉におもむき給えんとく、三關をすねたまふるとは、御書をあらひし御使をたまふ、文祿四年、從五位下長門守に敘任し、慶長三年、蒲生秀行の封を下野國宇都宮より遷さるゝ、乃ち召され、終て豊臣太閤に仕へ、信濃國川中嶋に在りて三万石を領し、乃ち美濃國土岐多良ふうに遷り、五年、關原陣の時、一政兼て加藤左近將監貞泰、竹中丹後守重門、稻葉右京亮貞通父子と共に、石田三成を催促し、應じ、大山の城兵を加ふといへとは、貞泰兼て三成に宿意あるふよ、重門等を議し、東照宮の志を通し、をてまひる、一政を其列に在りて、別心をた旨を言上し、是よりして先陣に諸將を加へ、井伊兵部少輔直政の手を屬し、凱旋のち、舊領伊勢國龜山城に復し、十五年七月十九日、封地をあらせめて、伯耆國黑坂城をさみひ、二万石の地をくそへら、をるゝ五万石を領し、慶長十九年、大坂陣に從ひ、みはら兵を率ゐるゝ天満口におせ

むろひ、元和元年の役ふを、同所よ在りて、首五十二級を得たり、四年七月、家臣諍論のよよ、領知を沒收せらるゑ、寛永二年十月二十日死せ、室ハ蒲生飛驒守氏郷の女、

氏盛 實ハ關主馬首盛吉の長男、母ハ森本飛驒守某の女、一政の養子となる、慶長十五年、おし、東照宮、台徳院殿に拜謁し、元和二年、從五位下、安藝守に敍任せ、四年七月、父の所領沒收せらるゝ、乃とを、近江國蒲生郡のうちよをい、更ふ采地五千石をよまひ、寄合よ列せ、略下

〔元和年録〕

坤 一 同七月、關長門守家中ふも公事御座候而、長門守知行五

万石被召上、伯耆國、黒坂城、乍去是を知行五千石、子息兵部被下候、長門實子あく、弟主馬子を養子に仕、是を關兵部与申候、

〔御治世以後減少覺〕 元和四年七月

一 伯耆黒坂五万石

關長門守一政

右者家來騒動に付沒收、養子兵部少輔に五千石被下之、

○ 一政、伊勢龜山城ヨリ伯耆黒坂城ニ移封スルコト、慶長十五年七月十五日ノ條ニ、大坂陣ニ從フコト、元和元年五月七日、家康、秀忠、軍ヲ大

坂ニ進ムル條ニ見ユ、

〔參考〕

〔伯耆志〕

十一 黒坂村 日野郡河西上 古城 鏡山と號じ、略 慶長十五年七月

十九日、關長門守一政、勢州龜山より轉封せらるゑ、當國ふて五万石を食し、當城に移る、略 元和三年、關氏嗣子無きより、斷絶せ、黒坂開元記に、長門守、姪、主、馬、と、關

争の事ありて、斷絶せと云り、

朝鮮國、我漂民七人ヲ送還ス、

〔寛政重修諸家譜〕

一 五百 宗義成 對馬 四年七月、朝鮮回船に附して、出雲

國三尾關乃漂民七人をかゑせ、紀、宗、家、譜、所、見、ナシ、大

〔附録〕

〔光海君日記〕

百二十七 戊閏四月癸亥五日、平海郡捉倭船二隻、倭奴七名、監司

馳啓以聞、

除封ニ就
キテノ異
說

朝鮮倭船
二隻ヲ捕
フ

公家衆御
太刀ヲ獻ズ

八朔ノ御
禮

一日、丁巳八朔ノ儀例ノ如シ、秀忠、御馬ヲ獻ズ、

〔孝亮宿禰日次記〕五

八月大一日、丁巳、曇、忠利八朔御太刀進上、下札小槻忠利上、

自大樹八朔御馬進上、御使板倉伊賀守相副之云々、

〔土御門泰重卿記〕二

八月大建酉一日、丁巳、晴、國母様水さけ物進上、近衛殿、

同政所、一條殿御禮致伺公候、御對面也、雲松院へ參候、國母様より、黒塗三重箱拜領也、

四日、庚申、晴、御番、將軍進上御馬、板倉ヲイノ三郎左衛門御庭ニテセメ（サセサ）セサ、御覽也、一卷十帖被下候、國母様より、御樽御肴拜領申候、

〔言緒卿記〕八月大一日、丁巳、天晴、

一言總當番代ニ參、從幕下御馬如例御進上、板倉伊州被參云々、

一板倉伊賀守へ諸白兩樽、如庵へ壹樽、速水長門へ帷子壹ツ遣了、

四日、庚申、天晴、

一少將、板倉伊賀守へ罷向、單物壹ツ進物也、

〔時慶卿記〕四

八月大一日、丁巳、天晴、禁裏へ御太刀上、平松同上、御返則

西洞院時
慶新上東
門院及ビ

御生母近
衛氏ニ物
ヲ獻ズ

三寶院義
演八朔ノ
祝儀ヲ板
倉勝重ニ
贈ル
神龍院梵
舞八朔ノ
禮物ヲ板
倉勝重ニ
贈ル

在之、戴之、女院御所へ御錫鉢ニ葡萄ヲ入テ上、御返ハ鉄ノ手燭臺三給、女御殿へ小錫二對上、御返檀紙一束、間鍋二ツ、當年初而獻候、右衛門督へ醬一桶遣候、何も無御對面、御對面所ニテ予、時直ハ御祝盃アリ、各ハ少々無之、申置テ退出ノ躰也、一陽明御對面、御盃、八條殿同、政所殿同、竹門同、二條殿、鷹司殿同、申置候ハ九條殿、鷹ノ女三宮御方、大聖寺殿ハ禁中へ御參ト、一條殿同、兩傳へ申置、廣大へハ、板倉伊賀守、將軍御使同心ノ被參候、爲見舞ニ行、對顔候、

〔附録〕

〔義演准后日記〕二

七月廿七日、八朔祝儀、板倉伊賀守江青銅貳百疋使遣之、

〔梵舜日記〕一

七月廿八日、雨降、午刻晴、○中次板伊州へ八朔之禮、予五百文、荒木山四郎、二十傳右衛門、一皮鞋金子八郎兵衛へ團扇二本、令持參了、

四日、庚申、仁和寺門跡入道覺深親王、江戸ニ下向シ給フ、是日、江戸城ニ於テ、秀忠ト御對面アラセラル、

〔時慶卿記〕五

七月十七日、天晴、暑炎少、晚ハ風立、曉ハ霽也、（綾小路高也）一綾ニ聞、

歸京

仁和寺殿ハ江戸御下向ト、(總綱ノ夫人、皇子ノ以、御座)中山後室今日遠行ト、門跡ハ無御存知ト、

〔本光國師日記〕二十 一同四日、仁和寺殿御禮、○金地院崇傳、コ、時江戸ニ在リ、

〔華頂要略〕仁和寺 諸門跡傳一 入道一品覺深親王 (元和四年) 同年八月廿四日、

自江戸上洛ト、○下向ノコ、所見ナシ、

六日、壬戌、京都六角堂火アリ、

〔時慶卿記〕四十 八月六日、天晴、夜半後、六角堂回祿、言語道斷也、人共遣

候、照門へ尋候、勝仙院無事也、曇花院殿へモ、以使者申候、門へ出白川ト立(立)、
火事間也、

七日、天晴、一女院御所へモ、六角堂ノ義申入、又後ニ自身御見舞申入、御氣相惡ト、但早速ニ能ト、一六角堂へ見廻申候、灰塵ノ體驚目、照門上ヨリ御歸ノ砌ニテ懸御目、御盃給、可祝候、○中 池坊へ立寄、本尊ノ御事ヲ尋候處、

一寸八分
後藤本尊
郎藤庄三
修造
七ル堂宇

奉取出ト、一寸八分ト哉ランノ御體ト、燒出様不思議ノ様也、今度後藤勝三郎修造仕候、如何義ニ哉、方便之御事難測、(六カ)尤角堂中ヨリ出タル火ト、門モ今度新造候、燒候、其外ハ南ノ在家坤ノ寺ヨリ北へ過半燒、

〔梵舜日記〕二十 八月八日、去六日夜半子刻、三條之六角堂炎上、廻寺在家

繪馬

類火、十家計燒失也、彼堂連々依破損、後藤庄三郎造修、悉出來之處ニ、御堂繪馬ヲ兩替町之者共多懸之、夜入迄續松、蠟燭ナトニテ、大工共懸之、其續之火クスニテ炎上候由申也、一條院之御時造替之由申了、

〔孝亮宿禰日次記〕五 八月六日、壬戌、晴、曉六角堂炎上、觀音像奉取出云々、

八日、甲子、後陽成天皇ノ御法會ヲ般舟三昧院ニ修セラル、

〔孝亮宿禰日次記〕五 八月八日、甲子、雨降、今日於般舟院、後陽成院御佛事

被行懺法、大原衆出、仕云々、著座、西園寺中納言、日野宰相、光慶、殿上人飛鳥井中將雅胤、藏人小槻忠利、差次藏人、賢忠、清藏人、

〔附錄〕

〔時慶卿記〕四十 八月十四日、天晴、月明也、興行和漢、早天見五條少納言

來入、良西堂、不二菴、常光院、龍眠來義、不二菴ヨリ龜山酒樽一、海松一折、柿一折、常光院ヨリ蠟燭廿挺、鳥居大路熟柿一折到來候、滋野井、已上八人也、御發句、太上天皇ノ御辭世ノ御製ニテ、爲御追善ニ催候、燭以後滿、

十日、丙寅、山科言緒ヲシテ、諒闇後ノ御服ヲ調進セシメ給フ、

〔言緒卿記〕八月十日、丙寅、天晴、

西洞院時
慶後陽成
天皇御退
善ノ爲メ
天和漢聯
句ノ會ヲ
催ス

元和四年八月十日

五三〇

一言總ヲ召諒闇以後ノ御服ヲ書立上申候へと被仰下候間書立上申候、御ものゝをうと、一御ううふり、同御ゑい、一御こもとゆひ、一夏比御引なれし、同御こし、一ひの御をうぬ、一御小袖の御ふく二、以上仕候て上申候へ、則可調進由被仰出候而、從今日申付了、

廿五日、辛巳、天晴、

今日禁中ニ新調上之目錄、

一御冠、同ゑい 一御引直衣 一ひの御をうぬ 一小袖の御ふく二ハ 御あ 一ゆするの衣上 下 二 わ せ あ ふ ん 二

日記ハ別ニ進上了、

元和五年三月五日、己丑、天晴、

一去年八月廿五日ニ、新調ノ上ノ御服ノ銀子合六百卅五匁、速水長門、同安藝、手前ヨリ請取也、使大澤左衛門大夫也、

六日、庚寅、天晴、

一上様ノ去年ノ八月廿五日新調ノ菱ノ御直衣ノ代銀貳百目、錦屋宇兵衛ニ渡、皆濟也、分 一 ア リ、

御直衣ノ代銀二百目

○御服調進ノ本年中ニカ、ルモノ、便宜左ニ合致ス、

〔言緒卿記〕十月十四日、己巳、天晴、

一禁中ノ黒装束壹ツ調進案文、

くろきまやうそく壹ツ、てうきう卅め、山科内藏頭雜掌(花押)右京大夫殿ト書申候也、

十一月六日、辛卯、朝晴、夜雨、

一從禁中、冬御直衣ヲ可致調進由被仰下了、

七日、壬辰、天晴、冬至、

一昨日、從禁裏、冬ノ御引直衣調進可致由被仰出間、今朝織手中西榮久、錦屋宇兵衛、久松忠衛門三人ヲ召寄申付了、但代物を七丈、此内壹丈をひろとと也、と い り 一 尺 七 寸 也、丁銀子三百五拾目ノ代銀也、

十二月五日、庚申、雨、

一禁中冬御引直衣調進了、

廿七日、壬午、天晴、

一禁裏如嘉例御小本結進上、同御冠、木村所ノヲ上申也、使半七、

御引直衣代銀三百五十目

元和四年八月十日

五三一

是ヨリ先、肥後熊本城主加藤忠廣ノ家臣下津棟菴上書シテ、家老加藤正次、中川周防等ノ非違ヲ幕府ニ訴フ、是日、秀忠、忠廣等ヲ召シテ、其訴ヲ聽キ、尋デ、之ヲ裁決シ、正次ヲ越後村上城主堀直寄ニ、周防ヲ信濃諏訪城主諏訪頼水ニ預ケ、加藤右馬允等ヲシテ、藩政ヲ執ラシム、連座スルモノ多シ、

〔細川家記〕

忠興九

此比

忠利君追々江戸へ被仰上候趣ニ付而、七月十日、

同十九日、八月十日、同廿九日之御返書等之内、

八月十日

一加藤肥後家中二ツコトニ候候ニ付、可被成御仕置ろとさけす之由、之

れハ志申まじきろと存候事、下略

〔下川文書〕

四上野

尙々、國本之者ニ相かまはず、早々可越候、右之旨、清淨院様へ申上、急度

可相越候、以上、

急度申遣候、家中之儀棟庵目安上申ニ付而、双方御穿鑿可被成之旨候、早々可相越候、國本へも加藤美作守、加藤右馬允、并河志摩守、加藤平左衛門尉、中川周防守相越候へと申遣候、加藤與左衛門尉儀へ、相煩候ニ付而、留守居ニ

幕府下津棟菴ノ受理
棟庵ノ受
狀ヲ受
ス
忠廣加藤
正次等
出府ヲ命
ズ

忠廣家中
ノ内証

可相殘之由申遣候謹言、

六月四日

忠廣(花押)

下川又左衛門尉とのへ

〔東武實錄〕

四

同七日

加藤肥後守忠廣カ家臣等、相ヒ分レテ諍論アリ、甲

方ハ加藤右馬允、下川又左衛門、並河志摩守、森下儀大夫、庄林隼人、加藤與左

衛門、加藤平左衛門、中村將監、齋藤伊豆及ヒ捧庵等、乙方ハ加藤美作、其子丹

後、加藤壽林、中川周防、和田備中、玉目丹波、外忠廣等三十二人、共ニ江戸ニ來テ、

是ヲ訴ル、此日公ノ命ヲ奉テ、酒井雅樂頭忠世カ家ニ於テ、執事、奉行人等列

會シテ、其訴論ヲ聞ク、肥後國ノ檢使安倍四郎五郎正之、朝比奈源六郎其座

ニ列ス、

同八日、此日モ亦忠世カ宅ニ於テ、忠廣カ家臣等ノ諍論ヲ聞ク、執事、奉行人

相集テ、是ヲ評議スルト云へ共、甲乙ヲ決シ難シ、是ニ依テ、其訴論ノ兩詞ヲ

記シテ、台覽ニ入ル、

同十日、加藤肥後守忠廣及ヒ其家臣等、甲乙雙方ヲ御營中ニ召シテ、各登城

ス、公先ツ安倍四郎五郎正之ヲ召シテ、彼レカ訴論ノ事ヲ問ヒ給テ後、大廣

秀忠ノ直
裁

忠世第再
度ノ鞠問

酒井忠世
第ノ鞠問

家中ノ黨
派

元和四年八月十日

五三四

間ニ出御在テ、其訴ヲ自ラ聞給フ、酒井雅樂頭忠世、本多上野介正純、土井大炊頭利勝、安藤對馬守重信、井伊掃部頭直孝、藤堂和泉守高虎、其外奉行役人等伺候ス、其餘群士御廣縁ニ列居ス、忠廣及ヒ家臣等ヲ御前ニ召ス、閑齋(名)永喜訴牒ヲ讀ム、甲乙左右ニ分レ、一牒讀ミ終ル毎ニ諍論ス、甲方カ云ク、美作守父子猥ニ國政ヲ妨ケ、恣ニ貪ル、皆是私ノ爲ニシテ、忠廣カ爲メニ非ス、乙方是ヲ辨ヘ、屢詰シ、屢辨ル事殆ト數回ニ及フ、玉目丹波ハ、忠廣カ外舅タリ、故ニ忠廣、丹波ト同意ノ思ヒ、乙方ニ有リト云ヘ共、年少シテ國ノ政事ヲ辨ヘス、是ニ依テ、終日默然タリ、甲方又云ク、丹波守新ニ大船二艘ヲ造リ、初ハ運送ノ用ナリト云ヘ共、寅卯兩年大坂擊亂ノ時、兵船トシテ是ヲ大坂ニ合カセンノタメナリ、又齋藤采女ハ秀頼乳母ノ子ナリ、然ルニ采女肥後國ニ在リ、潜ニ彼レヲ大坂ニ遣ス、是内通ノ爲メナリ、又横江清四郎肥後ヨリ大坂ニ忍ヒ登リ、頓テ歸リ來テ、肥後ノ諸士ニ語テ云ク、大坂ノ一戰ニ、秀頼大ニ勝利ヲ得、東國勢悉ク敗走ス、故ニ家康公ハ京師二條ノ城ニ退キ給ヒ、秀忠公ハ軍ヲ引テ、伏見ニ御籠城アリ、兩君ノ敗亡久シカルマシキノ由ヲ告ル、丹波守是ヲ聞テ、甚タ悦フ、國中ノ諸士大ニ疑フ、此時奉行人等御前ヲ窺

大坂陣トト
加藤氏トト
關係トト
齋藤采女トト
横江清四郎トト
入城ス

ヒ、頻リニ詰問ス、丹波守父子等辨答ニアタハス、安倍四郎五郎カ言フ所甲方ト異詞ナシ、右馬允、捧庵等能ク訴ル、是ニ依テ、彌勝タリ、公入御アリ、列居ノ面々皆退出ス、

横江清四郎トト
加藤正配トト
次等ヲ配トト
流ス
忠廣年少トト
テ其罪ヲ以テス

同十一日、横江清四郎及ヒ其黨橋本掃部助、同作大夫三人斬罪セラル、其餘乙方ノ輩、皆所々ニ配流セラル、忠廣年少シテ、未タ政事ヲ辨ル事ナキカ故ニ、其科輕シ、是ニ依テ赦免在テ、領國ヲ除カレス、甲方右馬允等ヲシテ、元ノ如ク國政ヲ聞カシメ給フ、

謹而言上仕候、

〔向山誠齋丙午雜記〕

二十加藤肥後守家來公事一卷

一 肥後守年寄六人之内、四人者同心、美作守親子ハ一所にて、諸事談合之砌も、多分コ付不付、依怙ノミ申通り、下々迄貳ツコ罷成候、然者遠國ト申、方々境目にて御座候ヘハ、自然之時、上様御用之砌も、肥後守家中互コ身かまへこて、御奉公之筋目せうしからば御座候ヘハ、肥後守爲こも不罷成と存候事、

一大坂一卷之砌も、上様ハ、肥後守抽御奉公仕也申度と存候者共ハ、美作守

元和四年八月十日

五三五

大坂陣トト
加藤正配トト
次等ヲ配トト
流ス
忠廣年少トト
テ其罪ヲ以テス

下津棟菴
ノ訴狀
加藤正次
等ノ私曲

元和四年八月十日

五三六

親子ニ對而、機遣仕候、其子細共重々御座候、其砌之御目付衆、定而被及御覽之儀、可有御座之事、

一美濃守(作カ)親子、肥後守おち玉目丹波守、此三人肥後守爲こも不罷出(成シ)依怙の仕、上様江肥後守御奉公之道も相違仕と存、左様之儀、拙者申こ付而、肥後守は、へ萬事隔心を仕様罷成候、私儀、上様御厚恩おろそくに不存候へ、彼者共依怙仕候儀こもかまひ不申、成次第奉公仕義にて無御座候間、兎角肥後守こ暇を乞申候、何も國之年寄共一列こ被召寄、善惡之様子被聞召、何之道こも、片付於被仰付者、肥後守御奉公之筋目も成立可申と奉存候、御穿鑿之砌者罷出、如何様こも、年來存之通、可申上候、以上、

五月十一日

(棟下向シ)
捧庵

酒井雅樂殿

本多上野助殿

安藤對馬殿

土井大炊助殿

捧庵上申候目安むらき事

一多分こ不付と申上候事、何れ相談之上こ而、連判を以申付候間、多分こ不付と申候儀無御座候事、

一萬事依怙仕之由、身こ覺無御座候、玉目丹波事、ひらき時分こ可申候事、

七月廿七日

加藤美作守

加藤丹波守

酒井雅樂殿

土井大炊介殿

安藤對馬殿

本多上野助殿

謹而言上仕候、

一今度捧庵立のき申候様子申上候、肥後守家中之者共、他所參候儀、肥後守こ不理參候事、堅法度申付候處、捧庵子共、肥後守こ不相理罷出候こ付、まろり申候、然共、相田内匠助、玉目丹波守、加藤丹波、兩三人侘言申こ付、餘

元和四年八月十日

五三七

元和四年八月十日

五三八

人こ相替、棟庵子共之儀候間、今度ハゆるし候由、相田内匠助こ申付、捧庵
こ申聞候處、捧庵申候者、子共ハ夜前屋敷ヲ立のき申候、此邊誤、惣別肥
後守此節暇をもらひ可申之由、内匠助こ申候、内匠助達而異見申候得共、
捧庵合點不仕、剩肥後守物書澁谷三郎兵衛と申者、小姓伊藤吉太夫と申
者、捧庵のしつと立のき候事、

一慶長十九年、大坂籠城之刻、肥後守歸城仕候時、京都こ本多上野殿御座候
間、捧庵使こ遣被申候處、國本の下著仕、年寄、中老共、下川又左衛門所のよ
ひよも、捧庵申渡候者、肥後國御仕置本多上野殿被仰候ハ、肥後守出陣之
供、年寄之内のハ、加藤丹後守壹人、熊本之留守下川又左衛門、八代之城加
藤右馬允、佐敷之儀、加藤與左衛門、關之城丹後守留守こて候間、熊本ハ加
藤美作守罷越、留守可仕之由申渡候間、何れ奉得其意、彌右之通相究申候、
然處こ、右之段々、本多上野助殿御聞被成、肥後國仕置之儀、捧庵こ不被仰
渡之由こ候、其以後上野殿より、肥後國仕置之儀、年寄中談合を以可仕之
由、御狀被下候、の様之大分之茂、捧庵はくる事申儀、不審こ存候事、
一江戸の肥後守罷越候時、供仕候年寄共、肥後守銀子取候而つらひ可申之

棟庵ノ私

下川又左衛門
壽林ノ中川私

由申候へ共、加藤丹後守同心不申候こ付、殘ル年寄共も取不申候、らやう
成義を、多分こも不付と申候哉之事、

一肥後守銀子を、年寄共之内、年々こ過分こ借遣、終返辨無之こ付、加藤美作
守申候ハ、年をきり候て、返辨仕候様こと申候、左候ハそハ、利足を加出し
候之様こと申候、万事こ付、肥後守物取遣申度體見及候間、左候へハ、肥後
守爲不罷成候間、向後者、分限こ應し借候様こと、美作守達而申候こ付、其
分相定候、ら様之儀も、多分こ付不申候と申候哉之事、

一肥後守祝言被仰付候、則美作守使こ參候こ付、銀子百枚、年寄共分別こて
渡し候へハ、請取不申候、祝儀小袖計取申候事、忠廣、秀忠ノ養女ト婚ス
ルコト、慶長十九年四月是
月ノ條
ニ見ユ、

一加藤美作守無足之時、殘年寄共談合こ而、米千石遣候由申由候へ共、存様
子御座候へハ、請取不申候事、

一下川又左衛門、中川壽林、相奉行こて、預り藏之算用九千石こをよひ、滯御
座候、此内多分又左衛門手前御座候事、

以上

元和四年八月十日

五三九

元和四年八月十日

七月廿七日

加藤美作守
加藤丹後守

五四〇

酒井雅樂頭殿

土井大炊助殿

安藤對馬守殿

本多上野助殿

二度目之目安

上申候三ヶ條之書付理之事

一 肥後守祝言ゆい入之儀、御輿請取之事相談こ不付、美作守不しきまゝの事、

一 齋藤采女と申者、秀頼おち右京太夫、おいちら子こ仕候、古肥後守かへ召置候、先年大坂籠城之刻、大坂へ走入申候、彼者、美作守、丹後守、周防守引廻シ申者こ御座候故、大坂へ采女といり候跡、知行萬肝煎遣候事、

一 木村長門守弟左兵衛と申者、古肥後守時召置候、大坂被仰事之時、長門守弟之儀こ御座候間、大坂へ走入候義可有之と、加藤丹後守こ兩度迄心

下津棟庵ノ再訴狀

齋藤采女ノ大坂籠城

木村左兵衛ノ大坂籠城

加藤正長陣ノ大坂時秀頼ヲ好意ニ表ス

加藤正次改關原ニシモラレ底シモラレ

加藤正次私曲ノ父

付仕相届申候處、丹後守目をり申者之事候間、としらを申間敷之由、慥請乞候へ共、次之年御陣之刻、大坂へ走入申候、旁以美作守親子逆心之様こ御目付衆も御覽被付こ付而、拙者こ被仰聞段御座候事、

一大坂申事之砌、肥後守船共兵庫へ廻シ申候、大船三艘、舟子無之付而、大坂川口殘置候、右馬允申付、引出させ候歟、出候事於不成者、燒り候様こと申候處こ、丹後守、秀頼こ左程にくを請候事不入事と達而申、吉村橋左衛門、相田内匠其座こ居申候、丹後守同前こ橋左衛門も申こ付、多分背り

とく、船其儘置候事、

一下川古又左衛門所こ而、年寄共寄合之刻、立身を存候へ、證人を可捨と、美作守親子誓文こて申候事、

一 美作守大閤譜代之者こ御座候、其上關ヶ原之時、被成御改易候橋本掃部、寺西伊豫、伊駒主水、新宮安房守、う様之者、別而美作守親子目をり申候、其内新宮相果候跡こ、大坂へ遣狀出候、此外國侍返(送力)引入之事、

一 橋本掃部、井上茂大夫公事之儀こ付而、去年霜月こ、目安肥後守上申候處、玉目丹波守請取、周防こ相渡、美作守親子計こ申聞、殘年寄共こ、當年二

元和四年八月十日

五四一

元和四年八月十日

五四二

中川周防
私曲後
加藤丹

月ニ申聞を候、如此之仕合、不相届候様ニ存候事、

一 桑原少齋と申者、何後年寄共談合にて、國を拂候處ニ、殘年寄共も不存、今迄國ニ居申候、美作守親子、周防守、備中守ハ、存召置候事、

一 和田備中守、中川周防守、妹縁邊之儀、古肥後守申候筋目相違之事、

一 丹後守知行高違之事、

一 玉目丹波守ニ知行遣候時、國中より取ニ仕候、古肥後守給人之知行取上、藏入ニ付仕候をも遣候、此知行所ニハ、段々申分御座候事、

一 丹波守新屋敷取申候普請之儀、家中役目之者并諸百姓ニ申付、こし大垣外らい、まてつき、はとし、柚とめ仕候山をも切あらし、材木とらせ、并植付迄も諸百姓ニ申付、數人たりひ候故、百姓迷惑候事、

一 柴山五兵衛と申者ニ、知行高貳百五拾石あき跡可遣之候旨、肥後守被申出し、然所、三百石餘遣候、此段美作守親子、丹波ハ存、殘年寄共ハ不存候、山岡奎大夫と申者、不相届儀御座候て、肥後守知行取上召置候處ニ、于今至而所務仕候、美作守親子、周防目をうせ候者ハ、うら様之仕度盡之儀數多御座候事、

加藤美作
私曲

七月廿三日

捧庵

目安返答書之事

一 今度肥後守ニ拙者暇を乞罷出申候様子ニ付而、美作守、丹後守如申上候、家中之者、肥後守ニ不理罷出候事、法度之儀者其通御座候、然者松平下野殿、肥後守はり、織田兵部少輔所は御出候、振舞出候付而、拙者子共、うよひをもさを可申候間、めしつと見廻可申之由、兵部少輔申越候間、則丹後守こあひ申、右之通談合仕候へハ、尤他所こハ相ちうい、其上肥後守ニ目見仕事候間、參可然候、丹後も見廻申度候へ共、跡こ人も無之候間、不參之由、兵部少輔も可申之由申候條、子共めしつと參、則せうれ共肥後守前は出申候處、肥後守罷歸腹立被仕、せうれ共おひ出せ之由被申候、其段丹後守承、物書澁谷三郎兵衛を以、拙者ニ申聞候、右ニ丹後守ニ理申通をも、肥後守ニ於申聞者、肥後守も聞え申候儀も可有之哉、結句肥後守丹後ニ理可參事と被申候由ニ候、其上下野殿とへハ、肥後守用所こ者、右之一兩日已前こも、肥後守ニ不理參候、然上者丹後こことはり、肥後守ニ目見

下津棟庵
加藤家退
去ノ理由

元和四年八月十日

五四三

元和四年八月十日

五四四

被仕、兵部少輔所_ニ御座候間、くあしおちさほと存候へ共、其段丹後不申分候、う様之處を以、連々拙者之儀、さへ候段相聞候と存候、翌日相田内匠を以、此度へゆるそ之由被申候、然共、せられ共存分_ニ隙を出候處、屋敷_ニ罷居候へ者、拙者めしつ_ニ參候故、せられ共_ハとらあき通、申わ_テ度様_ニ罷成候事、迷惑_ニ存、未明_ニ罷出候、其段相田内匠迄申候處、後三郎兵衛_ニ扶持をえあし候由、丹後不申渡分_ニ仕候得と申候、左様之儀丹後_ニぞてづき、右之通有様_ニ申候儀へ迷惑_ニ存、後三郎兵衛罷出候、拙者跡_ニ而、丹後理不盡を申_ウ、糺明_ニ仕候へ者、拙者迷惑_ニ存、三郎兵衛罷出候事へ存候へ共、其分_ニ仕召置候事、

一 伊藤吉太夫と申者走候事、拙者不存候事、

一 先年大坂申事之時、肥後守、十月廿四日_ニ伏見_ヲ罷立、兵庫へ下申候、拙者儀肥後之様子可被聞召儀、又様子可被仰遣之御意_ニて、二條御城_ニ残り申候、國中城々、他國境目、道之_ノり、城持、其外證人出_シ者共被成御改候て、其段書立上可申之旨、上野殿被仰聞、其節並河志摩守伏見被召置_ニ付、和田備中守相添、攝州郡山より、多人伏見_ニ見_ニ戻り申候、然者右兩人、伏見屋敷

大坂陣ノ
時棟庵ノ
多正純ノ
命ヲ加藤
家ニ傳フ

之留守仕候横地助之丞、河本平太夫、此者共談合仕書立上申候、則_レ下野殿被掛御目、其上_ニ而被仰出者、何も今迄證人出_シ申候者、い_ハ人質可出候、境目之城々丈夫_ニ仕、熊本城_ニ人數をふ_ハと召置、何之城機遣之時も、右之うき人數遣候様_ニして、其外五百千_ニ而も、隣國立次第、肥後守大坂_ニ可參御意_ニ候、其時拙者存候者、美作守役所無之候間、肥後守供_ニ可罷上候、但親子之間_ニ候間、關之城_ニ美作守有之、わ_ハ候間、丹後_ハ御陣之供仕可然_ニと、上野殿迄申上候、尤可然思召候間、國之年寄共と相談可仕之旨被仰候、肥後守大坂_ニ罷立候へ、何_レ家中人質を取、熊本城_ニ召置、美作守事_ハ、大坂_ニ機遣存候故、人質共又左衛門_ニ預置可然_ニと存、上野殿迄拙者右之通申上候、然者河本平太夫、横地助之丞、飯田角兵衛_ハ、美作を熊本_ニ置申度と談合仕候哉、美作守熊本城_ニ無之候へ、國中迷惑之由、津田平左衛門を頼、上野殿不被仰出事を拙者申候様_ニ、上野殿へわ_ハるさ_ハ申上之由_ニ候、其_ニ付而、上野殿被成御腹立之通、河本平太夫拙者方_ニ申越候、承違無_ニ存候間、罷上御理可申之通、肥後年寄共へ申候處、右之仕置尤鋪候條、不及申分_ニと、年寄共、中川周防をえしめ申候_ニ付

元和四年八月十日

五四五

元和四年八月十日

五四六

而、堪忍仕候、其段ハ於駿河、上野殿ハ右馬允申上候處、被分聞召之由候、一昨日も其御禮上野殿ハ申上候、

元和四年七月晦日

捧庵

公事之覺

一加藤肥後守家老馬方牛方と申候事ハ、初ハ小性中間にて、少々手廻り後、こハ大小名町人迄も、二ツ成申候、雖然家老共諸事相談之時分ハ、間惡敷様も無御座候處、正月乗物之時、馬乗場にて、奥村清右衛門と申候者と、加藤太郎作とからかひ少仕候、太郎作ハ丹後弟にて、美作子にて候、宿ニ歸り、太郎作、清右衛門ニ狀を付、清右衛門宿へおしり申候を、中途にて人々おさへ、其後あつうひ相濟申候、夫より已後、彌々うづつよく成申候、其後間久敷、忠廣縁邊之儀付而、家老之内江戸へ參候様、右之縁邊可被仰渡との儀にて候之處、馬之丞ハ其身可參與申、美作ハ其身可參與申候而、むつあしく候處、あつうひよ成候而、美作參候付而、彌二ツ之わうづつよく成申候、

加藤家中
兩派マ
馬方牛方
ト云フ

種庵藤堂
高虎ニ頼
リテ訴狀
早幕府ニ
呈ス

一美作事ハ清正とハ親類と申、大閤にて傍輩ニ而御座候故、其已後肥後へ參候、是又久敷ものニ而候之故、忠廣も後々ハ美作を最層（マ）思召候、一下津捧庵と申候者ハ、忠廣御前をえおさし、奉公申候處、不出申こ付而、内々不足ニ存、江戸へ相詰、日々ニ屋敷を出、藤堂和泉守様を頼、目安を上申候、其刻肥後ニ在之家老共、江戸ハ被召寄、雅樂頭様ニ而、兩度對決御座候、其兩度之御穿鑿ハ、美作方うち申儀ニ而候、其以後御前にて御穿鑿之時ハ、右之目安にてハ無御座候而、大坂謀叛仕候様、目安作差上、其穿鑿よて候へハ、不存寄儀、又ハ大坂御陣之年ハ、肥後御目付ニ阿部四郎五郎殿、朝比奈源六殿御出御座候、此兩人を證據人ニ仕候故、兩人被仰候とく、成行ま參申こ付而、方々御預ケニ被成候、

外聞書

一右ノ書申候大坂事之儀ハ、肥後守家來ニ齋藤采女と申候者居申候、是ハ秀頼公御局之子ニ而御座候故、大坂陣之節拔出、大坂ハ籠申候、其砌美作、丹後諸事心を付、大坂へ送申、其上大坂落城已後も、上方邊ニ而逢申候と、後之目安ニ書申候、

元和四年八月十日

五四七

元和四年八月十日

五四八

一大坂事之儀を申さへ、馬之丞こへ、數多有之候へとも、美作存候へ、互よ水
うけあいこ申出、兩家老共こはぶさ候へ、肥後守身上いろうと存候故、
不申出、まきこ仕候、

元和四年八月八日、公事落著之時、方々御預之覺○本書、吟味落著ス
コトヲ八日ト爲ス

加藤正次
加藤大長
加藤等ノ
預

一越後村上堀丹後守様直卷之

加藤美作守

一信州川中嶋酒井宮内様忠勝之

加藤美作守新

當地御所替之時、其儘眞田伊豆守様信之御預、

加藤丹後守

一信州諏訪諏訪因幡守様頼水之

中川周防

右三人共こ、江戸より直こ御預ケ、

一美濃岩村松平和泉守様兼善之

和田備中肥後より直に御預、

一奥州中村相馬大膳様利胤之

生駒主水同

同子八兵衛

一奥州白川丹羽五郎左衛門様長重之

同子七郎右衛門肥後方直に御預、

寺西伊豫

同子左門

同子二郎介

同子名失念、
江戸へ證人に參居候故、江戸方直に御預、

加藤信濃丹後

同子丹後守肥後方

近藤作右衛門其時分は伊地知河内と云、

弟一人御早死之

伊地知傳六河内

同三郎同、後道齋美作子、

同加藤太郎同、

同出雲丹後庄之助、

同鶴千代後太郎作夫、

同玉目丹波

一奥州會津加藤式部少輔様明成之

元和四年八月十日

五四九

一參州苅屋水野隼人正様忠清之

一參州伊保丹羽式部様氏信之

一美濃苗木遠山久兵衛様反政之

一和州郡山水野日向守様勝成之

元和四年八月十日

一筑後柳川立花飛驒守様(宗茂)

立花三左衛門同

五五〇

一豊後舟井竹中伊豆守様(宗茂)

同 堤權右衛門

切腹

同 子權八

八矢傳右衛門等ノ切腹

八矢傳右衛門

同 子勘兵衛

同 彌兵衛

同 彌兵衛

同 橋本掃部

同 弟勘右衛門

同 横井清四郎

暇出 實父桑原念入、長坂甚五兵衛

同 弟半兵衛

同 山岡三郎右衛門

同 吉村橋左衛門

加藤正次ノ死 夫藤野氏 水從野氏 備後福山 移ル

一私親共之儀、元和四年九月、古日州様(將成)御預ケ被成候、肥後より家中の侍兩人相添、和州郡山へ參申候處、東仙寺と申淨土宗の堂頭に御入置、御家中衆に番被仰付候、翌年郡山御所替に付而、御當地に被召連候、道中之番

加藤正次ノ死 加藤正次

加藤太郎作ノ死 加藤太郎

杉浦墨右衛門、石本祖父右衛門、兩人被仰付、被致同道候、其節頼より揚里直に笠岡へ參申候、偏照寺の寺中地藏院に被爲置候、是迄を御家中衆に番被仰付候、後々ハ中川善右衛門、野間八郎左衛門、尾内平右衛門三人に定番被仰付、十日代に番被致候、笠岡に出入三年程罷在候處、福山に御呼能滿寺に御置被成候、能滿寺に一年程居申、夫より野上八幡の前を屋敷被下、御普請被仰付被下候に付、野上へ罷越、出入三十年程居申候處、此方より御願申上、能登原村に引込、十年計居申候處、廣澤久大夫不慮に相果申候付、又福山に御呼被成候、

加藤美作守正次、前近藤金十郎、後改加藤作右衛門、加藤之姓ハ、清正賜、又

院十九年、寅年、法名道喜、持妻清正、從弟、喜、院日、持妻清正、從弟、喜、

加藤丹後守正長、妻柏原常安、女、同左馬之助、妹、後加藤ト改、後妻長野三郎

加藤太郎作宗次、行辰年七十八、明曆三丁酉年九月十一日、於備後福山卒ス、

女 伊地知傳兵衛妻、近藤作右衛門母、

元和四年八月十日

五五一

元和四年八月十五日

五五二

加藤内膳 於江戸卒ス、是ハ美作人質也、妻新美權左衛門女、同八左衛門妹、

女 前田右京妻、後前田源右衛門と云、

右七人共ニ美作子也、

女 長尾左衛門妻、

加藤信濃 於參州吉田卒ス、歲寅之年、

加藤信濃ノ死歿

加藤出雲 後改庄之助、年辰ノ年、行年七十九、天和二壬戌二月十八日、於備

女 早世、後福山卒、法名法名院友閑、元祿十五壬午、貳十壹年ニ成申候、

千 後改助之丞、於信州松本卒、行年〇〇、

女 早世、

男子 早世、

右七人共ニ丹後子也、

加藤權大ノ死歿

加藤權大夫 行年八十七歳ニ而、元文四己未年、於武州江戸卒、

弟 藝州三原住居、

弟 備後小野道住居、

娣 備後住居、中山兵右衛門妻、

右四人出雲子也、

男子 早世、万助、

男子 半彌、

女子 早世、おもん、

男子 早世、俊之丞、

女子 おひこ、

男子 早世、長之介、

男子 早世、勘之丞、

右七人權太夫子也、

〔加藤肥後守忠廣之事〕

一加藤肥後守忠廣家老共公事之起リハ、忠廣九歳之時、父肥後守清正死去、家中之仕置、家老共心次第ニ仕候處ニ、其モヨリノニ、我儘成事共多カリシト也、然處ニ、津田兵部少輔殿ハ常眞御牢人故、肥後守清正ヘ常眞御預置被成候、清正知行二千石出シ申サレ候、則下津棒庵（下向）比清正懇志故、肥後ヘ下ル、知行二千石、〇久我家譜所見ナシ、聲ナ

加藤家内訌ノ原因

元和四年八月十日

五五三